1992年1月20日発行（毎月1回20日発行）第10巻第12号　1982年6月18日第三種郵便物認可

自立した女と男を　人間らしい生活を　差別のない社会を
育み 創り出す

新しい家庭科

We
ウイ

逐次刊行物
平 4 年 1 20 成
立婦人教育会館
婦人教育情報センター

10周年記念号

2.3
1992

特集　男女共生の道を拓く

季節のうた

仙田敬子

雛人形

雪解けの
しづく輝き
君いとし

新しい家庭科 We ウイ
1992年2.3月号　通巻116号

・特集・
男女共生の道を拓く

●役割を生きることから
関係を生きることへ　やぎみね　2
●関係を生きる男　中村　彰　6
●男はどこまで
家事に参加できるか　羽生康二　10
●〝日ソ図書〟の
性差別賃金を問う！　野村美登　13
今、男女共学が危ない　稲垣光江　18
「れふぁむ」の三十年　正路怜子　20
女性フォーラムに
参加する楽しみ　平川洋児　22
新しい男たちのネットワーク通信
「サイレントレター」　安岡菊之進　25
発言
―学習の主人公たち―
「男の子・女の子」
福井県芦原町波松小学校三年生　27
We 10年をふり返る　67
新しい家庭科を創るために
●小学校
男の子・女の子　塚越敏雄　30
●中学校
共学家庭科を実践して感じること
―性差別のない学習場面を―　金子新吾　35
●高等学校
高校生に男女のかかわりをどう教えるか
―伊勢物語第二三段『筒井つの』を
教材として　上西起代美　40
荒野のバラ
今、希望とは　田中裕一　48
家族と家庭科
「家族・家庭」の四十五年をふり返って　酒井はるみ　52
男性学への契機／魔男の宅急便
復讐されるは我にあり　諸橋泰樹　54
楕円の夢　沙羅樹の暗がりで象が碁を打つ　武田秀夫　56
あかさたな
子どもと向き合って　福田　緑・加藤由美子　58
現代衣生活考
下着とマスコミ（下着その三）　むらき数子　60
オホーツクの潮風荒く…　それはちがう！　江口凡太郎　63
波　Weの終わりに　半田たつ子　64
連載
○ひと　山本謙吉さん　39
・イキイキぐるうぷ　17　・泉　66
・わたくしからあなたに　81　・Weの読者会だより　81
・Weになんでも言おう　なんでも聞こう　82
・「Weの会」報告　84　・十字路　86　・アンテナ　87

表紙／長野ヒデ子　季節のうた／仙田敬子
特集イラスト／降矢奈々

特集

男女共生の道を拓く

役割を生きることから関係を生きることへ

やぎ　みね

他者とのいい出会いをもつことは難しい。だが、もっと難しいのは、自分との出会い、自分をみつけることではないだろうか。長い間、自分自身を生きてこなかった私は、ありのままの私に出会うのにずいぶん時間がかかった。それは、私が家族の中で「役割」を生きてしまい、一人の女として、他者と対等な関係を生きてこなかったせいだと、振り返って、そう思う。

今、一人で生きている。大切な自分の時間と空間をもう手放したくない。一人でいる中で、やっと少しだけ私をみつけられたかなと思う。他者とのいい出会いにも恵まれた。このままの私でいいと、ようやく自分を肯定できるようになった。それを今は大事にしたいと思っている。

三年前の春、おかしな話だが、離婚旅行に出かけた。五木寛之の『内灘夫人』の海が見たくて、金沢へ行った。日本海の波と風に吹かれて、「霧子のように、明日からは何もかも捨てて、一人で働こう」と、ようやく遅すぎる決心をした。

翌日、職安に行くと、当然のことに、四十五歳の専業主婦に働き口はない。今更驚くのが遅いのだが、とりあえず、年齢制限のないお蕎麦屋さんに職をみつけた。そして今は、女たちのグループで知り合った、女性スタッフだけの企画会社で、編集の仕事をしている。

女も男も、基本的に、ひとりまえに暮らすのはあたりまえのことなのだ。自分のために働き、食べて、着る。自分の暮らしは自分のもの。時間や空間だってそれぞれの一人のためにある。家の中で、一方的に「誰かが、誰かのために」生きるのはやはり間違っている。

ところが、家族という巧妙な仕組みは、その本質を見えなくさせ、それどころか、女に「役割」を果たさせることを美化してきた。私自身、惚れた弱みと若気のいたりで結婚し、子どもを生み、姑をみとって、役割をずっと生きて、ハッと気がついたら二十年たっていた。「いやなことはいや」という気持ちさえ、失っていたように思う。

ある時、姑をみとってしばらくたって、もと夫が「もっとお互い自由に、解放されよう」と言い出した。今になってみれば、その言葉を私からではなく、向こうから言い出されたことが悔しい。私の自立の道さえ相手に敷かれてしまったのではないかという無念さ。だが、その頃、私はそれほど自分を失い、自ら好んで相手に同一化してしまっていた。多分、そんな私を、もと夫は危惧し、互いに解放されたいと思ったのだろう。

その後、よくある女と男の危機や、さまざまないきさつがあって、二人で離婚を選択することにした。家族という枠にとどまる限り、女と男は決して対等になれないと考えたからだ。もちろん、戸籍という紙切れ一枚の差別性への異議もあった。

ところが、一旦、戸籍を抜け出てみて驚いた。日本には妻の座権はあっても女の人権はない。戸籍の上でも、女三界に家なし。税金の不利益も大きい。

もう一つ、シングルになって感じさせられるのは、家族という名の暴力だ。家族というまとまりに対して、外に出て初めて、中にいた時には気づかなかった、ある種の排他的な威圧感を感じる。休日に町を歩く家族づれは、たとえばホームレスの人たちにとって、確実に暴力となる。「あれは家族という役割を演じているだけにすぎない、楽しんでるわけじゃない」と返す人がいたけれども、それは弁明にすぎない。そこからは自分とは異なるところにいる人たちへの本当の意味での想像力は生まれてこないと思う。

駒尺喜美さんは、フェミニストの目で文学作品を読み直すことで、結婚幻想の本質を解き明かした。良妻賢母への色気を捨てきれず、他者見合いで生きていた私は、目のウロコが落ちる思いで、彼女の本を読んだ。たとえば、夏目漱石の『行人』。もともと漱石は、個人主義を貫く明治の知識人としては、珍しく「めめしい」男であったという。

漱石自身でもある主人公の一郎は、妻の貞との間にスピリットを通わせられないことに悩み、弟二郎と貞との間を疑う。苦しんだ末、一郎がゆきついた最後の台詞が見事だ。対等に生きられない原因を、女にではなく、男自身に求める視点に立っているからだ。

「嫁にいく前のお貞さんと、嫁に行ったあとのお貞さんとはまるで違ってゐる。今のお貞さんはもう夫の為にスポイルさ

れて仕舞ってゐる」「一体、何んな人の所へ嫁に行ったのかね」「何んな人の所へ行かうと、嫁に行けば、女は夫の為に邪になるのだ。さういふ僕が、すでに僕の妻を何の位悪くしたか分らない。自分が悪くした妻から、幸福を求めるのは押が強過ぎるぢゃないか。幸福は嫁に行って天眞を損はれた女からは要求できるものぢゃないよ」。

漱石のいう「何んな人の所へ行かうと」、女が男と対等になれない、それどころか、女は邪になるのだとすれば、「よい夫?」であればいいのか。そのウソを、駒尺さんは、高村光太郎と智恵子の関係から読み解いた。光太郎は、いい夫であるかにみせかけながら、智恵子を、真綿で首を締めるように、ある種の抑圧的寛容さで追い詰めていき、遂に智恵子は精神を病んでしまったのだという。

また、駒尺さんは、『紫式部のメッセージ』の中で、紫式部はフェミニストだったと言い、式部は「宇治十帖」に「結婚しない女」のイメージを書き込んだという。

家族というものが、外への排他性と内への甘えを許してしまう仕組みをもつかぎり、そこでは対等な人間関係は生まれない。とすれば、結婚の外に、女と男の対等な関係はありうるか。対幻想は、果たして対等な関係だろうか。

心理学で説明するまでもなく、恋愛と情愛とは違う。恋愛はせいぜい数年しか続かない。その後、継続されるのが情愛だという。そういう中で、女と男が、自由に生と性を生きることはなんと難しいことだろう。

『性を語り始めた中国の女たち』には、封建遺制が残る中国の女の状況と同時に、新しい女たちの姿が描かれていた。第三者（愛人）であることに意味を見出す女性が、「愛することは占有することではない。しばることではなく、自由を保障することだ」と語っていた。去年、蘇州に留学している娘を訪ねて、中国に行った時、先の本のイメージを確認できたような気がした。今や、中国も男性の結婚難時代というが、男に媚びない中国の女たちの姿はさわやかで、いきいきとしていた。

「一緒にいても一人でいられる関係、一人でいても一緒にいられる関係」が、女と男（ヘテロには限らないが）のあるべき関係だと言うが、個を選びとりながら、他を排せず、人を所有せず、自由に生きることがどこまで可能か。まだ、女にとっても、男にとっても、行く先は厳しいようだ。

さて、女と男の回路は、果たしてつながるのだろうか。最近、私たちのグループで、朝鮮人従軍慰安婦の問題を話し合った時、女たちの中からさまざまな声が出た。この問題を考えていくと、一体、日本の女というのは、今も昔も何なのか、どんな位置にいたのかが問われてくる。そのことを考える糸口を、それぞれ自分に引き寄せ、身近な話がたぐり寄せ

られるように語られた。

「私たちも、四十も半ばをすぎると、このことが私のトラウマになったとか、あの一言が許せなかったとか、何か自分の原点になるようなものがあるわね」と話し合ったのだが、その話をある男に伝えると、こんな言葉が返ってきた。「俺にはそういうものがあまりないな。学生時代信じていたマルクス主義が壊されて、しかし、自分の社会主義のイメージは、なおあるけれども、一体、何が俺の原点かというのはみつからない」。ああ、こんなふうに男は考えるのだなと思った。多分、女と男の回路は違うのだろう。違って当然かもしれないが、私などはもっと具体的に考えてしまう。男はどうして自分のことを語りたがらないのか。

生まれてからずっと私たちは、女であること、男であることを教えこまれ、刷り込まれて育ってきた。その「つくられた」女と男のイメージをこわしたいと思う。そのためにも、女はもっと自己を主張し、男はもっと女たちに耳を傾け、身を近づけてきてほしい。そうすれば、女と男の関係は、もっと楽に、生きやすいものに変わってくるのに。

去年、私は、自分との出会いをみつけたいと、フェミニスト・セラピーの自己表現トレーニングに参加した。自己史グラフを書いたり、描画法や、アサーティブトレーニングをすることで、思いがけない発見もあった。自分を深く知り、私を主張し、他者にありのままに表現するのは、以前の私は苦手だったが、少しずつ、自然に私を受け入れ、認められるようになった。少しは変わったかなと思う。

私は今、一人でいるけれども、いい他者にずいぶん恵まれている。いい女友達も男友達もたくさんいて、果たして、それにふさわしい私かどうか疑わしいが、私にとってベストフレンドとの出会いは本当にうれしいと思っている。

映画『ドライビング・ミス・デイジー』のラストシーンで年をとった白人のミス・デイジーが、黒人の運転手に手を差しのべていう台詞がある。何十年と葛藤を続けてきた二人の関係の終幕。「ユー・アー・マイ・ベストフレンド」の言葉が印象的だった。

関係とは差異を生きることという意味が、この頃やっとわかってきたように思う。当然のことなのだが、私と他者とは違う。違う他者と出会い、異なる考え方を知るからこそ面白い。もう一つ、関係を生きるには、ある一定の距離が必要という。差異を認め、距離を置いて、なお、互いに近づこうとする関係というプロセスをこれからも生きてみたい。

もう、役割を生きるのはとっくの昔に捨てた私だが、まだ関係を生きるのは難しい。諦めず、まず私自身を生きることから、他者に向けて声をかけ続けていきたいと思っている。

特集
男女共生の道を拓く

関係を生きる男

中村　彰

わが家の屋根裏の柱に、「天保二年」と墨で記された銘がある。先祖代々の墓の石碑には、「弘化二年」と刻まれてある。

幾世代を経たのかは定かではないが、百六十余年という歳月を、この家を生活の場に、ひとつの家族としての営みが、喜怒哀楽を繰り返しながら、営々と築かれてきたことだけは確かだ。

家屋敷や墓だけではなく、代々伝わる山林や田畑を維持管理してきた、この途方もない生活の歴史の重み。幼いころから、この重圧を、強く意識しながら育った。

特別な名家でも家柄というわけでもないが、都市近郊農村の三世代家族の長男として生まれたわたしは、団塊の世代ではあるが、いわゆる「イエ」を受け継ぎ、次代に伝えることを、当然のこととして、求められてきた。

都市近郊という地の利か、わたしが小学生から高校生にかけてのころ、高速道路の建設や工場誘致、宅地造成という行政の施策もあって、大きな開発の波が、わたしのムラに押し寄せてきた。先祖から受け継いだ田畑を無くしてしまっては申し訳ないと、代替地を求めた家もあるが、わが家は、山林は少し残ったが、その折りに、耕作していた田畑はなくなった。ついでにいえば、田畑を売った金で、家普請や墓の整備をした家が多かった。先祖が守ってきた資産は、子孫に目に見えるかたちで残すべきだ、との思いがそうさせたようだ。

さて、わたしには妹がひとりいる。兄であるわたしと妹では、育てられ方、祖父母や父母の接し方に差があった。男の子と女の子としての差だけでなく、イエを受け継ぐ者と他家

に嫁ぐ者との差が、あきらかに存在した。イエを継ぐ者として、大切に育てられはするが、勉学に励むことが厳しく求められた。一方、妹は、学業はほどほどがよく、むしろ、家庭的なしつけの方に重きがあったように思う。

三世代家族としての暮らしのなかで、家族の間の軋轢もあった。

ひとり娘であった祖母と、婿養子の祖父は、いつもケンカしていたという印象がある。幼いころ、祖父母と同じ部屋で寝ていたが、いつもふたりの言い争いや嫁批判を聞かされ続けた。

また、祖母はよく、わたしの父の寝癖のついた髪に蒸しタオルを当てて整髪していた。結婚した息子に、そのように、かまうことはないのに、と幼な心に思っていた。

祖父母も父も、それぞれ、自分の〝我〟をしっかり持ち、「こうあるべし」との思いを強く打ち出すタイプ。つねに、そのようなワクをはめられ、生き方を拘束されてきたとの思いが強い。母は、祖父母や父の考え方に自分を合わせて生きてきたし、わたしや妹も、楯突くこともなく子ども時代を過ごした。

しかし、「こうすべきだ」との押しつけに、いちおうは従いながらも、わたしの心のなかは、かたくなに、それを拒否する気持ちがくすぶり続けていた。「うなづいて話を聞いている素振りはするが、納得がいかないと、何ら改めようとしない」と言われたこともある。

祖父母や父がしめす生き方、考え方に、「答えはひとつではないはず」との思いがつきまとった。一方的に、ひとつの選択を求められても、それは押しつけ。多様な選択のなかのひとつとして、「わたしはこう思う」というのとは大きな隔たりがある。

こうした繰り返しのなか、押しつけられるのが大嫌いで、つねに自由を求めてやまない、いまの自分がかたちつくられたのだと思う。

近所に住むわたしと同じ世代の友人たちは、就職にあたっては親の希望もあり、市役所や農協など、自宅から通え、転勤の可能性の少ない職場を選んだ。結婚も、親たちの意向が働いていた。まわりの環境は、「イエ」を背負う男たちの選択肢に強い影響をもっていた。

わたしの就職は、近くの行政や一般企業ではなく、マスコミを選んだ。ここに、自分の〝我〟の主張を持ったが、わたしの結婚には、母方の祖母の意向が働いていた。祖母の勧めで見合いをした。相手は、母方の遠縁の娘。

古いしきたりの残る都市近郊農村で、三世代家族の一員として暮らしていくためには、同じような環境で育った者でないとつとまらない、との思いもあった。もっとも、だから誰

でもよかったというわけではない。お互いに魅かれるものがあったからだと信じている。

わたしが就職したころ、同じ屋敷地内にあった、農具を納めていた小屋を潰し、五ＬＤＫの二階屋をつくった。将来の息子の結婚に向けて、若夫婦の住まいづくりというわけだ。当然、同居するものとの親の思い込みが、そういう行動を取らせた。別棟の住まいをつくったところに、新しい時代の流れが少し影響をあたえている。結婚が決まる前から、すでに、そのようなレールが敷かれていた。

「結婚したら、親世代と意見の食い違いができたとき、妻がたとえ間違っていても、夫は妻の側につくべきだ」

結婚にあたり、友人から贈られたことばである。「親世代から、息子は嫁の尻に敷かれた情けない奴だ、ぐらいに思わせておけ」と友人はいう。

別棟同居というかたちになったおかげで、いちおうは、若夫婦と老世代が四六時中、顔をつきあわせるという事態は避けることができた。わたしたち夫婦で築く空間を確保できたことは、幸せであった。ムラ社会に暮らす三世代家族にとって、親世代からみれば、息子の妻は「イエの嫁」以外の何者でもない。古い価値観から自由になりえていない親世代と生活を共にするということは、結婚したその日から、いわゆる〝嫁役割〟という重い荷物をどっしりと肩に背負う日々が続くということである。

夫婦だけの空間は、いっときのオアシスを提供する。しかし、親世代からみれば、息子夫婦の住まいも、わが家そのものである。ときとして、ずかずかと深く踏み込まれることがある。そこまで干渉しなくても、との思いが若夫婦の側にあっても、親世代は遠慮する術を知らないかのように、関わりを持とうとする。

いちばん困ったのは、子ども（親世代からみれば孫）の病気。病院に連れていけ、いや医者にみてもらうほどではない、とはげしい罵りあいになったこともある。子どもの勉強や友だち付き合いについて、意見を異にしたいさかいもある。

そんなとき、若夫婦がひとつになって、親世代とのコミュニケーションの疎通を図るために、夫であり、息子である自分が間にたって、うまく処理をしなければ、と思うが、そのむつかしさに困りはてたこともある。

三世代家族の息子の結婚も、「イエの嫁が来る」というのではなく、ひとつの家に新しいカップルが誕生するということであり、ひとつの家族を構成するといっても、老世代と若夫婦それぞれに、干渉しあわない空間を確保して、相互不可侵条約を締結すべきだろう。家族をクルマに例えるならば、ひとつのクルマに家族五人が乗り込んでいるのではなく、ひとりひとりが別のクルマに乗り、そのうえで、夫婦を単位に

行動を共にする。飛行機の編隊飛行に例えてもいいかもしれない。

これまで、生まれ育った家庭をベースに、三世代家族における老世代と若夫婦の関係という切り口から、家族のあり方を見つめてきたが、夫婦の間にも同じことがいえるだろう。

数年前、関西に住む女性グループが、女性たちが「墓」にどのような思いを抱いているのかを調査したことがある。

「姑と死んでまで、一緒にいたくない」

「夫と同じ墓には入らない。できれば、気の合った女性仲間の墓をつくりたい」という声が、この調査から聞こえた。

女性たちの声に戸惑いを感じた。人間が自分の入る墓にこだわり、自分の生きた証を墓にもとめる姿を、各地の民族社会に、いくつもみることはできる。そういう気持ちを持つことは理解できたが、共同生活の単位であるひとつの家族の間で、あるいは夫婦の間で墓に込める思いに大きなズレがあることにショックを受けた。

女性たちが、自分の死後、どこに葬られるかに強い思い入れがあることがわかった。先祖代々の墓に入る、あるいは、夫が二、三男だから、自分たちの墓をつくり、子どもに後を託す人がいる一方、夫の側の墓に入ることを拒否する人がいた。

男性の場合、長男も、あるいは、ムコ養子で他家を継ぐことになった者も、その家の墓の継承に何ら疑問を感じていないのに対し、女性が、自分が入る墓のありように強いこだわりをしめしている。このことが、いまの男女の関係のいびつさをしめしているのであろうことが、想像できた。

夫の両親との関係、夫との関係に疲れ果てた、こういう女性たちが出てきている背景を理解し、夫が家族との生活に深くかかわることで、自分の足元を見つめる眼を養うこと、企業戦士として外ばかりに目を向けないで、生活者としての自分を取りもどすことが大切である。

世代間の葛藤であれば、同居を解消して、若夫婦が家を出ていけばよい。あるいは、老夫婦が新居を構えればよい。夫婦の間の葛藤も、夫婦別れという解消方法がある。

しかし、縁あって結ばれたカップルであるなら、法律婚にしろ事実婚にしろ、ふたりが信頼しあえる共同生活のパートナーとして、生きる道を模索すべきだろう。

関係を生きる男と女として、ひとりひとりの〝個〟を尊重しあいながら、協調関係を築いていく。ひとりが、エゴを丸だしにして、他者を抑えつけるのではなく、家庭は家族みんなのベースキャンプと位置づけ、お互いにカバーしあいながら、それぞれの家庭外の活動を続けていく。家族のあり方、そして、男と女の関係は、そのようなものだと考えている。

（なかむら　あきら・メンズリブ研究会）

特集
男女共生の道を拓く

男はどこまで家事に参加できるか

羽生康二

三十年ぐらい前までは、フェミニストというと〝女性に甘い男〟という意味だった。社交の場面、女性とのつきあいの場面で、女の人を丁重に扱う男という意味である。それは女性に甘い男をからかうことばでもあった。〝女権拡張論者〟というのが中心的意味になり、フェミニストというと女性を思い浮かべるようになったのは、いつごろからだろうか。

わたしは男だが、自分では穏健なフェミニストのつもりである。〝穏健な〟という意味は、自分も男の一人として女性差別の意識が自分の中のあちこちに残っていることを知っているので、自分をたなあげにして女性差別の社会構造を糾弾することはできないからだ。自分の中の差別意識を少しずつはっきりさせ、それを解消する努力をするというのが、わたしのフェミニズムである。そういうわたしのフェミニズムへの努力のひとつとして、わたしがどの程度家事を分担してきたかを書いてみたい。

〝暮らす〟ということはなんと大変なことかとこのごろつくづく思う。家事と呼ばれる家の中の仕事は、やってもやっても次々と新たに発生するから、かたづくということは決してない。わたしのパートナーは朝起きるとすぐから、料理、洗たく、裁縫、庭仕事、買いものと家の中を文字通り走りまわっている。それで、本を読んだり手紙を書いたり詩を書いたり展覧会にでかけたりする時間、自分の自由になる時間は、一日に二、三時間しかとれないようだ。わたしもそれなりに家事を分担しているのだが、それでもこのありさまである。

わたしが結婚しておどろいたのは、世帯をかまえると、わずらわしい雑用がどっとふえることだ。ひとりの暮らしがふた

りの暮らしになるのだから、計算上家事は倍になるはずだが、実感としては三倍以上だ。季節季節の衣類の出し入れ、扇風機を夏には出し冬には汚れを落とし油をさしてしまう。それとは逆に、ストーブやこたつは冬のはじめに出し春の終わりにかたづける。こういう仕事が入れかわり立ちかわりやってくる。ちょっと怠けていると、七月になっても電気ストーブがほこりをかぶってまだ部屋のすみに置いてあったりする。

わたしが現在やっている家事を列挙してみよう。ふとんのあげおろし、勤めに出る前に部屋と廊下を掃除機で掃除する、テーブルに食器を並べるなどの食事の用意の手伝い、弁当をつめる、食事のあとかたづけ(食器洗いをふくむ)、生ゴミを庭にうめる、家計簿をつける、など(紙くずや木の枝を燃すのもわたしの仕事だったが、わたしがやると早く燃やしてしまおうとして煙を盛大にだすので、最近は手を引いている)。料理はときどきしかやらず、あとかたづけ専門である。週に二、三回は勤めの帰りに何か買いものをして帰るが、大部分の買いものはパートナーがする。わたしは家事の三割ぐらいを分担しているような気がしていたけど、こうやって書きだしてみると、ひいき目にみても二割がいいところだ。世間一般の男性とくらべれば、わたしは家事に参加している方だと思うが、それでもこの程度である。食事作りに参加しないかぎり、男が五分五分に家事を分担することは不可能だ。

家事のどの部分を分担するかをパートナーと話しあってきめたわけではない。一日の生活を少しでもなめらかに進行させるために自分でできることをやるようにしてきた結果、こうなった。結婚してから三十年以上になるが、ふり返ってみると、わたしが分担する家事は、そのときそのときで変化している。はじめて子どもが生まれてからしばらくのあいだは、パートナーが買いものにあまり行けないので、わたしが買いものの半分ぐらいをやった。おむつの下洗いなど洗たくもよくやった。次の子が生まれたあとパートナーが健康をそこねて薬を飲んでいた時期には、短期間だったが、わたしが赤ん坊に粉ミルクを飲ませた。赤ん坊が哺乳びんでミルクをゴクゴク飲むのを見ているのは楽しい。みるみるうちにミルクが減っていくときは幸せいっぱいの気分だった。

二人の子ども(二人とも娘)が大きくなり、小学生、中学生になると、食事のあとかたづけや掃除などは娘たちがやるようになって、わたしの出番は減った。

楽しかったのは、娘たちが高校生、大学生になって、日曜日などの休みの日にどちらかの娘と連れだって近所のスーパーや生協に買いものに行くことだった。そのころは、スーパーに買いものにいく男性は少なかったが、わたしは恥ずかしいという気持は全然なく、むしろちょっと晴れがましい得意な気持だった。

子どもたちが学校をでてそれぞれ独立すると、わたしの出番がまたふえた。パートナーが野菜作りや庭仕事に多くの時間をさくようになり、わたしは食事の用意にも少しずつ手をだすようになった。月に二、三回は料理も作った（とりの水だきとかしゃぶしゃぶのようなべ料理だと、あせらずに時間をかけて作れば、わたしにも作れる）。料理をするのは好きだがあとかたづけはきらい、という男性がいるけど、わたしは反対に、あとかたづけは頭をからっぽにしてできるのできらいではない。

ひとつの家庭を維持していくには、日々相当な努力を必要とする。共働きだろうと専業主婦だろうと、多くの家庭で女の人が家事の大部分を担っている現状は、決して好ましいものではない。男性にやりたいことがあれば、女性にもやりたいことがあるはずだ。そのための時間を作りだすために二人で共同で家事をやる必要がある。たとえ女性がフルタイムの仕事をしていなくても、男性が家事を三割か四割は分担しないと公平ではない。

〃いっしょに暮らす〃ということは、二人が五分五分の関係に立とうとすることを意味する。現在多くの家庭でみられるように、女性が男性パートナーの活動のための助手に甘んじているのはおかしい。もちろん、いつも〃五分五分〃と言い張っていると苦しいから、ときには女性が男性の助手になることがあってもいい。が、男性もまた助手として女性の仕事を助けることがなければならない。

わたしが心がけたことは、娘二人をふくめて家族四人がそれぞれに自分を生かす道をみつけ築きあげることだ。子どものために親が犠牲になってもいけないし、親のために子どもが犠牲になってもいけない。まして、夫のために女性パートナーが犠牲になることは絶対よくない。有名人の女性パートナーが〃内助の功〃ということで、美談として語られることがよくあるが、わたしはそういう美談はきらいだ。まれな例外（たとえば高群逸枝と橋本憲三の場合）は別として、〃内助する〃のはいつも女性である。

わたしは比較的時間の融通がきく職業についているが、そういうわたしでも、前述したように、三割四割の家事を分担することはむずかしい。毎日残業に明け暮れる仕事をしている男性の家庭では、女性パートナーの負担は非常に大きいだろう。過労死が続発する日本の社会構造はどうしても変えなければならない。それと同時に、大部分の家事を女性パートナーに負担させている男性は、少しずつでも自分がやる領分をふやしていく努力をしてほしい。男性の側に少しの想像力があれば、多くの女性が家事の負担に押しつぶされそうになっていることが理解できるはずだ。

（はぶ　こうじ・高校教諭）

特集 男女共生の道を拓く

〝日ソ図書〟の性差別賃金を問う！

野村美登

一九八八年七月、性差別賃金問題で「日ソ図書㈱（代表取締役孤田尚夫）」を東京地裁に提訴、'91年十二月十一日の第二十回口頭弁論で結審を迎える。代理人を引き受けて下さったのは、常に市民サイドで活動しておられるなかでも、女性に係わる問題では同じ地平に立ち、共に道を拓いていられる中島通子・中下裕子両弁護士である。

訴状の主張は「女子であることを理由に賃金差別をしてはならないと規定した、労働基準法四条違反であり、同法十三条の類推適用により男子の基準に基づいて差額の支払いを求める」というもの。

☆「日ソ図書」と私の二十二年の歩み

日ソ図書（設立'64年秋）は、ソ連邦出版のロシア語書籍を中心に、東欧圏及び、欧米出版の洋書を輸入販売する小企業で、本社の他に神田店、札幌、大阪に営業所が在る。

業務上ロシア語を必須とし、古い社員間では男女の間に業務の質的な差異は存在しない。しかし、男性は入社後数年でほぼ課長となり、女性はおしなべて十数年を経て、それも課長ではなく、課長待遇という身分となる（待遇という身分であることがわかったのは、この裁判での社長の証言によってである。ちなみに私の次長も待遇がつく身分であった由）。

この職場に私は設立の翌'65年にアルバイトとして入社、三カ月後に正社員となり、以後二十二年間を働いた。この間のほとんどを神田店で勤務、うちほぼ二十年間を責任者として歩いた。もっとも、先行する十二年は、責任者として会議に出席、その全業務を果たしたが、平社員であった。

入社後一年余りの頃、当時の社長と社員間のそれまでの確

執が頂点に達して退職者が続出、本社の態勢立て直しのために神田店三名のうち二名が本社に配転となり、私だけが残された。以来三名分の業務を背負い、年休はおろか遅刻もならず、の日々を重ねたが、限界を感じて社長に直接交渉、週三日の外国語大生アルバイトを確保したのは半年後であった。

続く数年も社員の臨時配置など、似通った労働条件をひき受けざるを得なかった。好きな仕事であり、経営が苦しいというなかで、いわゆる昭和一ケタ世代の働き方―耐え、且つ仕事にのめり込む―をし、会社への一体感を育てていったと考える。

この間に、全分野にわたる原語カタログ（週刊、一冊五百点余を収録）による基礎発注も会社の指示によって始めた（当時のソ連書は出版の一―二年前に予告され、集まった注文数に応じての計画出版であるため、顧客からの注文到着前に予め見計って注文する。遅れると入手は不可となる）。この基礎発注は、企業の死命を制するともいえる最重要業務で、顧客の専門分野を熟知し、各様のニーズを見究め、適切・適量の発注を行うことを求められる。

こうした経緯を経て'79年本社へ配転、後任には業務取締役の男性があたり、一年後に初めて店長任命を受けて前任者と交替した。通信販売部もあわせて担当することとなり、三千名余の顧客を抱えての再出発となった。'82年に次長、本に埋もれ、多様な顧客の多様な要望に応えることを最大のテーマとして歩き続け、'88年一月末に定年退職をした。

☆問題の発端と会社の対応

会社と対峙するきっかけは、同セクションの次席の男性との賃金格差が判明したことによる。定年というゴールを視野に入れ、来し方二十余年を辿るなかで、不明のまま、不問にしてきた賃金問題に思い至り、働く者としての基本的な問題をないがしろにして幕を閉じてはならないのではないか…、この思いに強く捕われてその確認に動き、手にした結果に愕然となった。基本給の格差が五万円余であった。

賃金については、新卒の場合のみ世間水準を念頭に決定されるが、社員の大部分を占める中途採用者については、まさに藪の中。賃金体系はなく、入社後も他の社員のそれを知る機会は皆無、賃金は深いベールの奥である。触れることをタブーとする空気が濃密に社内を支配していた（入手した資料によると、男女別、年齢中心の年功序列賃金であった）。

ここに至って、今更…との思いが頭をかすめないではなかったが、不問にしてきた責は私にもあり、業務の実態から納得できず、その理由を社長にただした。回答は・他の女性も低い、あなただけではない、仕事は評価しているが…。・女性はどこでも安い。・安い初任給を認めた本人の責任であり、

会社の責任ではない。・共働きは安くていい、など、女だから受容すべきと役員諸氏が考える事柄が繰り返し述べられた。締括りは、男女別立ての賃金体系がないから法律違反ではなく、是正の義務も必要もない、と。

女性を劣ったもの、従属すべきものとしてはばからない、そのあからさまな差別意識に背を押されるように、私は闘うことを決意した。それは、自立を求めて三十余年を働き続けた、その歳月に、自らつけるべき結着でもあった。他の女性たちには事情も、異なる意見もあり、船出は独りであった。

勧めて下さる人があり、地域合同労組に加盟し、団交も行った。が、定年を目前にすると社長は欠席、交渉が停滞したため、退職後の継続交渉を申し入れると会社は拒否、急きょ東京都労働委員会に斡旋を依頼した。この間には労働基準監督署、労政事務所も訪ねたが、前者は明文化した男女別二本立て賃金表が存在しない場合の立証は無理、とそっけなく、後者は斡旋機関であり、会社が拒否して不成立であった。

先の都労委の斡旋は三回行われ、陳謝文と次長付六年間の差額請求に対し、都労委は陳謝文と賃金の $\frac{1}{2}$ の三年分の支払いを会社側に提案した。しかし会社はこれを拒否し、金一封で解決したいと逆提案した。金一封の内容は十万円というもので、都労委では、会社の誠意が感じられない、もう我々には手に余る、斡旋は下りると表明。深夜二時にも及んだ斡旋は、深い疲労だけを残して不調に終わった。

これまでの闘いの足跡を顧み、残る方途は提訴しかない、そう結論を出して労組は脱退した。この時点ですでに退職後四ヵ月が経過していた。

☆裁判の経緯

裁判における争点は、初任給差別と格差是正の男性への偏在である。前者はほぼ同時期入社の男性四名―私より一歳から五歳若い―に比べ、三〇%～二〇%低い。その理由を当初はロシア語学歴なし、関連業務の経験なしとしたが、右男性のうち、三名は私と同様条件であること、男性間には学歴差による賃金差がないことを反論すると、社長尋問の際には、「自分の入社前のことで関知しない」と。

後者は先の四名の男性には高い初任給に加えて是正を繰り返し、その差を一層拡大させており、その理由については、「記憶にない」と答える。格差是正を行う場合の条件は『毎年の昇給の結果、社員間の基本給が不相当となった場合、社員の入社年次、年齢の対比に基づいて行う』となっている。にもかかわらず、長期にわたって右事項に該当している私には、大量に是正が行われた時の一回のみである。

他の女性も同様で、是正額、回数共に格段に男性が多い。このことによって女性との格差は年毎に広がり、女性のほう

が年齢も高く、基本給が高額である場合も若い男性との差は年を追って縮まり、ついには逆転しているケースもある。

是正から除外した私への口実は「当時の社長が決定した初任給を尊重して是正は行わなかった。長期勤務者で高い年齢の人には行わない」。では勤務期間、年齢の限度は？　とただすと「そのときどきの都合で…、決まっていない」である。いかに言い逃れようと、不合理な実態が厳然とそこにある。

原告側証言者によって、会社が東京都の統計資料、男女別二本立賃金表を長年にわたって参照してきたことが明確になった。女性の賃金表とは、その性を理由として低い額に固定された、その差別賃金の統計であり、その数字を格差是正の基準としてきた会社の意図は明白である。

とはいえ、過去の女性差別事件の判例を読むと、裁量権という言葉に突き当たる。明文化された男女別二本立賃金表がないこの件では、この差別も企業裁量権の範囲内である、とする、男性尺度による判決の可能性は捨てきれない。

女性の活躍が声高に語られる現状でも、大多数の女性はこの捉え難い、差別の厚い壁に阻まれ、呻吟を続けている。組織のバックもない、たったひとりの私の闘いに、多くの方が思いを寄せて下さるのも、女性たちの現在（いま）を物語っているといえよう。

三年半前のてさぐりのスタートから現在までの道程を、ゆるやかで暖かい多くの人々とのつながりのなかで、私は過ごした。伝え聞いて駆けつけて下さった未知の方々、元同僚、旧友、反原発・反戦他さまざまな場で出逢った、思いを共有する多くのおんなたち、そして、それらの人々を通して、更に新しい出逢いも重ねた。

若い世代から戦中世代にわたる皆さんのもう一つの顔は、家庭の人、会社員、公務員、編集者、教師、翻訳者、研究者などなど、個を育て、いのちの根を張り、多彩に生きるこれらの人々の有形・無形の励ましをいただいて、私の現在（いま）がある。法廷にも一人ひとりが、自らの意志で、時間をつくり、電車を乗り継いできて下さる。この、公正な法のありようを求める傍聴席の顔、顔、顔の連なりを前にして、裁判所は今春から合議制―裁判官三名―に切り替えた。

賃金差別は、働いている期間にとどまらない。年金にも及び、女性はその生涯を、屈辱という荷を背負って生きることになる。生涯という重さに私の怒りはより増幅され、その怒りをてこに、不条理な差別の根源＝家父長制に、その一現象である巧妙な企業のまやかしに対峙した。作業は困難と苦渋を伴った。が、歴史を動かす一歩につながる、この思いに揺り動かされ、支えられた時間でもあった。多くの方々に心から感謝を！　これから私は最終陳述書とむきあうことになる……。

イキイキぐるうぷ自己紹介

メンズリブ研究会

〈中村　彰〉

〝男である自分を問い直し、これまで求められてきた男の殻から抜け出したい〟と考える男たちが、「男は変わりうるのか？」をテーマに、真剣に語り合うつどいが、一九九一年四月に大阪で開催された。自分をさらしての議論に、とまどいながら、それでも、じっくりと語りあう男たち。メンズリブ研究会の初めての例会であった。

女たちは、過去十数年にわたり、「女」としての生き方に疑問を投げかけ、盛んに問題提起をすることで、自己実現をめざしている。それでは、男たちは、どうであったか。男として、「こうあるべし」とされる生き方に何の疑問もなく、過ごしてきたように思う。たしかに、女に比べ、社会的優位に立ち、めぐまれた位置にいることで、安住していたといえなくもないが、はたして、いまの社会のありようが男にとっての理想郷であったのだろうか。

全面的自己否定でも、また、全面的自己肯定でもなく、男としての生き方を問い、これまで男たちに求められてきた呪縛から、自らを解き放つためには、何をしたらよいのかを、これから、有志で、追い求めていきたいと思う。心ある男たちの参加を待っている!!

〈連絡先〉〒557　大阪市西成区萩之茶屋3の9の24
水野阿修羅気付　メンズリブ研究会　☎06-633-3819

アジアネットワーク

〈松村　淑子〉

朝から二十人を越える人を繰り出して作ったタイ・カレーにサモサ、そしてケニアティが今日のメニュー、舞台では中国からの留学生が三時間もかけて念入りにお化粧をして、華麗なる京劇を披露しています。一九八九年の秋、私たちが主催したアジア・フォーラムのひとこまです。

私たちの会はもともと国際婦人年北区の会のアジア部会として発足しました。一九八五年ナイロビの国際婦人年世界大会に参加した私たちがアジア・アフリカの人からもらった宿題の一つが「なぜ日本人男性の買春を阻止できないのか」でした。日本の女性の地位が低いと嘆くのではなく、すでに経済大国となった責任を自覚せよというわけです。

「経済侵略」のもとで男女平等を唱えるだけではおかしいのではないか――とそれから五年間、アジアについて、ＯＤＡについて、外国人労働者の人権について、シンポジウムや学習会を持ち、アジア・フォーラムやタイへのスタディツアーにも取り組みました。カトリック教会のミサに来ているフィリッピンの人を生徒に日本語学校も日曜毎に開催しています。働く婦人と弁護士が中心ですが、ニュースレターも定期発行し、新しいことを知る喜びに弾んでいます。

〈連絡先〉〒530　大阪市北区南森町1の3　民主法律協会内
☎06-361-8624　振替大阪 6-7816(年会費二千円)

発言

今、男女共学が危ない

稲垣光江

◇選抜制度改悪の動き

都立高校全日制普通科では、生徒を募集する際に、男女別定員制をとっている。この制度は、新制高校発足後から続いており、男女共学を定着させるのに大きな役割を果たしてきた。現在、都立高校は、男子校（全寮制）一校をのぞき、全校が男女共学となっている。

一方、都教委は、臨教審・中教審の多様化路線を受けて、ニュータイプの学校をつくり、コース制を導入し、'94年から入試選抜を、現行のグループ合同選抜から、単独選抜方式に移行し、学区制も拡大するなどの内容をもりこんだ報告書を出した。また、現行の男女別定員制を撤廃し、「男女合同定員制」にすることも報告した（'90年4月）。組合との交渉で「男女枠の撤廃については、来年度は見送る」と回答している。

◇男女募集定員の撤廃は、男女共学を解体する

単独選抜が導入され、加えて学区制が拡大されると、男女共学が解体することは、戦後の各県の状況を見れば明らかである。また、単独選抜の導入は、「偏差値輪切り」の徹底化が進み、都立高校全校のランク付けにつながるだろう。さらに、男女募集定員の撤廃がなされると、女子高・男子高の復活と、男女のバランスが大きく崩れることが危惧される。日教組がとった全国各県の入試状況のアンケート結果をみても、総合選抜制度のもとでは、男女比均等配分がなされているが、単独選抜制度を実施し、男女別定員をとっていない県では進学校に男子が集中し、表むき共学でありながら、男女数、それぞれ大きな偏りがみられ、女子クラス・男子クラスが生まれている。大阪でもA比率・B比率（共学を守るための歯ドメ）が撤廃され、一方の性が45％とされた（来年度は40％）。それでも今年の入試状況をみると、共学が崩れてきている。

さらに男女の募集枠を定めていない県では、事実上、女子の入学制限（静岡・山形・秋田県での弁護士会の勧告など）が行われたり、進路指導の問題もおきている。女子差別撤廃

条約では、男女共学の推進と、男女同一のカリキュラムの実施をうたっているが、共学の解体は、家庭科の共学共修をも困難にする。

コース制導入も、来年度から9校になり、文系・理系による女子クラス・男子クラスを生み出す危険性があり、共学解体に拍車をかけるだろう。

◇都教委の男女枠撤廃の論理

都は、男女枠撤廃の理由として①男女を区別して募集することは、差別撤廃条約一条にてらして差別である②成績だけで合否を決めることは、男女平等の理念に合致している、というものであった。しかし、現行の男女別定員制は、共学を保障するための制度であり、どこからも批判があったことはない。男女枠撤廃は、一見「受験の機会を均等」にすると錯覚するが、結果の平等、就学の機会の平等は保障しない。

「受験の機会均等」は、他県にみられるように、進学校に男子が集中し、女子制限や、進路指導の問題、差別の現状がある中で真に「機会均等」といえない。受験競争を是とし、「選別体制」を前提とし、男女共学の否定の上にたった男女平等は、真の男女平等といえない。弁護士会も、現行制度の中で男女比を1対1に近づけ、枠の撤廃は、将来、差別のなくなった時点としている。①については差別撤廃条約の歪曲である。

◇男女募集定員の格差是正について

都教委は、主として旧制中学系列の学校で、格差が顕著であった高校の女子比率を'89年35%〜38%(11校)を、'90年40・1%〜41・6%にあげ'91年42・5%以上にあげた。'92年度45%以上とするとしている。しかし、この間、11校以外のほとんどの各学校の女子比率をさげ、数字を操作している。また全日制普通科全体の女子比率もさげてきている。47・6(88年)→47・5('89年)→47・4('90年)→47・26%(91年)。'89年度、男女同数募集をしていた17校は'91年度1校に、'89年度女子比率が49〜50%未満であった50校は、'91年度20校にへらしている。何のための改善かわからない。

◇私学も、男女共学にすべき

私学は男女別学高が多いが、生徒急減期にむけ、中学段階からの生徒の確保、中高一貫などによる私学ブームのため、現在東京の公立中学校での女子の減少が、きわめてめだっている。都は、男女枠の撤廃まで、公立中学卒業生の比にあわせて、高校の女子比率を定めるとしているから、さらに都立高校の女子は減るだろう。私学は、共学にすべきだし、公立・私立とも各学校が、男女半々となるよう、共学の基本に、たちかえるべきである。

(都立市ヶ谷商業高校定時制)

発言

「れふぁむ」の三十年

正路怜子

＊60年代の学生サークルとして誕生

60年安保の年に大学に入った私は、勉強するために入学したのになんでデモばかりするの、と反発する学生だった。当時「女子大生亡国論」がさかんであった。女子学生が目立つほど増え始めたのだ。挫折と高揚の入り交じったキャンパスの中で、女子学生たちはベーベルやボーヴォワールや村上信彦や井上清らの読書会をはじめた。「女である」とはどういうことなのか、大学までは男女平等だったのに、就職したら女性差別がいっぱいらしい。その仕組みを学び、何とか自分の力で新しい女の生き方を切り開きたい――とつくったのが神戸外大の学生サークル「女性問題研究会」であり、その機関誌が「れふぁむ」である。「れふぁむ」とはフランス語で女たち、学生時代に3号まで出した。

卒業して五年後のことである。ひさしぶりに会った「れふぁむ」のメンバーが「離婚するかもしれない」と言う。就職し、結婚し、子供を産み、仕事に不満がいっぱいの私たち、愛に泣き、子育てに悩み、しゃべりたいことがいっぱいあった。大学時代に学んだ女性問題は今こそ現実の問題なのだ、と女性問題研究会を再開したのは'69年であった。

年四回の例会と年一冊のミニコミ作り、会費、会則、会長なしのゆるやかな組織で、参加資格は女なら誰でも、男なら女性問題に関心のある人とした。会場は、皆の家を回り持ちした。神戸、奈良、京都、大阪とおかげであちこちの家や台所を見ることができたし、その家の男たちの女性問題への理解度もはかることができた。理論と実践の統一は難しいことだが、女性問題は、研究の対象ではなく、先ず自分が解放されたくてやるわけだから、隠したり、恥じたって仕方がないのだ。働く人も主婦も「女」という一点で連帯できた。男への不満、夫への不信、社会システムへの怒りが口々に出さ

れ、例会はいつも刺激的であった。

＊ウーマンリブの風が吹いた70年代—意識の目覚め

ガリ刷の「れふぁむ」6号のカバーにはウーマンリブのマークが登場した。「女の団結は力を発揮し、国境を越える」と書いてある。女は現実を動かす力を持っているのに「体制が変わらないかぎり、女の解放はない」という古い理論に縛られていた。社会変革という大事の前では男女差別などという小事はあとまわし。自分のわがままで男の邪魔をしてはいけないと。ところがウーマンリブのメッセージは「個人的なことは社会的なことである」というのである。つまり夫とのいさかいも職場でのお茶酌みも、いったんやめて主婦になったらパートしか働き口がないのもそれは女性問題ゆえと明確だ。

女よ、もっと強くなろう、結婚しても戸籍なんか入れないで、夫とは性的にも対等になろう、家事は女だけがするもんじゃない、女も自分の家を持とう、子供には「女の子だからね」とは言うまい、独身も楽しいよ、離婚の現実はこんなのよ——とミニコミ「れふぁむ」には、書きたい女たちの原稿が、依頼しなくてもどしどし集まり、発行部数も一千部からさらに二千部へとひろがった。「こんなに本音で語る会があるなんて、すっかり興奮して帰りの電車で三駅も乗り越してしまいました」「このミニコミのおかげで沢山の人生を生きることができました」とあちこちから手紙がきた。

＊80年代は国際婦人年から「均等法」へ——枠組みづくり

'75年は国際婦人年。わたしが就職して十年目のことだ。まわりを見渡せば、働く場所によって、その労働条件があまりにも違う。例えば、市役所や裁判所なら子育てしながら働くのが当たり前なのに、商社や銀行では25歳すぎたら結婚退職するのが普通のコースだった。結婚しても、子供ができても働きたい、いい仕事をしたい、管理職にもなりたい——こういうごく普通の願いを実現したいと「国際婦人年北区の会」をつくった。「れふぁむ」の職場版である。

十年間、毎月一回例会を持ち、話し合いをつづけ、そのまとめのミニパンフをのべ12種四万冊も普及させた。職場のことはマスコミであまり報道されないので、「北区の会」で知り合った先輩たちの闘いや体験は、「れふぁむ」でも意識的にとりあげた。女子の若年定年制、結婚退職制、昇格差別など、たくさんの女たちが、職場での男女平等をめざして闘っている。均等法は単に「差別撤廃条約」の批准という国際的な圧力のために出来たのではなく、女たちの闘いの成果であり、「れふぁむ」もそれに参加したと誇りをもっている。

＊次は男が本音で語る番—実質的な平等を作る時

もちろん、ことはそんなに簡単にはすすまない。女たちは不備な均等法と男の古い意職のために、離婚とか、子供を生

まないとか、結婚しないといった「犠牲」をはらって、自分の力で自らの解放をかちとりつつある。でも、男性の方は、企業にまるごと取り込まれ、挙げ句のはては「過労死」。「男女共生時代」「性別役割分担をなくそう」「労働時間を短縮しよう」と政府も叫んでいます。

今度は男たちが本音で語る番ではないでしょうか。なんのために働いているのかと。

「れふぁむ」は、1991年春の24号でしばし休刊します。次に再刊するときには沢山の男性に本音で書いてもらいたいと思っています。

発言

女性フォーラムに参加する楽しみ

平川洋児

私が毎日する家事はお布団の上げ下げだけ、時には洗濯物を取り込み、流しの洗い物をする、お風呂を洗いお湯を張る、ファンヒーターに灯油をいれる、たまには掃除機を持つこともある。都合の良い時だけ、気の向いた時だけの当てにできない無責任なお手伝いでしかない。とうてい家事を分担しているなどとは言えない。自由業だから病院勤めの彼女より家に居る時間は長いのに。

私は食後、お皿を運び佃煮や漬物を冷蔵庫にしまい、テレビの前に横になり新聞を読む。操さんは洗濯物をたたみアイロンをかけ始める。私は何となく居心地が悪く「明日の講演の準備をしようかな」と独り言のようにつぶやきながら、新聞を片手に自分の部屋へ逃げ込む。それでもお風呂にお湯を入れようと出て行くと、「ああ、洋児さん私がするから、いいわ」とアイロンを片付けながら言う。

このような後ろめたさを持ったまま岡山女性フォーラムに参加している。そして五年になるが、我が家の性別役割分担は相変わらずだ。男女平等には程遠い。

それにしても操さんは私に向かって男女平等の要求をしない、性別役割分担の理論を振り回さない、私のグータラ振りを責めない、愚痴らない。洗濯物を取り込んでとか、ご飯を

炊いてとかは言う、そして少しばかり家事を手伝うとうれしそうに「ありがとう！　ありがとう！」と繰り返す。だから私は操さんに言われると二つ返事で従ってしまう、それは理屈は言わないで、私の感情にやさしく訴えているからだ。

昨年の十月セミナー・ハウス・バラという広島県福山市の女性グループと交流会を持った。紐を引くと「歓迎　セミナー・ハウス・バラ　岡山女性フォーラム」と書いた垂れ幕が開く、僅か〇・五秒の歓迎の挨拶に始まり、会の始まりと終わりに歌ったり、誕生日の一番近い人を祝ったり。小グループに分かれての話し合いに時間をたっぷりと使い、一分間自己紹介等、遊びやゲーム的な要素を入れた運営をした。

セミナー・ハウス・バラのメンバーから戴いた札状には「初めての出会いなのに緊張せずに、あんなに楽しい時間を過ごせたのは久し振りです。私たちの集いも見習って柔らかくしたいです。真面目過ぎず、しゃちほこばらず、もっと気楽に楽しくと思いました。そして選ばれた者だけでなく、誰でも何時でも参加でき、それぞれが持つ資質や才能を提供できる集まり、雑多でゴチャゴチャしているけれど大きなエネルギーを持っているなあと岡山の皆さんから感じました」とあった。そして司会した私を素敵なエンターテイナーだと書き添えていた。

地上げであろうと、株の損失補塡であろうと、賄賂であろうと、結果が物を言う仕事の世界、能率・効率中心の男社会では愚痴は言えない、弱音は吐けない、ホンネを隠してタテマエに生きる勘定重視の感情無視の世界なのだ。

夏目漱石の「草枕」に「智に働けば角が立つ。情に棹させば流される。意地を通せば窮屈だ。とかく人の世は住みにくい」。男が威張って住みにくい「人の世を長閑かにし、人の心を豊か」にしようと、志を持つ女たちが集まり活動している。「長閑かにし、人の心を豊か」にしたい、そのようになりたいと望んで、岡山女性フォーラムに参加した。

愚痴が言え、弱音が吐け、ホンネが安心してしゃべれる、耳を傾けて聞いてくれ、辛いことも、うれしいことも解ってもらえ、共感してくれる。自分の才能や能力を生かしてくれ、足りないところを補いあえる仲間のいるグループこそ、職場で家庭で辛い淋しい女たちの憩いの場所だ。楽しいことはいいことです。本当の楽しさとは冗談やお笑いではなく、自分が尊重されているかどうかである。

目標は男女平等でも、方法は男の社会と同じではなく、新しいスタイルを創造したいと思う。感情に訴え、心に響くものをと考えている。私は会員と会員をつなぎ、先輩と新人とを結ぶコーディネーター役になりたいと思っている。生き生きと輝いている女性が好きだから。

「流れのままに」
しなやかに　軽やかに
風を　感じていたい
ゆるやかに　のびやかに
時の流れのままに
しなやかに　軽やかに
愛を　感じていたい
ゆるやかに　のびやかに
時の流れのままに

あなたの胸に抱かれていると
幼いころを思い出す
どこまでも青い海　走り続けた野原
遠く聞こえる　歌声を

あなたの瞳　とてもきれい
夢を見たいの　いつまでも
どこまでも青い空　ひとすじの白い道
夢を見たいの　いつまでも

沖縄のバンドの上々颱風の演奏する「流れのままに」を聞きながら書きました。

ぜひ、あなたの座右に！
親も、教師も、学生も
ウイ書房の近刊　予価一五〇〇円
小沢牧子著
『心理学は子どもの味方か？
―教育の解放へ―』

「……その仕事を十年ほど重ねた頃、月刊雑誌『新しい家庭科―We』に、「教育のなかの心理学」と題する連載を執筆する機会を与えられた。大学生たちと考えあうというスタイルを心がけながら、そこで綴ってきたたくさんの小文に手を加え、これまでに書いてきた他の文章を合わせて、一冊にしたものが本書である。
教育のなかに組みこまれている心理学の素顔は見えにくい。私たちの生活に次第に深く入りこんできている心理学のうらおもてを見さだめ、それを生活者の視座からどうとらえるのか。その論議に役立てていただければありがたいと思う。とくに、学校現場の教師たち、教師をめざす学生たち、そして何よりも子どもと共に生きていくことの困難がたちこめる時代の中で、迷い悩んでいる親たちに、私の心理学への問いを共有していただければうれしい。……」
（「はじめに」より）

発言

新しい男たちのネットワーク通信「サイレントレター」

安岡菊之進

ぼくは、『サイレントレター』という新しい男たちのネットワーク通信を'91年九月から発行しています。

十九歳の結婚、そして出産。二十五歳での離婚、子供との離別。障害を持った女性と「結婚」していたぼくの体験は、多くの「男」という性をもった人にはできない貴重な体験です。

自分の存在を確かめられず離婚しようと思ったこと。離婚して気づいたこと、学んだこと。その一つ一つの体験は、まったくプライベートなことですが、女と男、そして障害者と健常者の歴史をひもといていくとき、それは普遍的なテーマを含んだものとして、自分の中に大切な芽を育みました。

離婚をして何がつらいといって、子供と別れなければならないことくらい悲しいことはありません。あまりのつらさに離婚後の共同子育てを進める運動をしようと思ったくらいです。しかし、父親が子どもと別れなければならないという性差別の根底には、多くの男たちが、家事も子育てもせず女性に押し付けてきたこと、そして女性がさまざまな抑圧と差別の中で生きてきた長い長い歴史があります。子どもと引き裂かれること、それは多くのセクシズムの中のほんのひとつのことなんだと気づきました。

男らしさの神話。家事や育児に疲れ果てた女性たち。男の暴力。氾濫するポルノグラフィ。子どもに対する性暴力。男と女の性別役割。そして、変わらない男たち。それを自分の言葉で伝えていくこともぼくの仕事だろうと思います。

フェミニズムは多くの女性たちの生き方をかえ、社会を変えてきました。と同時に「男らしさの神話」を打ち壊してきたともいえます。それによって解放されていった男たちを、男たち自身の言葉で語っていくことは、男を変えていくうえでとても大切なことです。

「サイレントレター(SILENT LETTER)」とは、発音されな

い、語られることのない文字のことです。たとえば[WRITE](書く)の[W]や[E]。

多くの男たちは、サイレントレターにはなりたくないのです。かたや女たちは、人間の歴史の上で、いやおうなくサイレントレターであることを強制されてきました。男たちの世界の中では、家事・子育て・介助について、決して語られることはありませんでした。それを男同士で語るということはタブーにも等しいものがあります。

男が何かのきっかけで、家事・子育て・介助を余儀なくすることになると、ひょっとしたら、会社からも社会からも排斥されるかもしれません。が、イヤイヤながら家事や子育てや介助をするのではなく、かといって肩ひじ張った誇りをもつのでもなく、ごくごく自然に、日々の人間の営みとしてその生活を受け入れ、そこから見える景色を大切にして、社会のゆがみを見つめ直すことができたらどんなにすばらしいでしょう。そんな願いをこめて、『サイレントレター』という誌名にしました。

それは、現在のぼくのテーマでもあります。人工呼吸器をつけて地域で暮らすツレアイの介助を中心におく、今のぼくの生活。これといった定職を持たず、主夫のような生活です。女性であれば「私は主婦しています」と言えば、その肩書きは未だ日本の中では十分すぎるほどの社会的地位を持っています(スウェーデンではもはや「主婦」という言葉は死語になっていて、「女も男も、仕事も家庭も」が一般的)。が、男にとっては、この主夫のような生活を他人に語れるに至るまでには、さまざまな心理的な葛藤があります。

他人の目よりも何よりも、自分自身の中で受け入れることの困難さ。社会的にバカにされるんじゃないか。自分の生活を隠すことの卑屈さ。そんな思いが頭の中を駆けめぐり、自分の生活が社会的にどんな価値があるかということを語れるようになるまで、多くの時間を必要とします。

見渡しても、自分と同じような生活や考え方をしている男はほんとうに少ないけども、もっともっといろんなステキな男がいるはずです。ツレアイと一緒に対等に子育てをしたり、そのために仕事を変えた男。介助のために仕事をやめた男。「男らしさの神話」から解放された男たち。そんな新しい男たちが、どんどんカムアウトして自分を語り、男エゴの社会に対して静かに肩ひじ張らないでメッセージを発信できれば、こんなにうれしいことはありません。

女が男社会に対して主張してきたこと。それが「ひとり」からはじまったように、男が内なる自分をかえていくのも「ひとり」から始まっていくのだと思います。

そんな『サイレントレター』でありたいと願っています。

〈学習の主人公たち〉

「男の子・女の子」

福井県芦原町波松小学校三年生

「男の子に言いたい」「女の子に言いたい」

T

◆ぼくはようち園のとき、女の子になかされたことがあります。でも、だんだんぼくが強くなっていきました。そして、ようち園のときはやさしくなかったけど、だんだんやさしくなってきた。でも、四年、五年とこわくなっていって、強くなって弱くなって強くなって、とくり返しています。

六年生ぐらいになると女は強くなります。きょうふは、あと三年になってきました。六年生になると、あっただけでもふるえて、こわくなります。そして「おはよう」と気分がわるくなる声です。ようち園の女の子は「おはよう」とあかるい声です。六年の女子はきょうぼうにならないほうがいいです。

H

◆ぼくたちのようち園の時は、上級生の女の子はとてもやさしかったけど、今はとても女の子が強くて、ぼくたちがいじめられています。休み時間はいじめられるけど、じゅぎょうの時は、ぼくたちの組の女の子は、小さな声でちょっとしかしゃべりません。上級生の女の子は、二年生の男の子にも強く、なかすこともあります。二年生の女子にも二人ほど強い子がいます。女の子は、「アチョッ」と言ってパンチをして、弱い男の子をなかしたりします。女の子はとても強いです。

Y

◆ようち園の時は、なかよくやっていたけれど、今は女の子の方が強くなって、ぼくたちがいじめられている時もあります。

でも、女の子は、何でも発表する時だって声は小さいし、何も言いません。それなのに時々、いばる時もあります。でも、女の子のきげんがよい時には、なかよく遊びます。ぼくは、女はすきな方じゃありません。「女はもっと、おしとやかにしろ」と言いたいです。

R

◆今の六年生は、ぼくがようち園のときは、やさしかったけど、一年がすぎてからは、こわくなりました。ぼくとT君とKちゃんは、六年生の女の子に、「びし、びし」とたたかれたりするので、ぼくは「ふざけんじゃねえぞ」と言いたいくらいです。でも、そんなことを言うといつかは、五年生の女の子をなかまにして、ころされてしまいます。ぼくは、たたかれたりするけど、そのいたさにたえています。そして、その女の子からは、「はげあたま」と悪口も言われています。

Y美

◆男の子は、体育かんであそんでいて、ボールがあたっただけでも、すぐおこります。女の子がすこしいばると、「なめるなよ」といいます。女の子にすこしやさしくしてほしいです。また女の子にへんなあだ名をつけます。

おにいちゃんは高校生ですが、自分で立つのはいやだから、「ティッシュとって」とか「コップもってきて」とわたしをけらいみたいにつかいます。わたしは自分でやっているのに、わたしの一ばん上のおにいちゃんがそんなことをいうのはおかしいから、「自分でしてよ」というと、すぐおこります。そのとき、わたしが「なんでやし」といって、どんどんすごいけんかになっていきます。

N

◆Yちゃんやわたしがあそんでいる時に、男の子はぼうりょくをふるうのです。わたしは、男の子とあそびたいけれど、おこるからこわいのです。わたしは、T君たちとたたかいごっこした時に、「なんじゃ、てめえ。やるかやるか」とT君がいうので、こわいです。だから、やめてほしいと思いました。それに、強くけるのとパンチするのはやめてほしいなと思いました。

S

◆六年女子は、女子と女子のたいけつをしているようです。それで、人が少ないグループは、ランチルームで悪口をいっています。多い方のグループは体育かんへ行って、ボールを高く上げてけっていました。ぼくは、体育委いんなので、そのボールをいっしょうけんめいひろって、きぐしつに入れたけど、どんどんボールを出してけっていきます。

J

◆ようち園の時は、女の子はとても弱かったけど、今はとても強く、ぼくよりも強いかもしれません。たまには男が勝ちます。でも、ぼくらが勝っても、女の子は、「こんど会ったら、ぶっころすぞ」と言います。そして、男の子はおこるけど、一回ですぐやめます。女の子が外でけんかする時は、しつこく木や土のかたまりを投げてきます。だから、男はそのおかえしに、同じものの土のかたまりを投げかえします。

K

◆ぼくは、女の子は、すごくこわいです。女の子は、ぼくより弱いと思っていたのに、本当は、ぼくより強いです。すこしでも口ごたえすると、こっちへ来てなぐります。ぼくはそのとき、「死ねやバカー」といいたいです。でも、それがいえないので、だれかにいいたいです。女の子は、なぜこわいかというと、ぼくが歩いていると、ずっとまえのことを、いつまでもわすれないでいて、男の子をなぐります。そして、男の子をなかしてしまうのです。だから、とても女の子はこわいです。

D

◆ようち園に入った時は、みんなでなかよくあそんでいました。げんざいの女の子は、らんぼうになってきました。ぼくらは、女にらんぼうをふるうと、女もぼうりょくをふるってきます。女の子は、男に近づいているのではないかと思います。四年の男の子は、四年の女の子にまけているぐらいです。スポーツも、男より強い時もあります。

「男の子と女の子が仲よくすごすには」

T

◆昼休み時間にけんかをすると、ほとんどの人が、あやまらなくてその日も、その日も、つづいていって、始めからあやまって、けんかをやめたほうがいいと思います。でも、あやまらなくても、つぎの日、なかよしになる人もいます。どっちかが、あやまれば、またなかよしになっていけます。

三年生ぐらいだとごめんを一回言って、こんどからなかよしになっていけます。

H

◆朝きたら、みんなに「おはよう」といおうと思いました。今は、組の女の子とおにごっこをしてあそぶこともあります。ソフトバレーボールもやります。

帰る時も、「さようなら」と、みんなに言ってかえろうと思います。あいさつをすると、自分も気もちがいいし、言われた人も気もちよくなります。友だちが出きるわけは、このあいさつなので、どんどんあいさつをしようと思います。

「さようなら」「さようなら」などと、たが

いに言いあっても、うれしいです。もう女の子とは、けんかをしないでおこうと思います。

Y

◆休み時間に、女の子がはずしたボールが、当たったくらいでぼう力をふらずに、なかよく遊びたいです。それに、ぼくの投げたボールが、女の子に当たってしまったら、あやまりたいです。

それから、時々、家に帰っても女の子と遊ぶようにしたいです。そして、女の子とのけんかは、なるべく少なくしたいです。

R

◆勉強のとき、女の子がもんだいが分からなかったら、やさしく教てあげる。けしゴムやえんぴつをおとしたら、とどけてあげる。当番のしごとをわすれていたら、教えてあげる。

休み時間に、女の子の遊ぶあい手がいなかったら、いっしょに遊んであげる。女の子と遊んでいるとき、「ドッチボールしよう」といったら、すなおにその遊びをしてあげる。

学校から帰りに、「さようなら」といって帰る。

Y美

◆もし、男の子がこまってたら、たすけます。ボールにあたって、「ごめん」といおうと思います。朝会ったら、「おはよう」といおうと思います。あだなにはよばないで、ほんとうの名をいいていく。クラスがみんなといっしょに、考えたりたすけあっていくクラスになりたい。帰るときも、先生とごあいさつをするだけでなくて、「さようなら」と会った人みんなにいうといいと思います。

N

◆男の子となかよくいっしょに、遊ぶほうがなかよくなれると思います。休み時間や勉強の時間や家に帰るときに、男の子となかよくできると思いました。

S

◆休み時間にときどき女の子とあそぶことがあります。そして、たまには、けんかをしてしまうことが、あります。

ぼくが、女の子となかよしになるためには悪口言ったりたたいたりしないで、けんかになったら「ごめん」とか、ゆるしてもらうことばを四、五回いえばいいと思います。

J

◆勉強の時、ぼくが、わからなかった時、教えて下さい。でも、その女の子がわからないばあいは、ちがう人に聞きます。

そうして、休み時間の時は、一しょに、おにごっこや、かくれんぼをして遊びます。

学校から、一しょに帰る時は、「明日また学校で。それじゃさようなら」と言い合って、家へ帰った方がよいと思います。でもぼくは、いつもわすれてしまうので、これからは、ちゃんとわすれず言うようにしたいです。

K

◆勉強のとき、テスト直しのときに一人になったときにおしえてあげるといいと思います。休み時間に、一人だけあっちいけとかまじってやらんぞというのはやめたほうがいいです。ボールがもしあたったら、すぐあやまるほうが一番いいと思います。帰るとき、だれにでもさようならをいって、帰ります。小さい女の子がいてしらんぷりしていかないで、ちかくまでおくります。

D

休み時間、時々、女子に、ボールがあたる時があります。その時には、あいてにあやまってゆるしてもらいます。また自分に、何かが当った時、けんかをせずゆるしてあげればよいと思います。そして、女子だけ、なかまはずれにせず、女子もいっしょに遊びます。家へ帰る時には、「さようなら」といって、家へ帰ればよいと思います。

■小学校では

新しい・家庭科を・創るために

男の子・女の子

塚越敏雄
（横浜市港南台第三小学校）

私は、担任する四年生の子どもたちに班日記を書かせています。班や学級でのできごと、そしてそれに対して自分が思ったことなどを交代で、家で書いてくるのです。

その日記の中に「男の子なんて大きらい」と書いている子がいました。

四年二組の悪い所は、男子と女子が仲良くないところです。それは自分でもわかっているけど、男子と仲良くするように協力していません。

「男子なんてみんな大きらい。勝手すぎる」という気持ちが大きいからです。

この間の昼休み。

「おまえとおまえは外野に行け」

ドッジボールをしていると、ある男子が言いました。

わたしと鈴木さんは、外野に行きました。少したつと二、三人の女の子がこちらに来ました。

「あれ、どうしたの」

「A君が、外野に行けって」

「何かこれ、男子だけで楽しんでいない」

ドッジボールをしているところを見ながら答えました。

「ほんとだ。内野に入っている女子は四、五人。あとは全部男子だ」

私の心から、いかりがこみあげてきました。ひどい。ひどすぎる。

「おれたち、目標まもれたね」
チャイムが鳴ると、男子たちが言いました。
「何言っているの。目標の『男女協力する』なんて、ぜんぜんまもれなかったくせに」
このままでいいのか。もちろん、よくありません。それは、はっきりわかっているけれど、私の心はそうかんたんにかわりません。私の心の中では、「男子なんて、大きらい」という気持ちがますます大きくなっていきます。

ことの起こりは、二日前のことでした。
「学級ドッジボール大会をやろう」ということが、子どもたちから出され、学級会で話し合わされたのです。私は、三つの理由で、それに反対しました。
①「やりたい」というだけで、何のためにやろうとしているのかはっきりしていない。目的がはっきりしていないもののために、授業時間を使うわけにはいかない
②たとえ目的を作っても、大会当日だけの目的では意味がない。普段の生活に生かせるものでなくてはならない
③学級会の様子を見ていると、やることに賛成する意見があまり出ていない。みんなの積極的な気持ちがないものをクラス全体でやるわけにはいかない

いつも遊びの重要性を訴えている私が反対意見を述べていることに、子どもたちは意外に思ったようです。そして「このままでは大会ができなくなる」という危機感を持ち始めました。「何とか担任を説得し、納得させるような計画を作っていかなくては」と必死に考えました。そして、全員一致でこの日、次のように決定したのです。

(1)大会のめあて
①男女協力する
②今まで仲が良くなかった人とも仲良くする
③けんかをしないで、仲良くする
(2)すすめ方
大会当日まで仲の良い人だけでみんなで練習する

何かのイベントを成功させるためには、相当なエネルギーを要します。そのエネルギーを学級全体に生み出すためには「自分たちの要求によってやれるようになった」という事実をつくり出す必要があると、私は思っているのです。そして、目的と、そこに至る道筋をはっきりさせていくことはイベントを成功させる鍵だと思っているのです。
一方、子どもたちにとってイベントは、やりたいからやるものです。何かの目的を実現させるためにやろうなどと考えないのが普通です。けれども、担任である私は、イベントを

どのようなクラスを作っていくのかということと結び付けて考えているのです。

さて、こんな経過を経て、冒頭の日記にある「昼休み」になりました。

私も練習に加わろうと、少し遅れて運動場に出てみると、運動場の真ん中では男子ばかりでドッジボールをしていました。女子は、わずか三名です。女子はどうしたのだろうと見回すと、隅の花壇の方で、女子だけでドッジボールをしていました。これでは、せっかく決めた「めあて」も「やり方」も宙に浮いてしまいます。

五時間目の学級会では、大会のプログラムやルールを決める予定でいましたが、急遽、この問題を話し合うことにしました。

――君たちは、「男女協力する。みんなで練習する」と決めたはずです。どうして、男女一緒に練習していなかったんですか。

(初めのうち、子どもたちは何も言いませんでした。男の子も女の子も一様に黙っているのです。そこに、子どもたちの間にわだかまる強い不信感を感じました。「それでは『めあて』も『やり方』も守ってないので、ドッジボール大会は中止ということでいいですね」と念をおすように言ったら、ようやく意見が出始めました)。

▼女「最初は一緒に練習していたんだけど、男の子たちだけ楽しんでいてつまらない。だから、やめちゃったんです」

▼女「女の子に『外野に出ろ』と命令するように言ったり、外野に出てボールをとろうとすると『取るな』と言ったりしました。これでは、おもしろくなくなります」

▽男「男が中心になってやっているんだから、男の指示に従ってほしい」

▼女「『ボールを取るな』ということまで指示するんですか。男の子の指示に従っているだけでは、つまらない」

▽男「どうして、男が中心だと嫌なんですか」

▼女「男の子も女の子も一緒にやっているのに、何だか女の子は関係ないみたいに外野に行かせる。だから嫌なんです」

▽男「指示に従うのが嫌なら、嫌とはっきり言えばいい」

▼女「『取るな』と言われても、取っていいんですか」

▽男たち「そうだよ」

▼女「でも、男の子は指示に従わないと、すごく文句を言ってきます」

▽男「女の子たちは、自分も楽しみたいのなら、少し男の意見も聞けばいいと思います。ボールが速くて嫌だから、つまらないんじゃないですか」

▼女「ボールが速いから嫌なんじゃありません。男の子が中

心だから、つまらないんです」
▽男「ボールを取れなければ、逃げるだけ。これでは勝てないから外野に行ってもらうんです。男の方がじょうずなんだから、男が中心になるのはあたりまえ」
▽男「それに、女の子はボールを取れないと言っているけど取ろうとすれば強くなります。女の子は、もっと練習すればいいんじゃないですか。自分が強くなれば、内野になれると思います」
▽男「強い子が内野じゃないと、すぐあてられてしまう。外野だとあてられる心配がないから外野に出すんです」
▼女「そうやって女の子を外野に出すのなら、女の子を邪魔にしているのと同じです」
▼女「外野の女の子は、つまらないんです」
▽男「だったら、練習して強くなって、内野に入れるようになればいいじゃん」
▼女「それだったら、何のためにドッジボール大会をやるんですか。男の子だけが楽しむためにやるんですか」
▽男たち「……」
▽男「みんなが仲良くするため。みんなが楽しむため」
▼女「女をのけものにして、みんなが楽しむことなんかしていません」

一時間の話し合いの最中、私はほとんど口をはさまず、子どもたちのやりとりをじっと聞いていました。そして、考えていました。勝ち負けを競うようなゲームでは、やはり力の強いものが中心にならざるをえないのかと。弱いものは、強くなるまでじっと待っていなくてはいけないのかと。努力しても強くならなかった時は、楽しむことまでがまんしなくてはいけないのかと。

私は、これからの進め方も考えていました。私の方が方向を示し、その方向に子どもたちをもっていこうかと。けれども、思いとどまりました。この問題は、子どもたち一人ひとりにもう少しじっくり考えてもらってもいいように思えたのです。今の一時間は、それぞれがそれぞれの立場に固執してしまっていたようにも思えました。そういう時に、無理やり教師の結論を押しつけるよりも、子どもたちが自分に向き合う時間を作った方がいいように思ったのです。十歳という成長の節目を迎えている男の子にも女の子にも、お互いを理解しあう、またとない機会になるかもしれないと思えたのです。

この日、家で「学級会のことで思ったこと」を書いてもらいました。

▼わたしはどれいのように指導されるのが、とてもいやなのです。このままでは、みんなで考えて作った「みんなで作ろう楽しいクラス」にはなれないと思います　（今井紀子）

▼わたしは、男子にパスしてほしいし、内野に入れてほしいのです。このままでは、男女の仲がよけい悪くなると思います

▽女の子たちは『指示されたくない』と言っているけど、何も指示しないと、自分かってな動きをします。チームワークを考えた動きをしません。それに、男が「ボールを取るな」とか「外野に行け」とか言ったとしても、男の言う通りにした方がいいか悪いかくらい、四年生だったらわかると思います。女の子たちは、その時に言わないで、後からかげでこそこそ話したり、いやみみたいに言っています。その方が悪いと思います

（可児竜太）

▼女の子は、外野にさせられていやだと思ったら「いやだ」とはっきり言えばいいと思います。そうすれば、男の子たちも、その通りにしてくれるのではないでしょうか

（加藤万紀子）

▽ぼくの班の女子は「もうドッジボール大会、やらなくていい」と言いました。「全部、男子がボール取っちゃうんだもん。それに、取れるボールも『取るな』と言って取らせてくれないんだもん」と言いました。ぼくは、ドッジボール大会をやった方がいいと思います。今日の放課後、ぼくのチームの人たちが集まりました。ぼくは、女子にパスしました。こういうことをやっていけば、女子もつまらないとは言わないんじゃないかなと思います

（高木吉弘）

子どもたちは、友だちの書いた作文をじっと読んでいました。そして、それは少しずつ心の中に変化をもたらしました。冒頭の作文を書いた子どもも、やがて、こんなことを書くようになりました。

「男子の悪い所、女子の悪い所を言い合ったあの日。私は男子の良い所をまったく見つけようとしていませんでした。相手の悪い所をひっぱり出し、自分たちの悪い所をみとめず、言い合っていました」

けれども、子どもたちが簡単にそう思うようになったわけではありません。強い子にものを言えない、あとで何か言われるのがこわい、人からうらまれたくないと思う自分自身と向き合わざるを得ない、つらい時間も経験したのです。相手を理解するためには自分を見つめることを必要としました。

■中学校では

新しい・家庭科を・創るために

共学家庭科を実践して感じること

―性差別のない学習場面を―

金子新吾
（宮城県塩釜市立第二中学校）

1　はじめに

新任で、現任校に赴任してきて三年が過ぎようとしている。着任早々、「家庭科もできる技術の先生」などと紹介され憤慨したことや、専任の教員が家庭科一名（全クラス数18～19）しかいないことを理由にしてはいたものの、共学どころか、男子は家庭系列の一領域乗入れさえも行われていない状況であったことを思えば、一・二学年だけではあるが、共学を実施していること（来年度は、全面共学実施の予定）や、私が（技術科ではなく）家庭科の教員であることが浸透してきたことは、大きな進歩であるように思う。

しかし、男子の家庭系列履修や、共学家庭科に対する教職員や親たちの反応をみると、まだまだ伝統的性別役割分業意識が深く根付いていると感じるし、また、家庭科自体に対しても「家事の技術」を教える教科のイメージをもって対応されることが多いことからも、理想と現実の隔たりを強く感じている次第である。

2　勤務校の状況など

我が校は、新興住宅地と旧来の住宅地の入りまじる中規模の町なかにある学校である。伝統的地場産業である漁業（販売・加工）に携わる親、周辺都市の企業に勤務する親が半々といったところである。

技・家担当は、家庭科免許所有者二名（私と、私と同年に

移動されてきたベテランの女性の先生)、それだけでは全クラス数を担当しきれないということで免外担当者が二名(女性一名――かなりの年数、家庭科を免許外で担当――と、男性一名、二名とも保体が免許教科)となっている。

生徒たちの状況はといえば(どこでも例たようなものかとは思うが)、ごく一部のいわゆるまじめな生徒たち、大多数の適度にやっている生徒たちの他、残念なことに反社会的行動をとる生徒たちも多く、授業への不参加、喫煙、校舎の破損、万引き、金銭関係のトラブルなども多々みられる状況である。

我々教師の放課後は、数多い学校行事を切り回していくためか、問題行動に対する生徒指導に費やされていることが多い。

親たちの状況も、近年の社会状況を反映して、学校をしつけの場にしてほしがる親、全てにおいて批判的な親、高校進学のことしか念頭にない親などが入りまじりつつも、ごく普通の親が大多数というところであろうか。

この、親たちの状況に関しての記述に、ご批判の向きもあると思うので補足すると、私は、学校は知的訓練の場であることが第一義にあると考えるので、家庭でできないからと中学生にもなった子どものしつけを教師に依存するのは、親としての義務放棄であると考える。かといって、昨今の識者(と呼ばれる人々)や、マスコミの論調に乗って、感情論で学校批判をしたり、子供たちの問題行動の責めを学校に求める親の態度も、基本的には前者の親と同じと考える。

3　共学家庭科に関して

私が中学生の時、技・家は「男子向き・女子向き」の時代であったし、高校は男子校だったから、家庭科はかなり縁遠い教科であった(調理や被服は好きだったが)。

大学は、教育学部ではあるものの家政科ではなかったから、ちょっとしたきっかけから「家族関係学」の講義を受け、家政科の多くの教官と接する機会がなければ、家庭科の教師になることもなかったと思うと不思議な気がする。

私が「男子にも家庭科を」と三年間言い続け、赴任当初から男子の家庭系列履修を、二年目から共学家庭科を、反対論もある中で行ってきたのは、大学時代に感じた「家政系すなわち女子対象、という風潮でなかったら、遠回りしなくてすんだのに」という気持ちと、講義を聴いていて、基礎知識不足で理解できなかったり、実習のときの基礎技能がないための、もどかしい思いに端を発しているのかも知れない。

また、私は、一人の人間が、生活の知識・技術を身につけていないことは、自立していないことであるとして三年間の家庭科の授業を行ってきた。これは、家庭を男女が協力して

築くこと――社会の基本を家族として捉えること――を基本理念とするのではなく、個人をこそ社会の基本、個人の集合によって社会が構成されるという考えに立ってのことである。

共学家庭科に関して、多くの実践報告を見聞きしたり、私の周囲の反応をみていると、家庭科は、家事分担の平等のための教科であるかのように錯覚してしまう。

男女がともに学ぶ家庭科は、将来、婚姻によって家族を構成したときのために行うのではなく、自立した人間形成のために、性差別のない社会の実現のためにこそ必要であると考えるのだが、いかがなものであろうか。

4　反応様々

私がこの三年間で担当したのは、次の通りである。

〔一年目〕

・2年生――食物1・2、木材加工2
・3年生――住居、栽培、電気1・2　男子全員、別学で

〔二年目〕

・1年生――食物1、木材加工1…三組を共学で
・3年生――住居、保育、電気1…男子全員、別学で

〔三年目〕

・二年生――被服、食物2、木材加工2…五組を共学で

これらの領域に関して、共通して基本方針としたのは、領域に関する基礎的技能の修得もあったが、それぞれの領域についての現在の自分の生活上の諸問題を考えさせることであった。

たとえば、食物領域では、食品の安全性、食生活の乱れについて、被服領域では、合成洗剤による環境汚染、被服の購買行動における諸問題などである。

技術系列の領域についても生活から離れることを避け、電気領域は、住生活の一環として取り上げ、エネルギー問題や原発問題などもテーマとした。また、保育領域では、いわゆる「子育て準備教育」や「性教育」ではなく、人間の発達環境としての家族や社会の問題を取上げるようにした。

全体的に生徒たちは、実習（調理実習・被服製作・木工など）については、楽しみながら行うが、調べたり考えたりする活動については難色を示しがちであった。

これは、「技・家すなわち作る教科」のイメージや、資料収集をしたり、考えをまとめたりすることへの苦手意識からくるものかと考えている。ともあれ、演習を取り入れたり、（提出率は悪いが）レポートを課したりして、生活について考えることを主な目的としてきたつもりである。

そのような中で、親たちや、周囲の教師たちの反応は、私の理想とは程遠いところにあるものも多くある。例をあげると、

◇台所のことや縫い物・育児を学ぶと男らしさがなくなるので教える必要はない（女子の技術系列履修に対しては同様の批判は聞かれない）

◇男でも、独り暮らし（独身や単身赴任による）をしたときに困るから、料理のことくらいはできないといけないね（これに、奥さんが病気のときに困る、という理由が入ることもある）

といった、性別役割分業意識からくるもの、

◇家庭科で、レポートや演習をするのは、生徒に負担が大きい（試験の論述も）

◇問題行動のある生徒も、物作りをさせておけばおとなしいのだから、実習を多くすれば良い（技・家では、講義などせずに、実習さえやっておけば良いのではないか）

といった、家庭科（技・家）とは技能のみの教科と考える発言である。

我々教師は、親や周囲の教師を相手にするのではないとはいうものの、生徒たちにとって身近な社会環境といえる彼らの、これらの反応に対して、どう反論していくか、根強い意識に対して、言葉での対応は意味を持たないと思えるし、かといって、実績で対応するには自分自身が未熟であり今後の課題とするところである。

5　まとめに代えて

教師になってのこの三年間、よく質問されたのは、「どうして家庭科の教師になったのか」ということである。

この質問は、頭に「男なのになぜ」がついている質問なのだが、私は、大学で家政科の科目を履修したいきさつを話すだけである（本来の専攻は、障害児教育なので、そこからそれていった経緯は話せるのである）。

相手は、もっと違う答えを期待しているのか、不満げな表情であるが、答えようがないのだからしかたがない。

私は、男女関係なく家庭科は人間として自立して生きていく上で重要な教科であると感じたから、家庭科を教える道を選択したのにすぎない。

また、「家庭科に男性の視点を入れて新風を吹き込んでください」という励ましもいただくことがあるのだが、男性の視点たるものが何なのかわからないので期待にお応えしようがない。

そして（調理に関してはそうでもないのだが）、被服の実習も教えることに対して、「縫い物もできるのですか（男なのに）。すごいですね」という感想もいただく。これは、保育に関して、「育児のことも…」と変わることもあるが、大学で鍛えられ、できないことが悔しくて家でも練習すること

を四年も（大学には五年いたが）つづければ、大低のことはこなせるようになるものである（だから、育児に関しては、知識はあっても実践できるとはかぎらない）。

せっかく感激したり、励ましてくださったりした方々には申しわけない言い方だが、彼らは、4で述べてきた人々と何ら変わることがないように感じる。

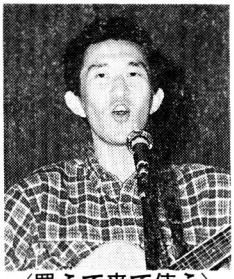
家庭科は、人間一人一人が、生活の主体者として生きていく知識や技術を身につける教科であり、そこには、男・女という性別による差異は介在しないはずだし、性別によって、学習の機会を奪われてはならないと思う。

私は、家庭科教師として、この問題に向き合っていきたいと考えている。

最後に、私が家庭科教師になるきっかけを与えてくださった福岡教育大学の秋山晴子先生、高橋久美子先生、甲斐純子先生他家政科の先生方、ご本人はご存じないのだが、We編集長の半田たつ子さんに深く感謝申し上げたいと思う。

ひと

Weではヤマケンの愛称で親しまれている山本謙吉さん。'90年夏季フォーラムではチャーリー吉田さんと「せっけんコンサート」で子どもたちに大うけ。そして'92年夏季フォーラム実行委員長に決定。'91年度前半期『買うて来て使う』を連載。生活道具のひとつひとつにこだわり慈しむ暮らし方、生き方にとても好感がもてた。が、お若いのにどうしてかとずっと聞いてみたかった。お祖父様の代から大工さんで、お父様が「道具を大切に、よく手入れをしてるのをすごいなあと小さい頃から見ていた」と伺って納得がいった。



〈買うて来て使う〉の

山本謙吉さん

'64年、兵庫県に生れる。小学校低学年までは体が弱く、持病のぜんそくがあり、年がら年中何かの薬を飲んでいたが、それでも外で友達と遊ぶのが好きで「どんくさい」から怪我もしょっちゅう。几帳面な性格の子どもだったのが、いまは反動でずぼらになったとも。

子どもが好きで、小学校の先生になろうと教育学部に進んだが、採用試験のための勉強が面白くなくて、六年間在籍したが、中退。有機野菜の八百屋さんで働いたり、年末年始の郵便局のアルバイトをしたり、その後本屋さんに勤めて三年になる。大学を中退した時にご両親から勘当され、いまでも「定職につけと心配してくれはる」そうだが、ご本人はとんとその気がないらしく、時間的に拘束されるよりは、なんとか凌いでいけるだけ稼いで残りの時間を好きなように楽しみたいという。

「いま最も憧れているのは『セロ弾きのゴーシュ』。楽器を鳴らしていると動物たちがやってくる、そんな暮らしはないもんかいな」と。宮澤賢治は「一日四合の玄米を食べ」たけれど、ヤマケンさんは一日五合のご飯を食べる。とにかくご飯をおなかいっぱいおいしく食べられれば有難いと思えるという、宮澤賢治の生まれ変りのような人。（河村）

■高等学校では

新しい・家庭科を・創るために

高校生に男女のかかわりをどう教えるか

―伊勢物語第二三段『筒井つの』を教材として―

上西起代美
（大阪府立泉北高等学校国語科）

伊勢物語第二三段は古来よく知られた話で、高校の古典教材としてもよく取りあげられている。

幼なじみの男女が、女の両親の反対をも押し切って二人の愛を全うして結ばれるが、二人の生活をバック・アップしていた女の方の親が死んでしまうと、男は新たな生活の後見者を求めて河内国高安に女をつくってしまう。しかし、もとの女は嫉妬する様子も見せず、男が別の女のところへ行くことも咎め立てしないので、不審に思った男は別の女のところへ行ったふりをしてこっそり庭の植え込みに隠れてもとの女の様子を窺った。他に男でもいるのでは、という男の卑しい疑念に相違して、そこで男の見たものは、夜間に山越えをする夫を気遣う歌を詠む女の姿であった。女の自分への深い愛情に打たれた男は、以後、高安の女への心が離れ、時折たずねても欠点ばかり目につき、とうとうその女のところには行かなくなってしまった――。

これまで、この話は「女」の心ばせのみがクローズ・アップされてきたきらいがある。私が高校生の時も、男性の国語教師から、どんな目にあっても耐えて一人の男を愛し抜く女の心の美しさに、離れていた男の心ももどるのだ、と教えられてあまり興味を持てなかった記憶がある。これまでの世の

大方の受けとめ方も、この男性教師と似たりよったりだったのではないか。注釈書、指導書も「なぜ、もとの女は男が出かけているのにきれいに化粧したのか」「なぜ、男はもとの女の歌『風吹けば沖つ白波たつた山夜半にや君がひとり越ゆらむ』に深く感動したのか」などに力点を置いて解説している。

しかし、私は従来の読み方では飽き足りない気がしていた。何が飽き足りないのか。何度も本文に目を通してみて、「男」のありようへの批判の視点の欠如であると思い至った。私がこの話を授業で扱うなら絶対、「男」のありようへの問題意識を喚起させよう——そう思った時、この話を教材化する意欲が湧いてきた。従来の古典学者から言わせれば邪道であるかもしれない。作者の意図を歪曲していると考えられるかもしれない。

しかし、作品は書き終えた瞬間から読者の受容に任せられるものだし、古典作品も、読み継がれるうちにその時代時代において新たな読み方をされ、新しく受けとめ直されて現代に至っているのである。現代に生きる我々が、我々なりの問題意識を反映した読み方をすることが、古典を読む意義ではないだろうか。

このように考えて、私は「男」に関する「疑問」を拾いあげた。

疑問その一

この話の男女は「井のもとにいでて遊びける」幼なじみである。ここには子供の親たちも生活に必要な水を得るために頻繁に足を運んでいたことだろう。「井戸端会議」の言葉もあるように、顔見知りに会うことができ、世間話に花が咲く、大人の社交場でもあったから。幼なじみの男に関しては、女の両親も、男の生活環境ぐるみ、熟知していたことであろう。ところが、娘がこの男でなければ一緒になりたくない、とまで熱愛する男と娘を結婚させようとはしないで、他の男と結婚させようとして娘の抵抗にあっている（本文「(女の)親のあはすれども、聞かでなむありける」）。これは、人生経験を経た親の目を通してみると、娘の将来にある危惧を抱かせるものが男にはあったのではないか。

疑問その二

親の反対をも押し切って双葉の恋を実らせた二人にも人生の秋風が吹いてくる。それは「女」の両親の死であった（本文「女、親なく、たよりなくなるままに、『もろともに言ふかひなくてあらむやは』とて、河内の国、高安の郡に、行き通ふ所いできにけり」）。「女」の親が亡くなり生活のバック・アップをしてくれる存在がなくなると、「男」は「二人してみすぼらしい生活なんかしていられるか」と、河内国高安に後援者を求めて別の女をつくった、というのである。「女」

の親に経済的に依存している生活力のない男であったこと。また、親が亡くなれば新たな支援者を求めて別に通い所をつくる、という寄生的な発想の持ち主であることがこの記述から窺われる。

「高安」という地名は今も東大阪市に残っていて、当時は草香江と呼ばれる入り江の岸になっていて、瀬戸内海を航行する船の停泊地帯になっていたのではないかと推測できる。「女」が「男」を想って詠む歌の「風吹けば沖の白波たつた山」の部分は、単に竜田山の「たつ」を導き出すための修辞であっただけでなく、当時の人々にとっては生駒山系から河内方面を望んだ時の実景であったと推測できる。高安の「女」の実家はこのような立地を生かして海上貿易を営んで財を成したものでもあろうか。伊勢物語のこの段と同様の話が大和物語一四九段にもあるが、高安の「女」に関して裕福な家の娘である旨が記されている。

こうしてみると、生活のために女を利用するこの「男」の打算がいよいよ明確である。二人して貧乏なんかしていられるかと、自分だけは資産家の娘にとり入って生活の安穏を得ようとするのは、現代流にいえばまるでヒモである。当時の社会慣習が婿の世話を妻の実家がするという通い婚の結婚形態であったとはいえ、一度でも関わった女については後々まで生活の面倒をみた光源氏などとくらべて、何とも浅ましく、無責任だとは言える。

しかも、他所通いを咎めもせず送り出す女の行為を、自らの人格の卑しさと同レベルにひきずり下ろして「他に男がいるのではないか」と疑い、ワナをしかけてひっかけようとするに至っては、どこまで自己中心的で身勝手なのかと思ってしまう。当時の人々は、こんな男の身勝手さに気付かなかったのだろうか。いや、後世の男尊女卑、儒教的男性中心主義に慣らされた人々が読み取れなかったのではあるまいか。作者はこの「男」を批判さるべき存在と思っていたからこそ、疑問その一で述べたような設定をしたのではないだろうか。

疑問その三

幼なじみの「女」の自分を思い遣る歌に感動し、高安の「女」から足が遠のいた「男」は、まれに高安に来ても、高安の「女」の欠点ばかりが目につき、いや気がさす。本文中で「男」の愛想づかしの原因となった行動というのは「手づからいひがひ取りて、笥子の器物に盛りつける」、つまり、自分の手でしゃもじを取って飯椀にごはんを盛りつけてあげた。

今の我々の感覚からすれば、妻がまめまめしく夫の食事の世話を焼く、ということに異和感がない。ところが「男」はこれが気に入らないという。たいていの注釈書には当時は待女を介さずに直接夫の食事の世話をするのははしたないこととされていたから、とある。しかし、社会慣習が異なるとは

いえ、夫婦の仲で、気を許している時に身近で身の回りの世話を焼いたことが許せないとは考えられない。

源氏物語にも、若い光源氏があまりにもきちんとした正妻の葵の上には親しめず、あどけなく慕い寄る紫の上には親愛感を持つ記述がある。王朝人とて、男女の思いの根底までさほど現代と異なるものでもないだろう。とすれば、「男」が高安の「女」を嫌がるのは、あまり説得力を持たず、「男」の勝手な不満、と考えてもよいのではないか。嫌いな人間が何をやっても鼻につく、といった程度の、身勝手さではないか。高安の「女」のなれなれしさを嫌った「男」のありようは、むしろ「男」の狭量さを示すものととらえることもできるのではないか。

私は一年生に、授業にあたって右にあげた三つの疑問を問題提起しながら解説をし、最後に次のような質問用紙を配布し、生徒の意見をきいた。

一、次の1～7のうち一つを選んであなたの考えを自由に述べよ

1、幼なじみの「女」が結婚に関して親の意見をきかず、自分の意志を押し通したことについて

2、「男」が幼なじみの「女」の親の亡くなったあと他に恋人をつくったことについて

3、幼なじみの「女」が、他の女に会いに行く「男」を快く送り出したことについて

4、幼なじみの「女」が、自分を裏切った「男」を深く愛し続けたことについて

5、「男」が自らの裏切りにもかかわらず、「女」が変わらぬ愛情を持ち続けているのを知り、新しい恋人を捨てたことについて

6、高安の「女」が、「男」となじむにつれ、所帯じみてきたことについて

7、「男」が高安の「女」が所帯じみてきたことをいやがったことについて

二、あなたは平安時代の雑誌『王朝明星』の人生相談欄の回答者です。

1、大和の「男」　2、大和の「女」　3、高安の「女」のいずれかからあなたに人生相談が持ちかけられたとすると、あなたはどう答えますか。1～3のいずれか一人を選び、相談の文章とあなたの回答の文章を書いてみよう。

生徒の意見を次にまとめてみた。

1、幼なじみの男女のその後の展開が「女」の親の危惧が的中したせいか、親の意見を考慮する、という意見が意外に

多く、自分の意志を貫く、という意見と半々ぐらいだった。しかし、親の意見を考慮する、という意見も、自分の考えに自信が持てないから、あるいは人生の先達としての親の意見には得るところがあるだろうから、といった意見が多かった。中には「女」が親の意見もきかず、他に通い所を設けても咎め出てせず待ち続けたことを、女の忍耐の美徳ととらえるのでなく、自己の情念への忠実さとしてとらえた次の意見もあった。

「幼なじみの『女』は普通に見ると嫉妬もなく、本当に男を愛していたように思えるが、読んでいるうちに、『女』はあまりにも『男』を独占したいゆえに、執拗に『男』をあきらめず初志を貫いたのだと思われてきた」「この女は自分の気持ちを一番大事にしたのではないだろうか。もしかしたら女は男よりも自分の〝愛〟にほれていたのでは？」

2、全員「男」の行動に批判的であった。女子生徒は「許せない」「我慢できない」といった意見で、「ほんとにこの男は最低な男だと思う。女の親がかわいそうだ。この男に恋人にされた高安の女も結局、不幸になっている。このまま男がまじめになったとは信じられない」もあった。男子生徒も、「自分ならそんなばかなことはしない」「自分なら親をなくして傷心の妻を慰めて、より深い愛情を注いで守ってやるべきだと思う。それができないなら結婚などする資格はない」といった意見が多かった。しかし、「今の時代の自分ならこんなことをしないと思う。この作品が作られた時代に生きていたら、もしかすると、この男と同じようなことをするかもしれないと思う」という意見もあった。

3、ほとんどが「自分なら我慢できない」という意見だった。また、快く送り出したことに「女」の精神力の強さ、他の女には負けない、という自信をみる意見もあった。

4、約八割が「見切りをつける」、あとの二割が「待つ」で、「待つ」という者も「相手にもよる」「その時になってみないとわからないが」「急には変われないので」といった条件付きだった。

5、「もとのサヤにもどる」ことを支持する意見が多かったが、「自分も同じようにしたと思う。でも、女を裏切ってはじめて、自分はとても愛されているんだと分かったら、すごく自分はバカなことをしてしまったと思うにちがいない。それにやっぱり元の女の方がいいからおまえは捨てるなんて新しい恋人にいうのは、人間として恥だと思う」もあった。男子生徒に一人「自分なら幼なじみの女が自分のことを思ってくれているのがわかっても、今の女の方を大事にしたい」という意見の者もいた。

6、全員、所帯じみるのは当然だという意見だった。高安の「女」は「男」の女への要求を把握できなかっただけで、

それは別に「女」の科ではない、とする意見が多かった。

7、全員、自分ならなれをいやがらない、という意見だったが、なれにも限度がある、という条件付きの意見もあった。

また、「所帯じみてきたというのは、高安の『女』を飽きてきたようにしか思えない」「『男』は『女』の性格とか本当の部分を気に入って好きになったわけではなかったのだろう」もあった。

1、「男」の行動については概して批判的で、反省を促す声が目立った。生徒の回答例を三つあげる。

Q　私は大和の妻を裏切り、次は、高安の恋人を裏切った格好になり、今は身の置き場がない状態です。どうしたらいいでしょうか。

A　あなたが二人のいずれを選ぶにしても、また、選ばないにしても、「けじめ」をはっきりつけることが一番大切な事だと思う。このような結果を導いたのは、あなたの優柔不断のせいだから、「けじめ」をきっちりつけないともっともっとあなたは心身ともに居場所を失うと思う。

Q　幼なじみの女が、まだ私を愛してくれているようだ。妻のもとに帰った方がよいだろうか。

A　覆水盆に返らずという言葉通り、妻のもとへ帰るのはみじめだし、難しい。けれど、妻は盆を用意して帰りを待っている（幸せなやつだなぁ〜）。自分の醜さはどう弁解しても消せないけれど、みじめさを力に変えてくれるであろう妻を、今度は自分が深く愛して守り続けられる自信があるなら帰った方がよい。そして、妻が、待ち続けていてよかった、親にさからってまで結婚してよかったと思われるほどの上等な人間になれるよう努力しよう！

Q　私が他に恋人をつくったのにもかかわらず、妻は私のことを今でも愛してくれているのに気付いたんです。私は妻がかわいくなって、それから恋人に会いに行っていません。それでよかったのでしょうか。

A　恋人を本当に愛していないのならそれでいいんじゃないですか。恋人さんには悪いけど、あきらめてもらうしかないですね。でも、本当に妻のことを愛しているんですか。妻があなたを愛してくれているのがわかったから、それで妻がかわいく見えてきただけじゃないんですか。そうじゃなくて、本当に妻のことを愛しているのだったら、あなたのしたことは正しいかもしれません。あなたのかわいい妻とこれからもずっと仲良くしていきなさい。

2、男を待った女の内心の思いについてさまざまな解釈が可能なので、この問題を考えた生徒が最も多かった。

Q　夫が高安の女のところへ行ってもどってこなくても、や

はり待ち続けるべきか

A　待つ義務もないし、夫はあなたに待ってもらう権利もない。待つことも待たないこともどちらも悪いことではない。

だけど、待つか待たないか最後に決めるのは自分で、私ではありません。自分が後悔することのないよう、自分で決めるのです。どちらかを選択して、それが悪い結果だとしても後悔しないで下さい。あなたは彼を愛し、そして、自分で道を決めたのですから。

Q　親の言うことを聞かずに「男」を愛して結婚したのはやっぱりまちがいだったのでしょうか。

A　まちがいだったのかもしれないけど、私は人をそこまで愛するということはすごいことだと思う。だからこういう生き方はこういう生き方でいいと思う。

Q　私の夫には他に女がいるようです。でも、私は夫を憎んだり、他の男を愛したりなどできません。この気持ちはどうすればいいのでしょう。

A　他に女がいると知りながら、なお夫を愛すあなたには、夫を愛し通すこと以外にはないと思います。そうすればいつか夫もめざめて帰ってくれるでしょう。その気持ちを大切にして下さい。それだけ愛せる人がいることは、とても幸せなことだと私は思います。

Q　「男」は本当に貧しい暮らしがいやで河内へ行くようになったのでしょうか？「高安の女」の方を私よりも愛しているのでしょうか？　私は「男」を今でも愛しているのですが、別れた方がよいのでしょうか？

A　あなたは「男」を愛することに、不満を感じているのですか？　もし、見返りを期待するのならば、別れるのはあなたの意志です。しかし、「男」がただ単に貧しい暮らしがいやであったのならば、いずれ愛のある生活にもどるでしょう。あなた自身、愛することに何ら不満を感じていないならば、いつもどるか分からない「男」を待つのもよいと思います。

Q　夫が新しい恋人を作ったのですが、どうしたら、自分の方へもどって来てくれるのでしょうか。

A　そんな男とは、さっさと別れた方がよいかと思います。もし、どうしても、とりもどしたいなら、その新しい恋人より、自分の方がずっとものわかりもよく、やさしい女だということを、夫にわからせてあげたらよろしいかと思います。でも、私だったら、この男よりいい男を見つけて、前の男を見返してやるんですけどねえ。まあ人それぞれですよ……。

3、ほとんどの者が「男」をあきらめて出直すべきだと回答している。理由は「男」は真に高安の「女」を愛しているとは思われないこと、「男」は愛するに値する人間とは感じられないことをあげている。

Q　大和の男が最近私に冷たいの。彼には妻もいるけれど、私はあの人以外は考えられない

A　大和の男は、あなたの所帯じみたところを見ただけであなたをイヤになった男。はっきり言って男は、あなたのすべてを好きじゃないと思います。きっぱりあきらめて新しい恋に走りましょう。

Q　なぜ、あの人がもう来なくなってしまったのでしょう。私のどこがいけなかったのでしょう。

A　この男は、常に女に高貴さを求めていたのでしょう。幼なじみの女の将来が危うくなるとあなたの元へ走り、あなたの中に所帯じみた親しさが現れ、初めの気品が失われつつあると、理想からかけ離れた、と思ったのでしょう。常に理想を追うプライド高い人なのですね。

Q　私は「男」が好きで、あの人がくるたび、心をつくしています。その思いは大和の「女」に負けてはいません。なのに、あの人はこのごろ来てくれなくなりました。私はこれからどうすればよいのでしょうか。

A　今のあなたには、自分と「男」のことしか目に入らぬようですが、大和の「女」だって、「男」があなたの所へ来るたび今のあなたと同じ思いをしていたのです。大和の「女」は、自分が愛しているのだからそれでいいと考え、耐えていました。あなたにそれができないのなら忘れなさい。「男」は二人の気持ちに甘えて行ったり来たりです。そんな男への気持ちはたち切るべきです。

全般に男子生徒にはハウツー的などう行動するかを重視した回答が多く、女子生徒は一つの行動に至る内面の動機を重視したものが多かった。

授業において私は、これまであまり触れられていなかった「男」のあり方への批判の視点を熱をこめて語ったので、生徒たちはやや私の視点にひきずられたきらいがあるかもしれない。けれども、私には、これまでの読みが「男」に無批判に過ぎていたという気持ちがあるので、それを修整するにはこれぐらいでいいのではないかという思いがある。生徒たちの意見に私の批判的な視点を前提にしたものが多いのは、彼らなりに私の視点に納得できるものがあったからだと私は解釈している。彼らがこれから先、自ら異性とかかわって行く中で、ここに紹介したような彼らなりの視座をどう深めていってくれるか、楽しみである。

◆　◇　◆

荒野のバラ

田中裕一

今、希望とは

（最終回）

1　追いつめられ、疲れはてた子供たち

(1)ＡＢＣ、因数分解、堀辰雄、細胞分裂やっと昼飯
(2)熾烈なる友情燃やせし友ら皆寡黙と敵意の受験期にいる
(3)うすきもので心おおわれ感動のへりたる気する受験期故(ゆえ)か
(4)選果機でより分けられし蜜柑(みかん)の如(ごと)偏差値により子の階決まる
(5)自殺せし受験生のニュースききつゝ吾子は黙して机に戻る
(6)浪人は午前三時に謂(い)われなき涙流してコオロギに聞き入る

朝日歌壇から借用したが、作品順に熊本、足利、栃木、防府、千葉、兵庫だから、全国的な悩みに満ちた状況がわかる。

「優しい心なくした　素直な心なくした　みんなみんななくなった　人間じゃなくなった　高校時代に得たものは何もないけど　失ったものは数えきれないくらい…」（宇部・高三）

生徒の質が変わったと言われる。工業化―経済発展―都市化と荒れた学校は連動している。「良い子」の挫折や反乱も目立つ。神経系、内分泌系、大脳系の異変まで指摘されている。

教師もまた生徒とすれ違いのまま疲れはて、心身症、挫折、転職の話も聞く。今年は熊本市の教師が二人も自殺した。

少年少女たちをかくも追いつめ、しらけさせ、むかつかせているものは何か。今、子供たちの多くは、自分の存在すべき所を持たない。すさまじい受験戦争と管理主義の中で、自立は抑えられ、生徒会は無力化され、偏差値輪切りの選別と差別によって「自分が自分でないみたい」という。自分の理想や人間性について考える魂までも奪われた子供たちに、挫折か反乱以外の何が残ろうか。大人が変革できない不甲斐なさを、子供たちが体現しているにすぎない。彼らは何よりも被害者なのだ。

登校拒否四八、一七四、公私立中退一二三、〇〇〇なる九十年度文部省統計は、グレーゾーンを考慮すれば氷山の一角だ。

児童虐待も相談所調査だけで年二千件に及ぶ。私が義務教育の場で接した修羅場や精神的ホームレスも少なくない。母親に殺された生徒、祖父母に父親を殺されて孤りになった生徒、父母が別々に家出して残された生徒、借金漬けの両親に

蒸発された生徒、母親が街頭売春している生徒、親が愛人を次つぎ引きこんでくる家、妻妾同居の家、生徒をドラム罐に入れ、下から火をつけて折檻した親、子に盗ませて売りさばく親、受験日数日前に離婚すると騒ぎ出す親、子供の服や教科書や鞄を燃やしてしまう親、受験戦士に駆りたてる親、超・過保護の親、暴力団の親、会食も会話もない親子…荒涼たる風景なのである。何が経済大国なのか。この精神的ホームレスにお構いなく進む偏差値教育、積み残した見切り発車、選別と差別、校則と体罰、「部活」の勝負師と遊び人養成…。こちらもテストと管理あって教育なしのスクールレスでは、日本の教育を受けるほど未来は暗くなる。競争は優勝劣敗の心の傷を負わせたまま陶汰(クショウ)の段階に入っていくのだ。

コペンハーゲンのブナ林で野生のアネモネを前に遊ぶ子供たち(朝日新聞社「世界花の旅」3より)

「私は一人で行きたい　どこか別のよい人たちの住む所へ
どこか知らない所へ　誰も人を殺したりしない所へ」
「あの家に思い出だけが残っている　今花だけが残っている
あの家で　僕らはこの世に生まれて来たのだ　ただ泣くために」

前の詩のアレナ・シンコヴァは奇蹟的に生存、後の詩のハヌス・ハーヘンブルクはアウシュビッツで殺された子供だ。日本の収容所列島で「よい人たちの住む所」を夢み、「泣くために生まれて来た」子供たちの思いに不思議と重なる。子供たちから生きる力を奪った上で「無気力」とさえ呼び捨てる「狼生きろ豚は死ね」のいじめの王国は、人間の住む国ではないのだ。教育を歪んだあらゆる行政強権から解放し自立させることが先決だ。

2　国栄えて山河滅ぶ

日本三景は、今や「寝たきり老人」、「過労死」、「不登校・中退」となった。福祉・労働・教育の各政策の構造的貧困を示している。日本の年労働時間二、〇四二時間は世界最長、生徒通学日二四〇日も、英の一九三日、米の一八〇日から見ても異常、これに通塾時間、学級定員の多さなどすべて異常ずくめである。

戦後戦争責任も不問のまま、朝鮮戦争をてこに資本を強蓄積、産業構造を再編し、バブル経済国家を築いた日本で、一

貫した汚職天国を許した国民は他に例を見まい。若者たちから見れば、反面教師に満ちた大人のダブルスタンダードなど信じられるはずがない。政財官学軍労の複合体の退廃の中、日本経済がバブル成長する時、社会主義国の失敗と解体で批判者を失ったことが、資本主義の矛盾と荒廃をより深刻化させるだろう。経済企画庁は'92からの経済五か年計画を発表した。

「①豊かさとゆとりを実感できる生活大国　②21世紀を展望した経済社会の基盤整備　③地球的規模で世界の繁栄と平和に貢献」をめざしている。例によって現実を知らぬ官僚好みの手垢にまみれた机上作文だが、子供たちの苦悩や反乱を生む政策の責任は視野にない。未来社会を担う子供たちへの愛も理解もないし、思想性が全くない。新しい世界の発見が驚きと感動をもたらすような知恵や力を学力として育てない未来は暗いのだ。

3　コマは激しく回転する時のみ立つ

職員の体が口ほど動かず、管理に向かってのみ一斉に動く学校は荒れる。変革に動かぬ人ほど愚痴や蔭口が出る。動かぬ水は腐るしかない。悲愴感や敗北感が漂う学校の創造力は弱いのが常だ。初期治療に手を抜くと化膿を始める。コマと同じで回転すれば立つのに、燃えないから倒れる。私たちの学校で一時限目にガラスが割れたら二時限目には入れた。便所が汚れたら即刻清掃、放課後なら生徒と一緒にした。壁の汚損にはすぐ石こうを詰め、白の水性塗料に落とし物の絵具で色を合わせ、ローラーで新品同様にした。生徒もやってみたくなり、参加者が増えた。ガラス割りも、便所汚しもすべて消えた。

下級生は育てたランのコサージを作り卒業生の胸を飾る。他校生が羨み、自らの誇る学校ができてくる。私が着任した時は丸刈りだったが、人権学習と生徒会討議で丸刈りを撤廃し、自由化した。教師は生徒の決定を側面からフォローした。

私のクラスの生徒は校庭のコーナーのアスファルトをツルハシやクワで砕き、土を復元して60㎡も緑地を広げた。市教委が一千万円で校舎塗装するのを待ってもらい、私たち環境部と美術科と生徒の討議で周囲の環境や色彩心理や保健やデザインの上から検討、明度彩度の注文をつけ、三色の見本パネルを選び、最後に職員・生徒の投票で決定した。淡い白緑色にチョコレート色のアクセントというシャレた校舎の出現に皆喜び、愛着と誇りを感じた。「住む者が決める」―住民自治の原則がここにある。「地方自治が民主主義の学校」というトクヴィルの思想は私たちの足許で実現させることが可能なのだ。塀をのりこえた生徒たちに、私は標語とパネルの制作を課した。「右を見て左を見て、そこで止めよう」「誰も見てない　そう思ったら赤信号」「ストップ　善と悪との分かれ

道」のパネルの効果は絶大で誰も違反しなくなった。後はパネルを外して一件落着。一切が笑いの中で進行し、体罰の入る余地などどこにもない。人間同士のつきあいなのだから。「話せばわかる」のに、「問答無用」の体罰など五・一五のファシストなみだ。当該生徒は私の組ではなかった。だがもしも教師が「俺の組でなくてよかった」と思う時こそ、「担任でもないのにいらぬ世話」と突っぱねる生徒も出よう。生徒の在り様は教師の姿を映す鏡でもある。

4　今、希望とは

イラクのジャニダール洞窟の第4号ネアンデルタール人骨は、六万年前の五月末のある晴れた日の朝葬られた。人骨周辺に献花された八種の野草の花粉分析で、当時の死を悼む人の心が発見され、人々をいたく感動させた。

琵琶湖底の粟津遺跡の発掘も縄文中期の食生活を解明した。春は貝、夏は魚、秋は果実、冬は獣肉と、食物の旬と繁殖期、栄養の配分やアク抜き解毒も心得た見事なものだ。夏にウバガイを生食してコレラになるのが現代グルメなら、それは、改めて生活原則の基本を問い直さざるを得ない。「彼岸花が咲いたら麹をねかせろ」と昔は言った。その指標に全条件がインプットされた経験則はファジー理論を越えるのだ。現代生活の便利さの基本が、人間や子供たちの為でなく、資本の論理から出発するから人間疎外や風化する都市が出現する。人間の町でないのだ。

ベルンやパリには、人間の思想や温もりがあった。デンマークの森に嬉々と遊ぶ子供たちがいる。日本の子供のように、無思想な収容所で食い物にされてはいない。幼時の美しく豊かな環境は人生の価値基準を定める。この子たちの中から第二のアンデルセンが出ないと誰が言えよう。私たちは日本の絶望的荒野にいる。だが私たちはきょうの苗木を植えよう。ワッツが描いたように、たとえ盲いても一筋の弦からでも「希望」を聴きとることができる。荒野にこそ清楚な野ばらが香っているのだから。

ジョージ・フレデリック・ワッツ「希望」(1886)

家族と家庭科

●酒井はるみ

「家族・家庭」の四十五年をふり返って

この三年間で家庭科教科書の「家族・家庭」の四十五年の歩みを辿った。それは大略左頁の年表のようにまとめられるが、そこにはいくつかのエポックとなる時期がある。

まず、家族の団欒や和を強調し、働くことを重んじるのが「新しい家族」の出発であった。民法改正後は、愛情を核とした夫婦の平等と、性別役割分業を特徴とする「近代家族」が登場する。

ところが、中学に職業・家庭科が新設されると、職業の占める位置が大きくなり、家族の民主化の他に、家庭の機能として休息が重視された。

高度経済成長を支える科学技術教育振興のなかで、「家族」の領域はすべての学校段階から姿を消した。代わって「家庭」(小・中)、「家庭生活と家庭経営」と「保育」(高)が登場、家庭の機能を子の養育、休息、慰安、経済的保障、老人の保護ととらえた。家族の民主化を教える時代は終わり、家庭の生活維持機能が強調される時代に入った。「家族」から「家庭」へと用語を変化させることによって、生活体としての「家庭」に個人を埋没させたのである。人間を中心にして近代化しつつあった家族は、家庭を強調することで産業界に従属することになったともいえる。かくして、家族の民主化は不十分なままに放り出された。

しかし、女子差別撤廃条約批准で転機を迎える。夫婦の平等、家事労働における性別分業の排除、就労の一般化、家族の多様化の容認など、近代家族はゆさぶられた。

家族に対する関心も評価も時代によって変わってきた。が、それは家族をつくっている私たちの関心や評価を反映したものであったのだろうか。狭くは学習指導要領、広くは政治・経済界からの要請によるものだったのではないか。特に女子差別撤廃条約以降、個人の自立が強調されるが、それを支える個人の尊重という視点は四十年余の全期間にわたって弱かったことをみてきた。

条約以降の教科書の記述をみる時、個人の自立を強調するのは、文部省というより、家庭科の教師であり、市民であり、教科書執筆者たちであることを思う。私たちにとっての家族や家庭をさぐる道は今こそ開かれているのである。

年	できごとと特徴
一九四六	GHQ／CIEによる検閲（一月～一九五〇年七月まで）文部省著作『高等科家事』淳風美俗と敬老、直系家族
一九四七	学習指導要領家庭科編（試案）家庭内の仕事と家族関係が二本柱。家族の団欒、家族の和を強調、母を助ける家事手伝い
一九四九	文部省・中学校『家庭』（一～三学年）みんなが働き、主婦を台所から解放、活動的な女性と権力や権威をもたない父、楽しい家庭、家族の和 文部省著作中学校教科書『家庭』（修正増補版）の保守化。ぼくという主語は私に、父は仕事、母は家事、手伝うのは私、活動的な母は後退、楽しい家庭。 学習指導要領家庭科編高等学校用、新憲法下民主主義の家族制度・家族関係を明記
一九五六	中川・氏家・稲葉著『家族』本文¼は家族法の解説、「私を知る」として、個人の尊重。家族理念は近代家族、夫婦家族制（夫婦中心の一代限りの家族、双系的親族関係、均分相続）、核家族 中学指導要領職業・家庭科（試案）教科書で民主主義の家族を描く、家族会議の話題が職業選択。生活合理化で母親の就労を促す、家庭の機能に休息を強調 中学指導要領職業・家庭科編「家族」分野は「保育・家族と家庭看護」に、性別役割分業の一層の明確化、核家族が多い 高校指導要領家庭科編、女子必修「家庭一般」四単位新設「家族」は「保育・家族」に、個性・個人の尊重、家庭生活では協調を重視
一九五八	小学校指導要領、技能重視、「家族関係」は「家庭」に、三世代家族が多い 中学指導要領「家族」が「家庭」に大転換
一九六〇	高校指導要領、家族領域が消え「家庭生活と家庭経営」と「保育」に、技術重視、家族の近代化はすすむ
一九七〇	高校指導要領、核家族化の深化、主婦の家庭外就労の増加、家庭の機能は休養、養育、経済的機能、なかでも幼老病の家庭内扶養を強調、家一女子必修
一九七七	小学校指導要領「家庭」が「住居と家族」に。八九年版で生活する力をつける家事労働、自立の人間像出現、家族の危機、家族の結びつき強化
一九七八	高校指導要領、女子四単位必修
一九八五	女子差別撤廃条約批准
一九八九	小中高学習指導要領家庭科編　小中高を通して男女同一履修、女子のみ教科ではなくなる
一九九一	高校教科書で家事分担は個人が自立して生きるために必要、男女向き教科書で近代家族の像が揺らぐ

男性学への契機

――魔男の宅急便

■諸橋泰樹

復讐されるは我にあり

先日ある集会に出たのだが、「行動を起こす女たちの会」の人が女性差別に言及した際に、まだ10代後半か20代前半とおぼしき若い男性が、何で女性差別女性差別と言うのか、そんなことを言うのなら男性差別だってあるがそれはどうなるのだ、男は差別を感じることがあっても我慢しているのだ、我慢をすることが民主主義ではないか、との発言をした。

やれやれ、女性学を学ぶべきは、男子高校生や男子大学生たちであるようだ。

彼の発言は、女性からの抗議への切り返しによく使われる台詞なのだが、まず第一に、「男性差別があるからといって、女性差別をしていいという根拠にはならない」ということを、おさえるべきであろう。

第二に、より積極的な格差是正政策の立場からいえば、多少の男性差別はいいが、女性差別は許せない、という言い方も成立しなくはない。そして、第三に、民主主義とは、あくまでも少数意見が尊重されることが前提であって、多数決の名において少数者に我慢を強いることではないのである。

日本リサーチセンターによると、「ワーキングマザー」の生活行動は、Work（仕事）、Income（収入）、Time（省時間消費）、Child（子育て）、Husband（夫婦）の五つから成立、これを称して「魔女（WITCH）的生活時間」であるという。だが、新しい「魔女」にふさわしいものをぼくが挙げるとすれば、Work, Income はいいとして、Thinking（思索）、Charm（魔力）、それに Heart（心）ないし Hope（希望）によるWITCHとなる。箒による家事から女性が自らを解き放つには、こちらの魔女的発想が必要と思う。

しかし、女性が「新WITCH」を発揮するのに並行して、男性にも魔男的発想が必要だというのが、この二年間のぼくの連載の基調であった。

男も女も、WITCH＝魔女（男）的能力が必要であり、「社会にやさしい」仕事をして収入を得、思索することで、その魔力を行使したい。「男もすなる家事」はその前提にすぎないのだが、この世界に、スプーンも箒も持った男たちがさらに増えることを願っている。

実は、「魔男」という、魔女の男性版が実在することを、連載開始後に教えられた。毎日新聞日曜版の「華麗なコレク

ターの世界」に、村田直文氏所蔵の魔女人形が紹介されており、その中に、「魔女」ならぬ「魔男」の人形があったのだ。箒ではなくスプーンにまたがり、エプロンを着けた中年の「魔男」人形に、ぼくは大いにうれしくなってしまった。

連載をしていたこの二年間は、ぼくにとって、新しい生き方の模索の時期であり、この連載の場は、その生き方の中核をなす大切な表現の場でもあった。ぼくの目論見としては、身辺エッセイを通じて、折にふれて、「男社会」への疑義をただすというつもりだったが、十分に準備をして展開することができず、「学」にも、私的エッセイにも徹しきれない中途半端な文章となってしまった。また、「宅急便」を標榜するにしても、新鮮さを欠いていた。

当初の依頼は、「男性学事始め」というテーマで、とのことだったが、ぼくにとっては時期尚早との思いもあり、自分の日常の視点から、来たる「男性学」へのきっかけぐらいは展開できるのでは、ということで選んだのが、この「男性学への契機」というタイトルであった。

Weとのかかわりによって知りえた貴重な人たちの一人である重川治樹さんが、この〝控え目〟なタイトルについて、「苦渋に満ちた」タイトルで良い、と評論してくれたのがうれしかった。

連載第一回目でふれたように、女性学そのものの裾野が広いアメリカでは、「男性学」が存在し、各種グループや研究会のほか、大学に100以上の男性学講座があるという。また、かつてダブリンで開催された国際学際女性学会では、「フェミニストの挑戦に対する男性の反応」という分科会がもたれ、反家父長制の立場からの「男性と男性性の理論化」、男性と軍隊をテーマとした「男性と暴力」、また、「男性神話と母とのきずな」など、興味深い報告が相次いだ。日本では、『脱男性の時代』や『男性学の挑戦』などで知られる渡辺恒夫さんが、かなり性心理学的な立場から、抑圧的にはたらく「強い男」や「男らしさ」という軛からの解放をめざす「男性学」を提唱しておられる。これらの知見をも含み込んだ形での、既存学問および研究主体のありように対する自省と、新しいジェンダー論ないしフェミニズムの視点の導入による諸学問――政治学や社会学や哲学、文学、教育学、心理学等――の活性化が必要とされるであろう。ぼくにとって男性学の役目とは、究極的には、男性の（対女性・対社会への）暴力と権力をとらえ、問い直すことである。

性表現、性の商品化と経済、性役割イデオロギーの強迫性・内面化、小浜逸郎さんなど男性論陣に対する批判的検証等、触れ残した点は多々あるが、男社会の中で異端審問にかけられる光栄に、これからも浴したいと願っている。

楕円の夢

沙羅樹の暗がりで
象が碁を打つ

武田秀夫

職員旅行に行く。宿に着いて一風呂浴びる。と、「どうです、食事前にひとつ」と碁盤をかかえてくる。こういう人が必ずどの職場にもいたものだ。教師をしていたころ、そうした初老の教師の横に座り込んで観戦するのが好きだった。

最初の石を置く前にすでにちょっと考え込むようにして、それからおもむろにパチリと置く。

「ほう、なるほど。では、私はこのへんに置かせてもらいますかな」

相手も先の石にからむことなく、ずっと離れたところにパチリと置く。

将棋は子どものころからよく指したが、碁はかじった程度の私である。広い盤上のあちらこちらにゆっくり置かれていく石がどういうつながりを持つのか、さっぱりわからない。で、横から愚問を発する。

「ちゃんと計算して置いてるんですか。それとも適当に、勘で置いてるんですか」

「まあ定石みたいなものがあることはあるんですがねえ——なかなか。——と、この辺かな」

浴衣の袖をちょっと押えるようにして、またパチリと置く。

「そんなもんですかねえ」

「そんなもんですよ、ぼくらみたいなヘボ碁はね。序盤はうつらうつらと打つ」

「へえ。あんまり厳密には考えない？」

「ええ。プロは別でしょうけど。ぱらぱらと置いた石がそのうちに生きてつながってくるだろうと思いながらぼんやり打つ。そんなもんですよ」

「そんなもんですかねえ。なるほど」

職員会議などではずいぶんやり合ったことのある先輩教師が、パチリパチリとくつろいで碁を打っている。勝敗は問題ではなく、そうして流れていく時間だけが互いに大事にされている。なるほどこれは、王者の遊びだ。いつか自分もそんな風に碁を打ってみたいものだ。そう思っていた。「オツベルと象」の象たちだって、「助けてくれ」という白象の手紙をみたときにはグララガア、グララガアと行動を開始したが、それまでは、「沙羅樹の下のくらがりで、碁などをやっていた」のだからなあ。

象には囲碁がよく似合う。が、将棋となるとそうはいかない。いきなり角道を開け、飛車を振る。相手の玉をとろうと、全ての駒が殺気立って、突破すべき一点に集中する。そうして対峙した両軍の間にいったん戦端が開かれれば、もはや行くところまで行って敵の玉の首を刎ねねばやまない。いかにも激しい。漱石の坊ちゃんは、ずるい兄貴が卑怯な待ち駒をして、人が困ると嬉しそうに冷やか

したのに腹を立て、相手の眉間に飛車を擲(たた)きつけてこれを割る。そのときこれが丸い碁石ではさまにならない。どうしたって圭角のある将棋の駒、なかんずく飛車でなければいけない。短気で単純な人間には将棋が似合いだ。

実際短気で癇性の私は、教師をしていたころ、昼休みというと青筋を立てて同僚と将棋を指した。かつ丼とたぬきそばをセットで注文し、それをかき込みながら横目で将棋盤を睨み、取ったり取られたり。四、五十分しかない昼休みだ。脳ミソは煮立ち、血の気は上がり、悪い油を使ったカツ丼、たぬきそばなどどこにどう収まったのかわからない。何度も気持ちがわるくなった。

組合のオルグとして近くの職場を回り、その一方でシンナーを吸っている生徒をとっつかまえては説教しと、荒々しく活気に満ちていたそのころの職場の昼休みである。囲碁などという王者の遊びはどうにも似つかわしくなかった。盤側をピシャッピシャッと手にした駒で叩きつつ、「エイッ、これでどうだ」と音高く敵陣に打ち込む、そんな喧嘩腰の将棋が、当時の気分にはよく似合ったのである。

負けるとくやしくて、猛烈に忙しいくせに深夜将棋の本を片手にひとり駒を並べ、振飛車やら櫓囲いやらを研究して時を忘れた。思い出すとほほえましい。今は一人将棋もやらないし、友人と火の出るように将棋を指すこともなくなった。麻雀？　ああ、みんなでわいわい騒ぎながら徹夜したあの遊びからも離れて久しいなあ。そして、いつかは二人でゆっくりと石を並べたいものだと思っていた王者の遊び、囲碁からも隔てられたまま。少々寂しくないこともない。

「新しい家庭科We」が十年を機に幕を閉じるという。その十年のうち六年も連載を担当させていただいた私としてはひとしお感慨深いものがある。「霞通信」三年、「読書つれづれ草」二年、そして今書いている「楕円の夢」。「楕円の夢」を連載するにあたって、私は、今までとはちがった書き方をしようと思い定めた。麻雀で言えば、安全牌ばかり打つのはやめようと思ったのだ。文体も乱暴なものに変え、自分ではよくわかっていないことを手探りで書いて行こう、そのためには文章なんか破れてもいい、そんなふうに居直ろうとした。

で、ヘボな碁打ちがあちらにパチリこちらにパチリとおよその見当で石を置くように、私はもったいぶって、「静謐ということについて」「暴力的ということについて」と意味不鮮明な石を置いていった。読む人は困惑したにちがいない。「楕円の夢」というテーマらしきものに、それらの文章はどう収斂していくのかと。が、私は、そうして置かれた石の数々がいつかそのうちにつながりを持ち始め、私という人間の今は定かでない生の地模様と、私の無意識の夢を、ぼんやりとでも浮かび上がらせてくれればメッケモノ、そんなふうに思ったのである。貧者なりに、結果や成敗を問わない王者の遊びを、かねての念願どおり真似てみようとしたのである。

私は、「ひとりでいること」と「ふたりでいること」と「みんなでいること」とを総合した楕円のイメージを自分なりにつかみたいと思った。「暴力」「虚無」といった人間の〈負の情熱〉をもふくみ、「永生」「性の無名性」「アナーキイ」といったユートピア的観念にも開かれた楕円体。内部を、コトバを廃棄した〈静謐〉によって満たされた楕円体。それをうまく胸に思い描けたらなあと思っていたのだが。つながりを持たぬ石がいくつか、秋の終わりの風に吹かれている。少々寂しくないこともない。

あかさたな

え・加藤由美子　　ぶん・福田　緑

―子どもと向き合って―

連載を終えるにあたって、私は書くということの難しさを痛感しています。心の中で光り輝いていた宝石を取り出して、いざ文章にしてみると急に光が失せてしまったり……。今まで、自分が思ったことを思ったとおりに、自分の好きな時に好きな長さで書くことはたくさんしてきました。その中では私の気持が充分書き表わせたのですが、仕事として十回分、決まった長さである程度の内容を保ちながら書くということは至難の技でした。改めて、毎回素敵な文章を書かれている方々に敬服！

今回は、最終回ですので、「ことばの教室」での私の思いを少し書いてみたいと思います。まず、今の仕事はとっても楽(ラク)で楽しいということ。一対一で向き合えるという好条件によるのだと思いますが、集団の中では自分の思いが表現できずに荒れてしまったり、傷ついてしまったりする子が、私の前ではとてもよい顔を見せてくれます。目の前の大人が自分だけを見守り、一緒に勉強したり、一生懸命遊んでくれるという体験は、多分彼等にとって滅多にないことなのでしょう。

発音の誤りについては、それなりにその子に応じた指導ができますが、心の傷を癒すことは一筋縄ではいきません。一対一だととてもやる気があり、一生懸命で素直なのに、学級に戻ると、とたんに黙り込んでしまったり、教室から逃げ出して校内をうろついたり。

この十月に受け持った幸君もその一人。先生に注意されても言うことを聞くどころか、ぶってかかったり、ふてくされたり。毎日幸君とつきあう先生の大変さは想像に余りあります。でも、幸君は本当はみんなと一緒に勉強したいし、先生にたくさんほめられる良い子になりたいのです。幸君と一対一で向き合ってみればそのことが見えるのです。教室や家庭での指しゃぶりやパニック、乱暴やわがままなどは、行為だけを見ていると、何とかならないだろうかと辛くなって、注意したり

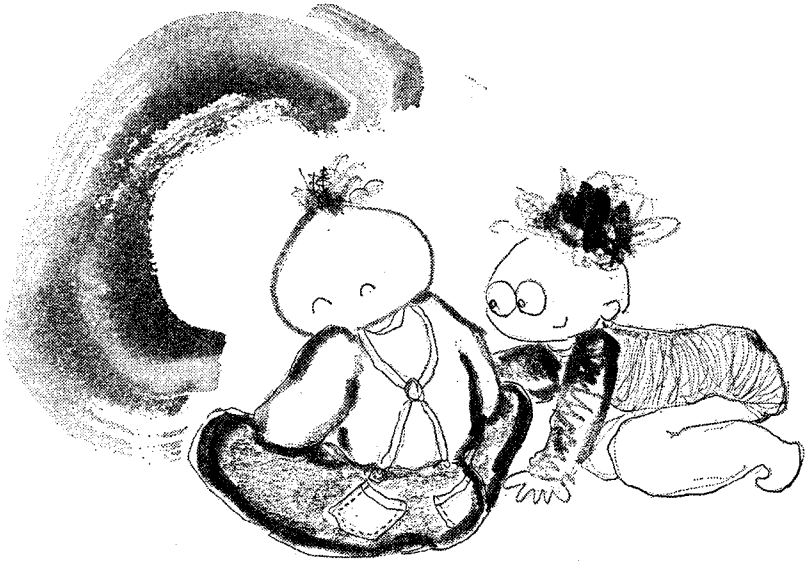
しがちです。でも、その行為の裏に何があるのか、それは子どもが発するSOSのサインなのだということが、子どもと一対一で向きあう中で、実感として見えてきたのです。

そのことを、親や担任に気づいてもらうこと、そして私自身が子どもとゆったり楽しく一緒に過ごすこと。この二つが私の仕事なんだと思うようになりました。

はじめのころは「〇〇してあげなくちゃ」と力んでばかりいたのが、やっと楽に、肩の力を抜いて心の底から笑顔で子どもと向き合えるようになってきたこの頃です。

子どもたちが与えてくれた楽しいひとときをここに〝書く〟ことで、より確かなものが私の中に残ったような気がします。

連載を読んでくださった方々、毎回助言してくださった河村さん、ステキな絵を描いてくださった由美子さん、本当にありがとうございました。



現代衣生活考

むらき　数子

下着とマスコミ（下着その三）

「三月は年間最もショーツの売れる月になったという。最大手のワコールは、ショーツだけでこの時期、全国で四十万枚を売るという。」（『朝日新聞』'90・3・2）

二十年前には、バレンタインデーは「好きな男性への想いを年に一度女性からうちあけられる日」として、チョコを贈ったり、女子高校生が男性教師に手編みのマフラーを贈ったりしたものだ。最近では、姉から弟へ、女子高校生から男性教師へ、トランクスを贈る例も聞く。「あけたときどんな顔するかな？」といたずらを楽しんでいる彼女たちは、相手の着脱の動作や肉体そのものまで想像することがあるだろうか？

バレンタインデーの義理チョコ、友人から小学校の職員室で配ったと聞いたのは、十年前。'89年高島屋の調査によれば、OL一二二一人の五五％がバレンタインデーに上司に贈り物をする。義理チョコは職場という世界での女性の処世術・必要経費になりつつある。

〝バレンタインデーにもらったチョコへのお返しにホワイトデーには女性ショーツを〟――よくもえげつないことを思いついたものだ。この発案者は下着産業の功労表彰もの。が、大学生Y君「いやー、ジョーダンですよ。ハンカチじゃ真面目なだけで、そこいくと下着ってちょっと毒があって。買うのだって、いろんなパッケージがあるし」

売り場を工夫し、菓子や文庫本・ファンシーグッズと見紛うパッケージを凝らしたり、と、どうごまかそうと、下着は下着。朝日の男性記者が書いているように、「パンティーを贈る行為自体が、『ウッヒッヒ』とか『デッヘッヘ』とか、の笑い声で表されるようなものを、たとえ無意識にせよ、含んでいるのだから、逃れようがない」。ふだん女性にプレゼントなどしない、自分の下着の洗濯もしないし自分で購入するのも一割未満という男性が、こと女性の下着だけは買ったり贈ったりするのは、やはり特殊・異様な行為だ。

成人男性は、「ジョーダン」だからセクハラなんて考え過ぎだ、と言うが、小学生の息子に「チョコを貰ったら、パンティをお返しするものなの？」と尋ねられたらなんと答える

のだろう？　娘が贈られたら？

ショーツは、女性にとって、どんなにナルシシズムを満足させるデザインであっても実用品。だが、男が意識し、話題にするのは、常にセックス・アピールのためのもの、眺めたり脱がせたりするものとしてである。男があなたの肉体や着脱の動作を想像しながらショーツを選んできたと知っても、「花のプレゼントにおしゃれな下着がそえてあったら、これほどハッピーなことはありませんね」というワコール宣伝部編『下着おもしろ雑学事典』に同感しますか？

服飾史風俗史で下着というと、必ず紹介される『白木屋火事』。'32年東京白木屋火災のさい、和服の女性従業員が死んだのは、裾を押さえようと手を脱出用ロープから離したためで、以後ズロースの着用が広まった、この火事以前の日本女性の下半身の下着は、腰巻きだけで股付きの下着（ズロース・猿股・下ばき・パンツ・ショーツ）はなく、腰巻きの内側には何も着用していなかった、というのである。上野千鶴子『スカートの下の劇場』もこの説。

いまだに、おしゃれな女は和服にはパンツ型の下着は着ないものだ、という説が根強い。が、すでに'60年頃の各地の農村女性では、和服の下着に「ズロース・ズボン下＋ネル腰巻き」という組合せが高率であると、日浅治枝子によって報告されている。私が六〇歳以上の女性二九九人に行った'89年のアンケートでも、七〇％以上が、「現在、和服の時の下着は、パンツ類をはく」と答えている。九九％の人にとって、和服は普段着ではなく、一年中和服を着ているのは三人だけだ。その三人もパンツをはいている。着付け教室や美容院で、ショーツを脱ぐように助言する例は聞いたことがない。

各種の着衣・所蔵調査でも、腰巻きより内側についての報告は目にしていない。体や下着のことを口にするものではないという感覚がつい最近まで根強かったことからすれば、もし調査しても信頼に足る答は得られなかっただろうし、調査者の側も衣服として意識していなかったのではなかろうか。

腰巻きと呼ばれるものには、生理帯・短い肌着・足首までの「裾よけ・蹴だし・都腰巻き」などの中着・膝下までの巻きスカートなどがあり、何枚か組み合わせて着用されていた。そして、和服とズロースは早くから併用されていた。

一九一〇年代、和服を制服とする女学校や女子師範学校で、体操服に洋服をとりいれ、ブルーマー・ズロースを採用し始めた。卒業生が小学校女児に、体操用に「下ばき・猿股」を奨励し、裁縫で指導するようになる。Tさん（'07年生まれ）は東京市麻布東町第一尋常小学校の裁縫の時間（'18年）にズロースを習った、以来和服の時も腰巻きの下に「ずっとパンツはいてます、なかったらスースーするもの」。生理時は「脱脂綿＋ゴムバンド＋ズロース＋ブルマー」を用いた。Tさん

は腰巻きの下に常に何か着用してきたわけだ。

松田歌子らの報告によれば、'19年横浜の元街小学校では体操姿を「白襦袢＋袴」からスカート型洋服の「運動服＋猿股」に変えた。'21年前橋市の小学校高等科でズロースを奨励し、生徒自身が縫うよう指導している。それまでこの学校の女児は「さらしの襦袢に腰巻」や「襦袢＋袴」、「着物の裾をめくり腰巻姿」で体操していたのである。

一九二〇年代、成人女性の洋装がふえはじめた。とは言っても、白木屋火事の当時、銀座を歩く女性でも洋装は数％でしかなかったし、彼女たちが実際にどんな下着をつけていたかという真面目な調査は行われていない。本当に白木屋火事がズロースを普及させたのかどうか、すでに確めることは難しい。

推測の手がかりとして、私が'89年に行ったアンケートを紹介する。「小学校入学まで、どんな服装でしたか？　下着は〔腰巻き・ズロース・つけていなかった・その他〕」という質問に対する六〇歳以上の女性二九九人の答えである。小学校入学前という幼時についての質問なので、「下着なし」という答えが、東京で関東大震災頃まで、地方では'30年代半ばまで現れている。育った地域の市部・郡部という分類は、町村合併によってあまり意味がなくなっているので、家庭の職業によって分類してみた。

八〇代（'09年以前生まれ）は、白木屋火事の時には二〇代であるが、そのうち非農家出身では二六％がズロースを着用して育っていた。七〇代後半以上（'14年以前の生まれ）では、六〇％以上が腰巻きと答えていた。

七〇代前半（'15―'19年生まれ）では、ズロース着用が六五％。うち非農家出身では七八％。この人々は白木屋火事の時には十三才以上。女学生だったHさん（'15年生まれ）は、火事の目撃談を聞かせてくれたが、被災者の下着の有無など話には出なかった。

六〇代後半（'20―'24年生まれ）になると、農家出身者の過半数もズロースと答える。

六〇代前半になると、九四％がズロースを着用していた。「白木屋の火事以後、和服でも下着を洋風に、ときいて居りました」と書いたOさん（'25年生まれ）自身は、火事以前から和服の下にズロースを着用して育った。

白木屋火事の俗説は「当時普及しはじめていたズロース着用と白木屋火災を結び付けたマスコミのセンセーショナリズムであり……」とする鷹橋信夫『大衆文化辞典』の見方が妥当だと思う。火事以前から腰巻きとズロースを併用していた女性はいたし、生理的構造・労働を直視すれば、性的成熟後の女性が腰巻きの内側に何も着用していなかったとは考えにくいからである。上野千鶴子は祖母が腰巻きだけだったと書くが、きっと孫にも見せないようにしていたのだろう。

オホーツクの潮風荒く…

■江口凡太郎

それはちがう！

私は、家政科一年生のあるクラスで副担任をしています。先日、ベテランの担任が学校を空けたときのことです。D子とE子が、郵便局の支払のために「中抜け」したいと申し出てきました。その時間は、いわゆる「厳しい先生」の時間で、「さぼりたい」という本音がちらついていました。迷いましたが、「休むほどのことか」等の話はしたものの、結局、行かせました。

午後になって、「厳しい先生」に私が呼ばれ、「なぜ、許可したのか？」「昼休みに行かせることはできなかったのか？」というアドバイスをうけました。「昼休み」に気づかなかったのは大失敗でしたが、その先生の言うことをすべて聞き入れることもできませんでした……。

これまでも、担任不在の時は、何かと理由をつけて早退する生徒が多く、このことについて担任と相談していました。担任は、「休むことで損をするのは生徒自身で、決められた日数まで休むことは生徒の権利である」という考え方です。「昼休み」に気づかなかったのはミスとしても、私もこの考え方に立って判断したつもりでいました。

ところが、「厳しい先生」には「それはちがう！　出席するのが当然のことで、規定の日数までなら休んでもいいというのではない」「こういう判断が生徒にはできないから、教える必要がある」と言われました。そして、「ちがう」のもう一つの意味として、同じ判断でも、ベテランの担任と私がするのとではちがう、という意味もあるようでした。こう言われると、自分の考えにやや自信が薄れてきます。

ベテランの担任は、力で押さえつけることなく生徒を指導できることで、校内でも一目おかれている先生です。私も、自分の目指している方向にいる大先輩のひとりだと思っています。幸運にも副担任になれたことで、この先生と話をする機会に恵まれ、多くのアドバイスを受けます。そういうときは、「よし、がんばるぞ！」という気持ちになります。

ところが、酒の席などで、この先生のまねをして失敗した人が何人もいたという話を耳にします。そうすると、また不安になり、迷ってしまいます。

毎日がこのような迷い、戸惑いの連続です。でも、これを繰り返しながら、「自分流」をみいだし、つくりあげていくしかないと思っています。

Weの終わりに

波

半田たつ子

創刊号からの「We」の頁を繰っていると、その折々の思いを込めたチラシが、はらりと落ちる。'88年8・9月号にはさんだ緑のチラシはことに印象深いものだ。「We」が三千部を割った危機感から、全読者に訴えたもの。裏面に、羽生槙子さんの詩集『木、鳥、娘たちとわたし』について、私が全国婦人新聞に書いた文を載せている。

羽生さんは、横浜で小さな畠を作っていた。それは、現代都市・現代文明に、向かって立つことだった。野菜を作る人と食べる人を分かつのは怖い。都市の住人も通勤の往復の道でなすが育ち、さつまいもの葉が茂るのを見るほうがいい。小さな畠を作ることと都市・文明が対立しない、そんな未来都市を、羽生さんは思い浮べていた。

しかし、'91年春、地主の都合で羽生さんは畠を作ることができなくなった。そして'91年の秋の終わり、私たちはウイ書房から「We」を出すことはできないと、判断を下した。

大資本が送り出す出版物の洪水の中に、「We」のような雑誌が存在する、そのことの意義を確信してきた。だからこそ、私が離れた後も、「We」を何とかして出し続けたいと、スタッフはギリギリまで知恵を絞った。けれどそれは無理だと、諦めざるを得なかった。

熱心な読者の方たちからは「何とかならないか、残念だ」との声が津波のように押し寄せた。しかし、「出したい人」が「出せない」と判断を下した時、「出してほしい人」が「出せ」と迫ることはできない。「家庭科にとって、こんなに大事な時なのに」という声もたくさん聞いた。でも、次の数字を見ていただきたい。学校の先生で「We」の直接購読者の数だ（この他に、書店から買っている方、職業を書かなかった方がプラスされるが、その数はつかめない）。

山梨・滋賀・鳥取・香川―0、栃木・愛媛・佐賀―各1、青森・富山・和歌山―各2、島根―3……これが現実である。

「『We』の十年をどう総括するのか。それをキッチリやってほしい。そうしなければ、ウイ書房の一人一人が新しい一歩を踏み出すことは難しいだろう」との助言もあった。今はその日、その日処理しなければならないことに追われ、総括を完璧に行う時間がないけれど、津田正夫氏の指摘（本号82頁）は、的を射て見事である。

「We」十年をふり返って、一番うれしいことは、「We」が培ってきた人間関係の豊かな広がりと深まりだ。Weの催しをまとめながら、その多彩だったことに改めて驚く（78頁）。ここに集った方たちが、ごく自然にありのままの自分を出しながら「もっと深くつきあいたい」と願い、フレンドシップを育てたことに勝る財産はない。

羽生さんは、宅地造成のために始末される木への思いをこう書いている。

「まず枝をはらって木を丸ぼうずにする／幹だけ残ったのっぺらぼうを／地より少し

上で半分ほどまで切り／あとはショベルカーでパワーショベルをたたきつけて／木を裂く…わたしはその木を何年も朝夕見つづけてきた／その木を見ることで　わたしの日々は新しかった…その木がそんな目にあうのを見るのはたまらない
野良犬なら走って逃げることができる…足を出して！　木
走って！　木
都市中の木という木が／人を捨てて走り出すのを夢みて／わたしの心象風景はすでにひき裂かれている」

「We」という若木が、命を失うのを見るのはたまらないと、今読者がつくる「Weの会」から、新しい刊行物を出す方策が練られている。

私の決意が動かないとわかった時、スタッフはそれを了承し、バトンを引き継ごうと奪闘してくれた。「残念だが出せない」と結論を下した時「Weの会」総会に、関西から素案持参でかけつけてくれた人がいた。私は、これこそを「We」十年の最大の成果としたい。しかも「We」のスピリットを引き継ぐ「名前通りの『私たちの雑誌』。読者の一人一人すべてが書き手であり、読み手であり、そして売り手であることを、読みたい雑誌、書きたい雑誌、売りたい雑誌を作ることを」確認しあった人たちによる、全く新しいスタイルの刊行物だという。

この稿を書いている時点では、まだまだ詰めなければならないことが多すぎるのだけれど、二・三月号を送り出す日までに、全読者への呼びかけができるようにとがんばっている。でも、最低一〇〇〇人の方たちの志が集まらなければ踏み切れない。「新しい家庭科—We」は、'82年二月十八日現在、二一〇三人の申し込みがあって出発したのだから、一〇〇〇人とは、ささやかな目標だ。どうぞ、あなたは、その中の一人になってほしい。

十二月十四日、「We」十周年を記念するつどいの実行委員会を開いた。二次会で「今度の刊行物を『Our』と名付けては？」の提案があった。

私が「We」という誌名を思いついたのは、その六十九年前創刊された『青鞜』の巻頭を飾る与謝野晶子の「そぞろごと」に感動していたからだ。

一人称にてのみもの書かばや
われは女ぞ
一人称のみにてもの書かばや
われは
われは
今や、時代はIからWeへ。「一人称でものを言い、書くI」が集う「We」。「私たちが願い」「私たちが創る」誌名は「We」でなければならない…そう決めて、心昂ぶったのだった。そして今、「We」の時代は終わった。さあ、これからは「私たちの」時代…提案した人の思いには共感するものがあった。

「We」？「Our」？　それはこれから決めることだけれど、十二月十四日のエピソードは書き留めておきたい（刻々と情勢が動く中、月刊誌の難しさを痛感する三カ月だった）。

「We」が始まる時、'81年十一月十四日の集まりで、私はハーバード・リードの「この世の中で、まだ人間が開拓していない美が一つある。それは人間関係の美だ」という言葉を引き「ハーバード・リードに見せてあげたい、人間関係の美しさ、ありがたさ」と語った。

始まる時も、終わる時も、大勢の人を騒がせたけれど、大波小波を立てながらの十年間、その幸せを、神よりもあなたに感謝したい。

求

この頁はあなたと私の情報交換の場小さなスペースですが、ご利用ください。

◆**東京都婦人情報センター公開講座案内**

⊙**宗教の中の女像**

——女はケガレて救いがたいか——

女性と宗教の問題に詳しい蓮月さんと、さまざまな宗教に共通する女性への差別や蔑視について考えます。

。日時　'92年一月十八日(土)p.m.二時〜四時

。講師　蓮月（藤谷不三枝）宗教評論家

⊙**女に冷たい社会保障**

——世帯単位の年金・税制を考える——

社会保障制度の中の性差別をいっしょに考えます。

。日時　'92年二月十五日(土)p.m.二時〜四時

。講師　橋本宏子／神奈川大学助教授

⊙いずれも受講料　無料　定員　八十名

⊙会場　東京都婦人情報センター教室

〒162　新宿区神楽河岸一ノ一セントラルプラザ15階　JR地下鉄　飯田橋駅下車

⊙申込み・問合先　同センター

☎03-3235-1140

◆**ウィメンズブックスセミナー'91**

⊙**試験管の中の女**

——先端生殖技術は女の味方か——

先端生殖技術の現場では、なにが女性の体に対して行われているのでしょうか。生殖技術と医療、代理母の問題などを考えてみます。

。日時　'92年二月一日(土)p.m.二時〜四時

。講師　長沖暁子／慶応大学理学部生物学教室助手

⊙**からだ・私たち自身**

——出生率低下はなにを意味するのか——

社会的に大きな話題となっている出生率低下という状況を踏まえ、講師の話から女性が自身の生と性を伸びやかに生きるには、いまなにが必要かを考えます。

。日時　'92年三月七日(土)p.m.二時半〜四時半

。講師　丸本百合子／同愛記念病院産婦人科医

⊙いずれも受講料　無料　定員　四十名

⊙会場　東京都婦人情報センター

⊙申込み・問合先　同センター

☎03-3235-1140

◆**アジアの買売春に反対する男たちの会よりパンフレット完成のお知らせ**

「男の性の〝現在〟を問う」

——私の宇野首相「買春」問題——

'89年六月頃に社会的に波紋を役げかけた、当時の宇野首相による「買春」問題について、単なる政治スキャンダルとしてではなく、自分たち男の〝性〟のありようを見直すキッカケとしてとらえ、いろんな男たちのコメントを集めたものです。（チラシより）

。B5版　63頁　五百円

。問合先　アジアの買売春に反対する男たちの会　〒167　杉並区荻窪三ノ二十七ノ七三浦荘　☎03-3220-0347　谷口和憲気付

◆**大学レベルの市民講座「都民カレッジ」**

都民カレッジは、東京都が設置し、都内に在住または在勤する十八歳以上の方のための講座です。開講期間は一年を四期に分け、各科目六〜十二回で一期ごと修了します。レベルは大学程度のもので、試験もレポート提出もなく、各自の学習意欲を大切にしています。

。問合先　都民カレッジ都立大キャンパス事務局　〒192-03　東京都八王子市南大沢一ノ一　東京都立大学内　☎0426-77-1234

We 10年をふり返る

'82年3月15日、ささやかな雑誌が船出したある新聞は「野の花のよう」と形容する
創刊のことばを　再び掲げよう
今なお、くらしは歪み　教育は荒廃し
子供たちは　いっそう苦しんでいる
人間らしい生活は、何処へ？
笹舟のような「新しい家庭科—We」の
小さな航跡に立つ　小さな〝波〟では
重畳たる大波に抗いきることはできなかった
……しかし……
自分の生を、だれかによっておとしめられたくない人
自分の生を、自分で引き受け、うたい上げたい人
差別のない社会を築きたい人は　確実にふえ
私たちの力量は　確実に高まった
あなたの拠点となったことこそを
We 10年の誇りとしよう

創刊のことば

自立した男と女を、人間らしい生活を、差別のない社会を、育み創り出す力を培うのが、新しい家庭科であると確信する私たちは、同じ志を持つ方たちとともに力をふり絞ろうと、雑誌「新しい家庭科—We」を創刊します。

家庭科教師、家庭科教師養成の立場にある人、家庭科教師を志す人はもちろん、家庭科に関心を抱き、ほんとうの家庭科の創造を願う人々に、心をこめて呼びかけます。

「We」の仲間になって下さい。

「We」の仲間をふやして下さい。

くらしが歪み、教育の荒廃が進む中で、子供たちは苦しんでいます。あえいでいます。人間が生きていく上で、最も大切な教育が忘れられているのです。

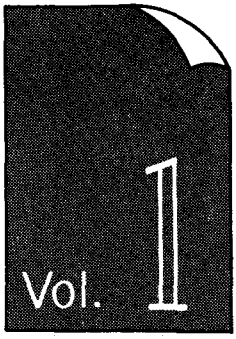
子供たちに、人間らしい生活とは、どんな内実を持つものなのかを知らせ、その力を創り出す力を培いながら、生活をいとおしむ感受性を豊かに育みたい。男も女も、生きる上で一番大切なことは何かを、家校教育の中ではっきりつかませたい。そう願う人が確実にふえてきました。

一方、女性差別が生まれてこの方の長い歴史には、いま光が射そうとしています。女も男も、自由な個人として生きるために、固定的な性別役割分担意識を、教育によってつき崩さなければならないことが明らかになったのです。

自分の生を、だれかによっておとしめられたくない私たち
自分の生を、自分で引き受け、うたい上げたい私たち
差別のない社会を築きたい私たち

いま、点の存在を脱して、線となり、輪を結びました。

「新しい家庭科—We」は、私たちが蓄えてきた力量を示すものとして、ここに生まれるべくして生まれたのです。



例月号　80P　500円

〈テーマ一覧〉

年	月号	
82	創	いでたちぬ、いま
	5	父よ、母よ、教師よ
	6	共に生きる
	7	新しい家庭科とは
	8・9	反戦とは・平和とは
	10	人間の自立とは
	11	家事労働を問う
	12	家庭・家族
83	1	男と女の新しいかかわりを
	2・3	くらしをいとおしむ

〈編集の基本〉

＊特集、新しい家庭科を創るために、発言、連載の四本柱を設け、以後十年を通す

＊〝学習の主人公たち〟を発言のトップに置く

＊半田たつ子は〝波〟を毎回執筆する

〈表紙〉馬場洋子

（数字は掲載月号）

〈巻頭言〉

〈いま、いでたつ〝We〟に贈る〉創刊号

飯野こう／小山内美江子／落合恵子／鍛冶千鶴子／櫛田真澄／佐々木保行／斉藤千代／塚越敏雄／永畑道子／樋口恵子／広田寿子／本多公栄／丸岡秀子／森幸枝／山本松代

溝上泰子／青木やよひ／飯塚重威／斉藤千代／永畑道子／矢島せい子／岡村益／樋口恵子／山本松代

〈一年を通した欄〉

＊新しい家庭科を創るために＊

小学校―名取弘文／中学校―熊本家庭科サークル／高等学校―寺島紘子／大学―回ごとに執筆者交代

＊連載＊

Weの読書室―横山雅子／テレビ残像―野村康子／銀輪のうた―栗原実抄／K子さんチのね子たち―さとうけいこ／丙十舞雅里バラード―門野晴子

〈情報〉

＊日本住宅会議発足 11

＊労働省に「男女平等法制化準備室」発足 11

＊初の登校拒否全国実態調査まとまる 2・3

〈ことば〉

（敬称略）

＊家庭科とは、鎖の輪のようにつながった生命の遠くからの流れを、生きる智恵とし、尊厳として存在するものと思います。

（小山内美江子・創）

＊人間には他人を誤解する権利はなく、他人を理解し自分を理解してもらうよう努力する権利だけがある　（新島淳良・創）

＊はっきりいって、教育実習は楽しくなかった。まず、高校の時の担任の先生に家庭科の先生を紹介してもらった。その時担任の先生は私をこう紹介した。「こいつは、家政学部なんかいかなくても他の学部にいけたんだが……」。自分で進んで被服学科を選んだ私にとって、この言い方には頭にきてしまった（日本女子大学生　佐藤光美・5）

＊男女の性による役割分担がどんなに非人間的であるかなかなか認識されないのも、「家事や育児をすること」を目的化して、それをいかに能率的に効果的にやるか、ということが重視され、その人間の生をまっとうさせることが人間の営みの目的だ、という基本が私たちの考え方から抜け落ちてしまっているからではないのか

（深尾勝子・6）

例月号　88P　500円
増刊号　112P　700円

〈テーマ一覧〉

83・4　教師は、今こそ声を産む・産まぬ……
5　産む・産まぬ……
6　はたらくことをめぐって
7　コミュニケーション
8・9　老いを考える
10　今、教科書問題を問う
11　食べるということ
12　着るということ
84・1　一九八四年
2・3　住むということ
増　学校はよみがえり得るか！

〈表紙〉加藤由美子（vol.7まで）

〈巻頭言〉

一番ヶ瀬康子／高史明／栗原彬／四方洋／那須宗一／家永三郎／志賀かう子／永畑道子／日高六郎／早川和男

〈一年を通した欄〉

＊新しい家庭科を創るために＊
小学校―福田三津夫／中学校―大森嘉子／高等学校―入江一恵・西本和代・町田道子の交代執筆／大学―回ごとに執筆者交代

＊連載＊
野の花をたずねて―大室君子／つがるいろはがるた―藤田健次／霞通信―武田秀夫／団地の風景―遠藤和枝／ねえ、きいて―宮淑子／視点―長谷川孝／銀輪のうた―栗原実抄／Weの読書室―横山雅子／テレビ残像―野村康子／ぼくのシネマガイド―名取弘文 4～11／私のシネマガイド―半田たつ子 12～2・3

〈情報〉

＊婦人問題解決のための新東京都行動計画 4
＊生命・倫理懇談会発足―厚生省 6
＊食品衛生調査会、添加物を大量認可 7
＊六・三制見直しへ「教育制度特別研究」11
＊総理府世論調査「中流意識」定着 11

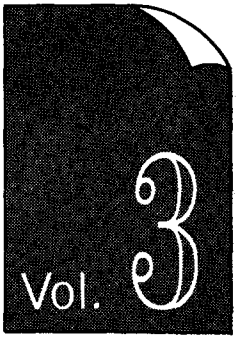
＊ことば

＊学校を子ども管理と子ども圧殺の場にしてしまったものたちとたたかうための発言でなければ、ぼくには必要がない。…声をあげるなら、そのような声をあげてほしい。そうでないなら黙っていてほしい。限りなく沈黙し、学校の死をはやめてほしい。中途半端はよくない。（斎藤次郎・4）

＊産んでも、産めなくとも、産まなくとも、女は（そして男も）状況に分断されずに、「産めぬこと、産まぬこと、そして産むこと」をひとつのテーマとして、自分に、そして社会に突きつけていくべきだろう。（落合恵子・5）

＊無数の雑用の積み重ねと、ほんの一分の喜びとが、仕事というものの総体であった。しかし、最初から私が変わらずに手がけて来たものは、共に同時代を生きている人々の疑問や哀歓であった（佐藤洋子・7）

＊平和を熱っぽく語れるのは、死を受容する老人の情熱そのものだから。…平和の大切なことを後世に伝え、生命の尊厳をさりげなく語る役割は、明日を期待する高齢者に与えてくれた今日的役割である（那須宗一・9）



例月号　96P　530円
増刊号　112P　700円

〈テーマ一覧〉

84・4　PTAって何
5　いまこそ、家庭科を問う
6　地域に生きる
7　少年・少女たち
8・9　〝遊ぶ〟ということ
10　支え合いつつ、ひとり立つ
11　〝病む〟ということ
12　つきあいを考える
85・1　〝学び・教える〟とは
2・3　〝育てる〟ということ
増　自分らしさをこそ—解き放て、つくられた役割意識—

〈巻頭言〉

室俊司／奥山えみ子／俵萠子／岡百合子／岸武雄／綿貫礼子／沖藤典子／酒井章一／樋口恵子／半田たつ子

〈一年を通した欄〉

＊新しい家庭科を創るために＊
小学校—中里清志／中学校—櫛田真澄／高等学校—福島澄香／大学—回ごとに交代
＊連載＊
野の花をたずねて—大室君子／視点—長谷川孝／counseling の応用—児玉すみ子／霞通信—武田秀夫／男女平等教育すすめてますか—中嶋里美／風に向かって—回ごとに執筆者交代／萬葉の女たち・男たち—井田邦弘／女の人生・男の人生—増本敏子／ほん—小田亜佐子／シネマ—遠藤由紀／ふじたけんじの生活マンガ—藤田健次／Weのレポート—石川由紀10〜2・3他

〈情報〉

＊家庭科＝女子用教科の時代は終わった！4
＊文部省・外務省を訪ねて5
＊共修へもう一息、6・16集会から8・9
＊「臨教審」法が成立10
＊通産省「小・中校でコンピュータ授業を」12
＊文部省家庭科検討会議の報告1

〈ことば〉

＊妹は、死によって〝自立できないおとな〟という汚名を返上し、〝どんな弱者も自立しつつある過程を歩もうとしていた〟ことを証してくれた。お互いに姉妹として生きながらもう一歩近づけなかったことへの悔いは、悲しみの底をついて、人はみな〝ひとり立てる〟ことへの信頼として支え合いの深みを照らしはじめている

（しま・ようこ・10）

＊いさかいて　憎しみ去りて　ふれ合いし
妻あたたかく　妻やわらかく

（ふじたけんじ・10）

＊病いは肉体のみならず、精神にも、社会にも家庭にもあるだろう。自らを〝病む者〟と認識した時、人は他人に優しくなれ、謙虚になり、幸せへの感情を研ぐ。詩人の魂にも似た自然・宇宙への畏怖を抱くことが出来るのではないだろうか

（沖藤典子・11）

＊昔はいろんな影が人生にありました。影を失ってあっけらかんと生きている今の若者たちに、影の部分を語ることも、老いていく私のひとつの責任だと思っています。

（中谷君恵・12）

例月号　96P　530円
増刊号　112P　700円

〈テーマ一覧〉

85・4　性をどう語る
5　結婚の風景
6　家族、その人間関係
7　離婚と子どもたち
8・9　法律と私たち
10　いま、熱く　女の時代
11　みのりの秋に
12　人間と土を生かす
86・1　くらしの文化を探る
2・3　水はいのちの泉
夏　働き続けるために…子育て・くらし方エトセトラ
冬　自分らしさをこそⅡ—私がわたしであるために—

〈巻頭言〉

干刈あがた／上野千鶴子／藤原房子／斎藤茂男／中谷瑾子／森山真弓／森崎和江／丸岡秀子／大田堯／富山和子

〈一年を通した欄〉

＊新しい家庭科を創るために＊
小学校—野原春江4～8・9、清水恵子他10～2・3／中学校—森陽子／高等学校—森幸枝／小沢有作4～8・9、佐藤慶子10～2・3
＊連載＊
遊びの風物詩—田澤茂／教室の窓—植垣一彦／カウンセリングの応用—児玉すみ子／霞通信—武田秀夫／男の台所—高瀬斉／土—五十嵐愛子／政治の目—宮本なおみ／フェミニスト・テレビ考—鈴木みどり／Weのブックランド—長谷川公一／フウフウフウふうふ—ウツのみや／思えば思われる物語—丸山光子／子どもって…—稲邑恭子4～8・9／おとなって—松本のり子10～2・3／Weのレポート—鈴木みどり他

〈情報〉

＊「家庭科男女共修」母親たちの意見5
＊江田五月氏、衆院文教委で家庭科質問6
＊女性民教審、臨教審一次答申に見解8・9
＊教課審スタート11

〈ことば〉

＊（性を語るのに）一番いいのは、自分が妊娠している時だ。子どもたちは、私のお腹に耳をつけたり、手でお腹をさすったり、階段でころばぬよう気をつけてくれたり、赤ちゃんの分、といって給食を沢山よそってくれたりした　（奥地圭子・4）

＊一と昔前は、すすんだ女の子たちが、自分にふさわしい男がいないと嘆いた。今では「やっぱり家でごはん作って待っててくれる女性がいい」と言うおくれた男たちが、自分にふさわしい相手が見つからなくて「婚期を逸する」時代が、すぐそこまで来てるのだから　（上野千鶴子・5）

＊「家庭科なんか女子でも要らないのに、何で今さら男子にまで」「家庭科なんか男の子にしてもらったら学力が低下する」等々のひどい差別発言もあった。

これらの意見が家庭科を男子にもさせたいと言った時に、はじめてドッと出されて来て、たてまえでないホンネとして語られたところに、教科の差別・蔑視を超えた女性差別の実態があり、戦後の民主主義の底の浅さに驚かされた　（森幸枝・6）

例月号　96P　530円
増刊号　112P　700円

〈テーマ一覧〉

86・4　幼い日—大人は忘れてしまった
5　子ども—大人の勝手な思い込み
6　〝いじめ〟—その根っこには何が？
7　性—小・中・高校生は何を思う？
8・9　親—いま、学校に何ができる？
10　家庭科—いま新しい地平に立つ
11　家庭科—どう変える、どう変わる
12　平和—今年を顧みる
87・1　女性—世界を変え得るか
2・3　明日—人はみな成熟に向かって
夏　子どもたちへ—大人になる旅
冬　自分らしさをこそⅢ—他者との豊かなかかわりをひらく—

〈巻頭言〉

永畑道子／毛利子来／小沢有作／矢崎藍／江田五月／久保田真苗／一番ヶ瀬康子／郷静子／山川菊栄／羽田澄子

〈一年を通した欄〉

＊新しい家庭科を創るために＊
小学校—村田尚子／中学校—磯部幸江／高等学校—立山ちづ子
＊連載＊
季節のうた—田澤茂／研究ノート〝性〟—女と男の関係を考える会／教育のなかの心理学—小沢牧子／教室の窓—植垣一彦／いま中学校—仲野暢子／読書つれづれ草—武田秀夫／ワンポイント近代日本女子教育史—秋枝蕭子／荊冠の中に輝く星—吉田和子／詩—羽生槙子／赤かぶだより—酒井和子／季節のおべんとう—小林カツ代／経済の目—福島澄香／CMの中の女と男—吉田清彦／いろんな十代人—鈴木みち子

〈情報〉

＊臨教審「審議経過概要」その3発表4
＊女性民教審、家庭科男女共修を提言6
＊中・高校家庭科、教課審の考え方10
＊教課審、中間まとめ発表12

〈座談会〉家庭科は今、新しい地平に立つ10

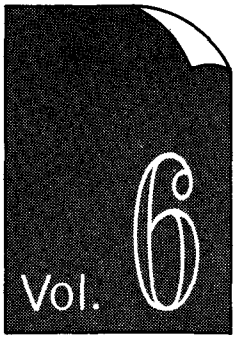
〈ことば〉

＊妊娠してしまったのなら、もう二人は高校三年生なのだし、卒業して、結婚して、子供を産んでもいいと思います。中絶をしたりしたら、A子さんが傷つくだけだと思うし…私だったらA子さんに卒業して結婚するように助言すると思います
（アンケートに答えた女子高校生）

＊子供とは不思議なものだ。自分の子供でありながら、全く自分の思い通りにならない。いやよく考えてみると、自分の子供であることは、自分の思い通りになるための何の理由にもならないのだ　（江田五月・8・9）

＊やっとここまで来ましたね。おめでとうございます。…香り高い新しい酒は、未来をひらく鍵になるでしょう。そして、だれがなんといおうと現場で心血をそそぐ者こそ、その鍵をにぎる者であるという言葉を、贈りたいと思います　（久保田真苗・10）

＊今、私は、戦争へつながるすべてのものを、個人の責任において可能な限り拒否して生きようと心を決めている。そして、死語となって久しい「清貧」という言葉の重さときびしさを、改めてかみしめている
（郷静子・12）



例月号　96P　530円
増刊号　112P　700円

〈テーマ一覧〉

87・4　先生は悩んでいる
5　情報化社会の光と影
6　学校給食で論争しよう
7　「制服」着る・着せられる
8・9　「原発」知らなくていいのか
10　機会均等法、何が変わった？
11　「家族」どう変わる、どう変える
12　〝国際居住年〟って何だった？
88・1　Weのルネッサンス
2・3　新教育課程をどう考えるか
夏　女たちの教育改革提言
冬　ゆたかさを紡ぐ—山形のくらしから

〈一年を通した欄〉

＊新しい家庭科を創るために＊
小学校—蛙間裕人／中学校—姫路サークル／高等学校—梶原公子

＊連載＊
四季のうた—金子静枝／巻頭詩—羽生槙子／研究ノート〝性〟—女と男の関係を考える会4〜8・9／ダブル・ポケット—国信潤子10〜2・3／教育のなかの心理学—小沢牧子／いま中学校で—仲野暢子／読書つれづれ草—武田秀夫／知らないことを知りたくて—蓮池悦子／ワンポイント近代日本女子教育史—秋枝蕭子／KNOW HOW 共学家庭科—湯沢静江／Weの相談室—児玉澄子／政治の目—湯川憲比古／経済の目—福島澄香／はなにっき—藤尾知子／家族を越えたネットワーク—中嶋里美4〜8・9／青春ふりかけ—ごじら・りょうこ4〜8・9／ひよっこクラブのコックさん10〜2・3／日本その日その日—大西麻里子10〜2・3

〈情報〉

＊新教育課程へ向けての提案（共修の会、高校長協会家庭部会、家庭科教育学会）5
＊臨教審最終答申10
＊教課審答申、共修の会声明2・3

〈ことば〉

＊平和と平等が地球人の旗印となっている今何と現実はそれと遠いことでしょう。中学校も正に、非平和・非平等の場です。臨教審とか教課審の委員の方は、中学の現場のことをちょっとでもわかろうとしていらっしゃるのでしょうか　（香川敦子・4）

＊かつての職人たちが、弟子を仕込んだように、技術を教えるのはもう不可能な時代なのだろうか。特に「義務教育」の学校の中では、することの多岐、あまりにも雑多な教材を扱っていくことの中で、極めて難事業と思えて来るのだった（蛙間裕人・5）

＊私たちが日頃思っていることを卒直に、大胆によりわかりやすい言葉で、堂々と訴え議論できる場として選挙を考えてみたらどうだろうか。選挙は実にドラマチックであり、人間を知る最高のチャンスでもある　（中嶋里美・7）

＊チェルノブイリの事故は、千キロ以上離れた外国の原発で起こった事故も、生活を台無しにし、命の脅威となることを教えてくれました。ましてや、国内に三十四もの原発をかかえる私たちにとっては、日々の命に直結する問題です　（高木仁三郎・8・9）

例月号　96P　550円
増刊号　112P　700円

〈テーマ一覧〉

88・4　なぜ、行くのか学校へ
5　学校―絶望？　希望？
6　学校―今、親にできること
7　なぜ、家庭科にコンピューター
8・9　コンピューター、何をどう変える
10　食と環境といのち
11　いのちを医療に任せていいのか
12　マスコミと文化の変容
89・1　くらしの論理を創る
2・3　上すべりの〝国際化〟
夏　教育はどこへ
冬　ゆたかさを紡ぐII―人が人と向きあうところで―

〈インタビュー〉

干刈あがた／佐々木賢／長谷川孝／三宅なほみ／橋本益男／曽田蕭子／黒岩卓夫／斎藤次郎／吉沢久子／大沢周子

〈一年を通した欄〉

＊新しい家庭科を創るために＊
小学校―岩瀬志津子・北川好美／中学校―根津公子・常陸れい／高校―浅井由利子

＊連載＊
四季のうた―金子静枝／巻頭詩―羽生槙子／海の輝く日―佐藤通雅／今、子どもたちの世界は―塚越敏雄／経済の目―福島澄香／ダブル・ポケット―国信潤子／歴史の窓―岡百合子／ワンポイント近代日本女子教育史―秋枝蕭子／KNOW HOW 共学家庭科―湯沢静江／女、そして男―田川建三／不思議の国ニッポン―クレイトン・ナフ／よそおい―内山裕子／はなにっき―藤尾知子／ひよっこクラブの探検家―佐多和子4～8・9／何を血迷っているのか―井田朋子4～8・9／青春 ZIG ZAG―稲邑恭子10～2・3／もうちょんぼ、がんばらいや―楫野良平10～2・3

〈情報〉

＊新教育課程、中高の家庭科内容どうなる4

〈ことば〉

＊Weは、すごくきめ細かいところがいいと思うわ。もう向うに行ってしまっている人には自明の理でも、そこにいくまでに、もろもろの迷いや疑いや、問いがあるのね。それを丹念に取り上げているから……。
（干刈あがた・4）

＊高校は、気にいらない生徒を追放する権利を持っている。ここが中学校とは決定的に違うところだ。中退といっても、大多数が形の上では自主退学。ハマコーが予算委員会の議長をやめさせられるときも、高校生がやめさせられるときも、同じ原理・原則が働く
（谷合規子・5）

＊例の目黒の中学生の場合も、もう一つの世界に逃げそこなっているという気がするんです。非行という手もあるじゃない。家出という手もあるじゃない。登校拒否という手もあるじゃない。なのに、逃げ場がなくって殺しに行っちゃったってことが問題なんです
（斎藤次郎・12）

＊すべての男が、自分の子供の顔をほとんど見ることのない状態にいたく心悩むものでなければ、子供の問題は見えてこないのではないでしょうか。
（田川建三・1）

例月号　96P　567円
増刊号　112P　721円

〈テーマ一覧〉

89・4　何をねらうか「生活科」
5　内申書―その功罪を問う
6　家庭科―何を評価するのか
7　生涯学習社会はバラ色?
8・9　地球市民として生きる
10　食べものから地球を見る
11　からだ―その不思議
12　コミュニケーション―私をひらく
90・1　フェミニズムの〝いま〟
2・3　教育の中の性差別
夏　家庭科の可能性を探る
冬　ゆたかさを紡ぐ Ⅲ―自然との共生を求めて―

〈表紙〉長野ヒデ子（vol.10まで）

〈インタビュー〉

村田泰彦／庄司和晃／楠原彰／室田武／木村利人／吉福伸逸／加藤春恵子／三井マリ子

〈一年を通した欄〉

＊新しい家庭科を創るために＊

小学校―熊本家庭科サークル／中学校―吉川裕子・土川礼子他／高校―田村より子

＊連載＊

風の地図―佐藤哲生／巻頭詩―羽生槙子／家族と家庭科―酒井はるみ／親子論と心理学―小沢牧子／海の輝く日―佐藤通雅／広がるネットワーク―平井雷太／あっちゃ、こっちゃ、フフフ―田中正彦／筐―村田直文／幼児クラブやってみる?―佐多和子／KNOW HOW 共学家庭科―湯沢静江／私の朝鮮史―岡百合子／食べもの文化史―石川尚子／よそおい―内山裕子／石けんコンサート通信―よしだあきひろ

〈情報〉

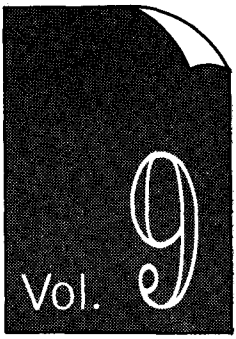
＊新学習指導要領案発表、共修の会声明文 4
＊「生涯学習」文部省の意図、予算は? 7
＊家庭科の条件整備は?（東京都の場合） 2・3
＊難問、高校新教育課程の移行措置 2・3

〈ことば〉

＊子育て、ということばを私は好きではない。そのことばの代わりに、子どもと暮らす、子どもたちと生きてゆくということばを使いたいと思うのだけれど、そうあっさりとはいかない　（小沢牧子・4）

＊教年前から、ぼくは全共闘世代の子どもたちへの「歪んだ学歴主義」の臭いを感じている。「自分が強制しているわけではないけれども、子どもの方が有名校に行きたがるから」と言いながら、潜在的には現在の学歴ヒエラルキーの差別構造を容認し、そのトップクラスに参入することが現在の社会では「なんといってもうまみがある」という価値判断をしているように見える　（保坂展人・5）

＊一九七二年五月十五日のことである。この日を今も明確に覚えているのは、沖縄が日本へ復帰した日で、…沖縄の戦史を食物の授業で一わたり話をした。話が終わるやいなや、教卓のすぐ向い側にいる男子が「沖縄では何食ってるのかなあ」とつぶやいた。少しオーバーに表現するなら、この一言で私は脳天をぶち抜かれる思いがしたのである　（湯沢静江・6）



例月号　88P　567円
増刊号　104P　721円

〈テーマ一覧〉

90・4　90年代、学校を変えよう
5　生、そして死に迫る教育
6　「家庭生活」をどう語る
7　「環境・資源」を見つめる
8・9　消費者教育は、何を目指す？
10　地域をよみがえらす
11　高齢化社会がやってくる
12　マス・メディアは何処へ
91・1　性役割の固定化は揺らいだか
2・3　新しい家庭科を創る
夏　家庭科が変わる—情報化のうねりの中で
冬　出会いは歴史をつくる—アジア・子ども・人権—

〈インタビュー〉

最首悟／高史明／樋口恵子／新井直之／青木やよひ

〈一年を通した欄〉

＊新しい家庭科を創るために＊
小学校—小田富英、森妙子、池田雅江、村田汀子／中学校—特手ナツ、足立幸代他／高等学校—矢代節子、蔵本佳子他

＊連載＊
季節のうた—仙田敬子／荒野のバラ—田中裕一／家族と家庭科—酒井はるみ／大学生たちと歩く—小沢牧子／男性学への契機・魔男の宅急便—諸橋泰樹／私の朝鮮史—岡百合子／食べもの文化史—石川尚子／KNOW HOW 共学家庭科—湯沢静江／広がる運動、広がる人の輪—中村英之／19歳の日記—金森土岐 5〜2・3

〈情報〉

＊私たちが権力に働きかけるために／共修をすすめる会、文部大臣に要望、移行措置についての要望、都立秋川高校分会の決議 5
＊高校学習指導要領解説・家庭論と問題点 6
＊家庭科に関心を持つ市民の声、都立高校の男女同数を実現する会の声明 7
＊共修共学を考える会、京都府教委に要望 10

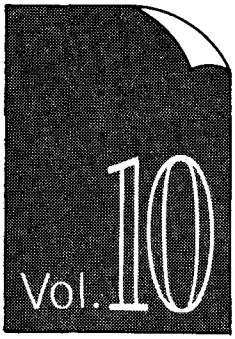
〈ことば〉

＊男は「君が好きだから抱きたいだけだ」と言った。「好き」という感情は相手の気持ちや状態を尊重するということであり、それすらできずにただ押しつけるだけの「好き」など、傲慢以外の何ものでもない。このことをその男はわかっているのか
（金森土岐・8・9）

＊行事のなかにはユーモアあふれるものもある。私が住んでいる地域には九月一日に生姜節句という行事があった。この日、嫁を里がえりさせる姑が「しょうがない嫁だ」と新生姜をたくさん持たせてやれば、実家では「見逃して下さい」とみのをお返しに持たせたとか
（石川尚子・10）

＊夫を大事にしたつもりで台所に入るなと言っている女性がまだいますが、大事なら真面目に律義に生きてきた夫の晩節を汚さないでくれって。無理心中なんて、生き残りゃ殺人罪ですよ
（樋口恵子・11）

＊極端な例は、女性向けの雑誌でさえ、少数の女性と多数の男性によって創られており内容的な決定権は男性にあるということだ
（アルベルト・ノヴィック・12）



例月号　88P　580円
増刊号　104P　700円

〈テーマ一覧〉

91・4　教師という仮面を脱ぐ
5　少年・少女の現在
6　心からからだへ
7　生と死を授業で
8・9　ひとと生殖
10　買売春の構図
11　アジアの中の私たち
12　地球再生へ向けて
92・1　揺らぐ家庭
2・3　男女共生の道を拓く
夏　高齢化社会、そのデザイン
冬　出会いは歴史をつくる―違いとつき合う―

〈インタビュー〉
俵萠子／高橋巌／安達倭雅子／尹健次／角田重三郎／板本洋子

〈一年を通した欄〉
＊新しい家庭科を創るために＊
小学校―鈴木まき子他／中学校―回ごとに執筆者交代／高等学校―分校淑子他

＊連載＊
季節のうた―仙田敬子／荒野のバラ―田中裕一／家族と家庭科―酒井はるみ／男性学への契機・魔男の宅急便―諸橋泰樹／楕円の夢―武田秀夫／あかさたな―福田緑・加藤由美子／買うて来て使う―山本謙吉4～8・9／現代衣生活考―むらき数子10～2・3／オホーツクの潮風荒く―江口凡太郎10～2・3

〈情報〉
＊中教審、学校制度審議の経過を提出4
＊婦人問題企画推進有識者会議意見7
＊厚生省「人口動態統計」から8・9

〈湾岸戦争特集〉
＊湾岸戦争、パレスチナ、夫婦の対話4 5
＊わたしの一九九一年一月十八日4
＊〝各政党に聞く会〟に参加4
＊湾岸危機発生後の主な動き5
＊湾岸戦争、アメリカ西海岸から6

〈ことば〉

＊そんな学校とは何かというのですか。ですから〈託児所〉〈収容所〉あるいは〈レジャーランド〉です。まぎれもなくその機能の方が前面に出てきたのです。それを認めたがらない教育関係者も親も、あるいは評論家といわれる〈安全地帯〉にいる連中も、しきりに人間教育を再び！　なんていってますが、もうそんなウソいうのはやめようじゃないですか――（佐藤通雅・4）

＊産もうと決心した時から、生命に対しては全面的に引き受けていかなきゃいけないと思う。障害児や奇形児が産まれた時はどうするのか、「どんな赤ちゃんでも私の赤ちゃんよ、元気に産まれてらっしゃい」という気持でお産にのぞんでほしい
（高橋富士子・8・9）

＊日本国憲法で人権が大きな柱になっていると言うのは、あくまで「日本国民」だけを対象とした話なんです。これが戦後民主主義の実態です。日本人だけの民主主義なのに、そのことを教えられていないし、気づきもしないのです　（尹健次・11）

（きらめく宝石のようなことばのほんの一部しか飾れず、残念です。「We」編集部）

IとIの交流を深めた Weの催し

（掲載月号）

82・8・21～22　合宿　鳩の巣・山楽荘
・講師　永畑道子　武田秀夫（12・2・3）

83・3・5　創刊一周年記念公開ゼミナール「学校をよみがえらせよう―家庭科の窓から―」日本教育会館
・実験授業・紙芝居「家族って何だろう」ますのきよし
・パネルディスカッション…テーマの通り…荒井紀子／渋谷路世／半田たつ子／福田三津夫／ビヤネール多美子／司会・名取弘文（56）

83・8・19～21　夏季フォーラム「学校はよみがえり得るか」江ノ島・婦人情報センター
・シンポジウム…梶原公子／佐々木賢／山崎真喜子／司会・長谷川孝
・実行委員長…皆川鎮枝　（増）

84・3・31　公開ゼミナール「管理教育を超えるには」新宿・婦選会館
・公開授業「役割分業の固定化を突き崩すには」中嶋里美
・パネルディスカッション…標題と同じ…三井マリ子／芦谷薫／山下文明（67）

84・8・6～8　夏季フォーラム「自分らしさをこそ―解き放て、つくられた役割意識―」御殿場、東山荘
・講師…吉田清彦・小沢有作
・実行委員長…石川由紀（増）

85・3・30　公開ゼミナール「教える、教えられる関係を問う」日本教育会館
・授業もどき「観音様の鳩―条件と例外」長谷川孝
・語ろうよ、みんなで…司会、植垣一彦、平井和子
・実行委員長…内村章一郎（67）

85・8・10～12　夏季フォーラム「自分らしさをこそⅡ―私がわたしであるために―」嵐山・国立婦人教育会館
・講師…青木悦、松本キミ子
・実行委員長…錦真理　（冬増）

86・3・29　公開ゼミナール「育つ・育てる―育ち合う―今、自分が生きる場で―」中野・勤労福祉会館
・シンポジウム…テーマの通り…武田秀夫／森幸枝／屬静
・寸劇…オットコ一座
・実行委員長…芦谷薫（7）

86・8・9～11　夏季フォーラム「自分らしさをこそⅢ―他者との豊かなかかわりをひらく―」富士吉田・21富士研修センター
・講師…村瀬春樹・児玉澄子
・実行委員長　若竹キミイ（冬増）

86・11・29　秋の集い「生きていけるじゃないか」神楽坂エミール
・講師…児玉澄子／小沢牧子／越村佳代子（2・3）

87・3・29　公開ゼミナール「コンピューターが人間らしさを消す!?」都婦人情報センター
・問題提起…石川由紀／橋本益男／湯川憲比古
・実行委員長…川崎絢子（7）

87・8・1～3　夏季フォーラム「ゆたかさを紡ぐ―山形のくらしから―」米沢・天元台ホテル
・講師…佐藤慶子／星寛治
・実行委員長…佐藤慶子（冬増）

87・11・21 **秋の集い「いま〝少年〟はどこに棲むか」**中野サンプラザ
・お話…武田秀夫／坂本弘子
・実行委員長…稲邑恭子（2・3）

88・3・26 **公開ゼミナール「とりあえず言、いたい—教育について」**都婦人情報センター
・問題提起…水上洋／李喜奉／平井雷太、司会…大西麻里子（夏増）

88・8・6～8 **夏季フォーラム「ゆたかさを紡ぐⅡ—人が人と向きあうところで」**ルーテル能勢研修センター
・お話…宮迫千鶴、シンポジウム「今、教育は」田中英雄／中島絢子／半田たつ子
・実行委員長…入江一恵（冬増）

88・11・26 **秋の集い「今の子どもは『異星人』！—とらわれを外す—」**中野サンプラザ
・講師…新島淳良／平井雷太
・実行委員長…鈴木昭彦（2・3）

89・4・1 **公開ゼミナール「わたしにとっての一月七日—観て、聴いて、感じたことを話そう—」**中野勤労福祉会館　主催…Weの会
・実行委員長…東田洋子（7）

89・8・4～6 **夏季フォーラム「ゆたかさを紡ぐⅢ—自然との共生を求めて」**阿蘇簡易保険センター
・講師…原田正純・田中裕一／「シンポジウム「自然と人間の共生—水を考える」伊藤キクヨ／金子博／後藤誠治／広松伝
・実行委員長…桑畑美沙子（冬増）

89・11・26 **秋の集い「コンピューターは、家庭科を変えるか？」**都立松が谷高校
・講師…村岡直行／石川尚子／福島澄香、司会…芦谷薫（夏増）

90・3・25 **関西春のつどい「好きです『新男類』—90年代は女男共生の時代—」**主催…兵庫・大阪・京都Weの会
・パネラー…佐竹隆幸／梶田淳平／吉田明弘、司会…中村英之（6）

90・8・3～5 **夏季フォーラム「出会いは歴史をつくる—アジア・子ども・人権—」**伊豆長岡・富士見ハイツ
・シンポジウム…テーマの通り…最首悟・松井やより・関千枝子
・実行委員長…若竹稜子（冬増）

90・11・25 **秋の集い「男を変える、女が変わる—男女で学ぶ家庭科新時代に」**新宿区婦人情報センター
・シンポジスト…佐藤洋子／原健／福留美奈子／諸橋泰樹、司会…半田たつ子（2・3）

91・5・12 **初夏のつどい**
・〈東〉**「性役割の固定化は揺らいだか」**都婦人情報センター
主催…Weの会、担当…武田秀夫
・〈西〉**「NO！と言える関係『ヨメ』『ムコ』『シュートメ』スクランブル」**神戸学生青年センター
主催…We大阪の会、We兵庫の会、担当…吉田清彦（8・9）

91・8・2～4 **夏季フォーラム「出会いは歴史をつくる—違いとつきあう」**八王子・大学セミナーハウス
・講師…中沢弘幸、シンポジウム…テーマの通り…有光健／李順愛／藤田進、司会…小木曽友（冬増）

92・2・2 **We十周年のつどい**　神楽坂エミール
・パネルディスカッション「浮遊する若者たち」とパーティ

◆ウイ書房の単行本と We既刊本について

次のメッセージとともに、ウイ書房は下記の本を刊行しました。

「見せかけの豊かさと裏腹に、人間がおとしめられているいま、生きる力を育むはずの教育が病んでいます。

みずみずしいいのちを自ら絶つ子どもたちに衝撃を受けるあなた、人間が生きるに値する世を、どうしたら創ることができるかと、ためいきをつくあなた、人間に値するくらしを創る力を、どうしたら育むことができるかと、思い惑うあなた、ウイ書房が心をこめて贈る次の本に、あなたはきっと手がかりを得るでしょう」

これらの本を、零細な出版社から送り出せたことを、著者並びに読者の方々に深く感謝いたします。

ウイ書房が「We」を出し続けることは不可能と決断せざるを得ませんでしたが、十年間の物心両面の遺産である単行本と既刊の「We」は、それを必要とされる一人でも多くの方々に、今後もお届けしたいと願っています。

どうぞ同封の振替用紙をご利用の上、ご注文下さいませ。この振替用紙をご利用の場合、送料不用です。またお仲間にすすめられるために振替用紙が必要の場合もお申しつけ下さい。

(書名)	(著者名)	(発行年月日)	(価格)
近刊！			
●心理学は子どもの味方か？ ―教育の解放へ―	小沢 牧子	92・2・1	一五〇〇円
●人間って 不思議 ―一つの視角―	半田たつ子	83・3・1	一五四五円
●子どもって 不思議 ―学ぶことは生きること―	長谷川 孝	85・3・15	一三三九円
●私塾霞国語教室風景	武田 秀夫	86・3・15	一七五一円
●男女で学ぶ新しい家庭科 ―京都における歩みと実践―	森 幸枝	86・7・15	一三三九円
●若いいのちの像 ―私のカウンセリング入門―	児玉 澄子	86・7・15	一三三九円
●家庭科新時代 ―Weからの提案―	半田たつ子編	87・4・1	二〇六〇円
●〈詩集〉木、鳥、娘たちとわたし	羽生槙子	88・5・25	一〇三〇円
●らくだが翔んだ ―教育の常識の非常識―	平井 雷太	88・11・30	一二三六円
●子ども発大人へ 「学習の主人公」&		89・2・15	一三三九円
―いま生まれる新しい関係―	小沢牧子		
●〈詩集〉絵 Ⅲ	羽生 槙子	89・4・20	一〇三〇円
●消費者教育の創造	宮坂 広作	89・7・1	二〇六〇円
●教室のミニ舞台から ―こぼれ話20―	児玉 澄子	89・10・30	一三五〇円
●〈詩集〉夢運び屋	羽生 槙子	90・2・10	一五四五円
●花・野菜詩集	羽生 槙子	90・7・30	一六四八円
●木犀の匂う朝に	半田たつ子	91・5・10	一八〇〇円
●共生社会への教育 ―生活主体の形成を求めて―	宮坂 広作	91・9・30	二二〇〇円

わたくしから あなたに

◆まだ先の話ですが、私は来年の秋から、チェコスロヴァキアへ絵の勉強に行こうと計画しています。まだ確定ではないのですが、多分80％くらいの可能性があります。もし決定した場合、語学研修もあるので、七月頃からむこうへ行くことになるはずです。

私のいつもの仕事とは違った分野で、この二年間、貴重な経験をさせていただきました。いろいろありがとうございました。

チェコスロヴァキアには、二年間留学の希望を出しています。絵本の仕事を始めて来年で八年間になりますが、やはり自分の力不足を感じるし、移り変わりの激しい日本以外の国で勉強したいのです　（国立・**降矢奈々**）

◆貴誌をはじめ、いろいろな機関紙、通信物が毎月届き、各地で、各分野でがんばっていらっしゃる方の報告、実践を知ることで、ずい分心の支えになっています。

仲間とともに話している時は、とても、とても!! 楽しいのですが、やはりどうしても行政や地域の中では、無力感におそわれがちです。でも、がんばっていらっしゃる（まだ会えずにはいる）たくさんの方々の実践(!?)をはげみに、楽しみながら、ボチボチと、決してあきらめずにやっていきたいと思っています。

木更津でも、いま在宅介護支援センターの構想（?）が、保健所、市、医療機関で調整チームをつくることで具体化しつつあります。高齢化社会の問題、環境問題、教育問題は、皆相互にかかわる内容ですが、いろいろな方々との出会いを楽しみに、呆けずに長く続けていけたらと願う、今日このごろです。

（木更津・**木田直子**）

〈Weの読者会だより〉

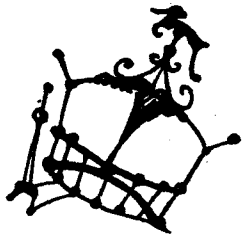
〈We大阪の会〉

◆十二月一日(日)　千里公民館にて。テーマは「環境問題とわたし」でしたが、メインに話していただく予定の人が、突然欠席されました。どうしようかと考えているうちに参加者が集まって、高校英語教師の寺本さんが、男性で家庭科免許を取ろうとしたいきさつや、日本女子大でのスクーリングの様子（男性が七、八人いたとか）を面白く話し、みんな聞き入っているので、「自分が今一番感じていること」を話し合うことにしました。

飯田さんからは、「悪書追放」運動の主体が若い人になりつつあるということ。府の条例にまで持っていこうとする彼等の熱意と、世の中全体が逆の流れとしていく恐ろしさを。村岡さんからは老人問題、民間のケアサービスの充実に反して行政の貧しさとお役所仕事の無責任さについて。京都府が自動床ずれベットを無料で貸与してくれるのはよいが、新品同様のものでも一度使用して不用となると引き取らず、大型ゴミとして出させる話など。

続いて豊中の中学校で起きた「いじめ」の問題、そして今一番みんなが心配しているWeの今後のことについて話し合い、引き続き、Weフォーラム実行委員会となってますます熱い話し合いが続きました。　（北川好美）

Weになんでも言おうなんでも聞こう



◆Weにまだ深入りしてない分だけ他人事として無礼に申しますと、

●この十年の歴史を創り、今、その時代の一つの使命を果たし終えたのだな、という感じがします。特にこの十年の時代の変容のすさまじさを想えば、こういうスタイルを十年も続けてこられたのは、奇跡みたいなことでしょう。あらゆる雑誌のプロたちが、年に何十誌も創刊しては、大半は一年ももたずに散り果ててゆくのですから。

●Weは、三つの大きな矛盾をかかえてやってこられたと思います。

その1、大衆誌・実用誌でなく、一種の思想誌なのに、採算をとろうとしたこと

その2、思想伝達（深く濃いものを少数に伝えること）と、組織・実践化（多くの人が実行できるほど楽しく、平易に伝えること）を同時にやってきたこと

その3、人が家族を通して支えあう家庭科教育と、家族を解いて個人の自立をめざす反家庭科教育を同時にやってきたこと

●大変な矛盾を内側から止揚しつつ、絶妙なバランスの中で十年やってきたことは、何といっても驚異的なことです。その果てに私も含めた現在の私たちが在るのですから。これは祝賀に値いすることでしょう。こんなメディアって、あんまり聞いたことがないですね。

●卒直に言えば、初めから夫々の特集の組まれ方の価値観に沿っていなければ読むことが難しい雑誌だと思いました。

ある種のテーマでは、反対の意見とか、根本的に異なる立場の（大体、多数の人々が影響を受けている）根拠を示すような文章が少ないので、読めば理解が深まるにしろ、極端にいえば読まなくても分かったつもりになる、という雰囲気があります。Weの一つの弱点だと思います。もし何らかの方策で継続されるとすれば、この点を最も改善してゆきたいと思います。

●しかし毛沢東サンではないけれど〝矛盾があればこれを解決しようとする運動は、必ず起きる〟ものでしょうし、水は高きより流れるものであれば、現代の社会や価値観の呪縛に対して、これを解き放とうとする人々は、若い世代の中にもたくさんいると思います。前の時代の人とやり方が違うだけです。必ず〝次の十年〟に合った雑誌のスタイルがあると思います。

半田さん、スタッフの方々、無償の努力を惜しまれなかった周囲の皆さんに、心からの敬意と感謝を捧げ、チボー家のジャックのように、つぶやきたいと思います。

「出発だ」。　（岐阜・津田正夫）

◆Weとお別れしなければならないこと、たいへん残念に思っています。三、四年の短いおつきあいでしたが、同業者の一人として、広告を一切入れずに主義・主張をはっきり打ち出していく編集方針に感心していました。今までの価値観が崩れつつある時代だからこそこうした雑誌が必要なんだと、毎号楽しみにしていました。

私自身、部数を伸ばすことに協力できたらよかったなあとしみじみ思っています。また何でもお力になれることがあれば、ご連絡ください。　（名古屋・山本直子）

◆毎日恐ろしいニュースに、虚無的にならな

いよう心を支えるのが辛い日々ですが、この度「We」の実状をのべられたお知らせをいただき、ため息をついております。一所懸命やってらしたことは皆わかっておりますから、多分言葉もない有様でしょうが、今まで蓄積されてきた厚味の中から、よい智恵が出るだろうとも考えます。

何のお役にも立たぬ身には、とりあえず半田さんとスタッフの皆様に感謝の心をお伝えすることしかできません。Weのおかげで、いろいろお育ていただきました。容易ならぬこれからの世で、どのような形にせよ、ウイ書房を作られた時のお心が生きることを信じています。何かできることがありましたらご連絡下さいませ。

（小平・**岡百合子**）

◆Weのこと、とても残念です。わいふの株式会社化と同じころ発足なさったように思います。十年、短いようで長い。まして一つの雑誌を十年続けることの大変さは、やってみた者でないと分からないと思います。しかも、月刊で!! 本当に立派だったと思います。

（東京・**田中喜美子**）

◆これまで危機だということは耳にしておりました。しかし何の協力もできないで、いやしないで時を過ごしてきてしまいました。今になって、深くくやまれます。

Weは私にとって心の支えで、送られてくるとすぐ読みました。深みがあり、考えさせられる内容で、その時時の社会のニーズにも答えられてきていましたから。でも、半田さんの心労は大変だったろうと思います。今までつくり出されてきた人と人とのつながりが、これからももてるような、何らかの「会」がつくられていくといいでしょうけれど……。

皆さんで検討された方向での終結のしかたに意義はありません。ただ一つ、残念だなあ…という気持がとても強く残るだけです。

（鹿児島・**特手ナツ**）

◆Weの十年は、私にとって、家庭科の教師として、一人の人間として、いつも心の芯にありました。特に半田さんの生き方、感じ方、表現力その他ひっくるめて魅せられていたとも言えるかもしれません。併せて、半田さんとWeを支えて動いて下さっている方々の行動力、自分らしさ、個性とその表現や、生きることへの真面目さも魅力でした。けれど、ファン、熱心な一読者という域はなかなか超えられませんでした。でもWeの会に入会して、Weの中で、枯木ではなく、ちょっとでも緑濃く、ちょっとでも大きい木の一本になれたらいいなあと思っていました。

この十年、私を育ててくれたWeに感謝をこめて、背伸びして第Ⅱ期のWeを育てる「こやし」になれるよう、頑張ってみたいと思っています。

（天理・**重富素子**）

◆「えっ?」と読み直しまして「やっぱり…」と、何とも申し上げようのない無念の思いがいたしました。ここまでWeを育ててこられました半田さんのお気持は、察するに余りあるものと存じます。

昨今、現場の泥沼はいよいよ深く、Weがもう出ないことは、先導的なすばらしい理念と実践、ユニークな人間味あふれる著者の方々による幅広い大切な学習の場を、結果として失うことになりそうでございます。

（京都・**森幸枝**）

◆〝野の花〟というWeに与えられたイメージ言語は、当初はとも角、今はあまり言ってほしくない言葉ですが、でも泥田の中の蓮の花ととらえれば、き然として自己を主張し続けた小さな雑誌であることを、喜びうれしく思ってきました。これだけ特色ある雑誌になったのだから、何とかなるのでは、とも思ってみましたが…。

（水戸・**酒井はるみ**）

◆何とかなります

（編集部）

◈「Weの会」報告

★Weの読者会
パネルディスカッション

「学校——絶望？ 希望？」を企画して

11月23日の午後、世田谷女性センターで、久々の教育をテーマにしたつどいを持ちました。教育の問題は、暗い、重いと敬遠されがちですが、「学校がどうもおかしくなっている」と感じている人が多いのと、パネラーお二人にひかれてか、新聞の案内で知った方を含めて、六十名余の方が参加しました。

蔵本佳子さんと私は、教師と生徒、授業と生徒は噛み合うことができるのか、またどのような関係をつくり得るのか、すぐれた教育実践でも歯がたたないようになっている学校とは何なのか……ということとが話し合えれば、と願っていました。

パネラーには、Weの'88年五月号のインタビューに登場され『学校を疑う』等々多くの著書を出されている、定時制高校教諭の佐々木賢氏と、現在Weに「荒野のバラ」を連載中の元中学校教諭の田中裕一氏をお招きしました。そして、どちらかといえば、佐々木氏に「絶望」を、田中氏に「希望」を語っていただく、という趣向となりました。

初めに佐々木氏に「社会変化と生徒の意識変化」について、戦後から一九九〇年までの四十五年間の変遷を、独自のお考えに基いて話していただきました。戦後の混乱期ではあったが、生徒に授業への関心がみられた時代から、受験、序列化、資格志向、そして現在の「浮遊化」まで。これからの学校がどうなっていくかの指摘は、ことに教員からの共感を多く得たようです。田中氏は現在の若者の「荒れ」は、人権抑圧と差別の結果であるとされ、生徒と共に悩みを共有し、共生することが大切と話されました。また不合理なものは一切許さない、という姿勢を保ち、学校内外での様々な実践活動によって、学校の状況を変えてきたご自身の体験を情熱的に語られました。

引き続いての討議では、様々な立場の方から、パネラーへの質問、教師としての悩み、親の疑問など多くの発言があり、大変盛り上がりました。しかし、時間不足で十分な話し合いが持てず、パネラーにももっと話していただきたかった、という声も多く出ました。

このテーマで、来年のフォーラムに向けてさらに深めることができたらいいなあと願っています。

（梶原公子）

★「Weの会」総会報告

12月7日㈯東京・神楽坂の赤城社会教育会館にて「Weの会」総会が開かれた。関東はもとより、今のりにのっている関西から吉田・岩瀬・中村・北川・浅井さんが駆けつけ、過去最高の出席数を記録した。総会での討議は以下の通りです。

フォーラムの反省・感想—「女の解放・男の解放」の記録№2がほぼ完成している。分科会講師の謝礼は予算を計上した方がよいのでは、と提案された。

フォーラム会計—講師の謝礼がもう少し欲しい。施設費が意外とかかった。参加費の適正上限額は？ 等々の報告・感想が出された。

読者会—5月12日に関西の集い「NO！

といえる関係『ヨメ』『ムコ』『シュウトメ』スクランブル」を、関東では「男の役割くずし・女の役割くずしをどう進めるか」を持ち、11月には「学校—絶望？　希望？」を開催。いずれも夏フォーラムにつなげたいとの想いは大きい。

Weの会会計—一応黒字です。御安心下さい。

Weの会の今後—We誌が2・3月号をもって終了する事を受けて、Weの会の今後について話し合った。Weの会の存続及び機関誌については、夏フォーラム、読者会と既に準備で動いているので存続を前提として考えていったらどうか、という武田さんの発言の後、吉田さんが用意された機関誌素案を叩き台に各自検討、討論に入る。Weの会を存続させ、We誌の主旨、精神・交流を受けつぎながら、何らかの形で発行していこうと方向性を出す。

その中で出席できなかった方々から寄せられた案をも含めて（We誌に近い機関誌、Weの会だより形式、タブロイド版発刊、或いは発想の転換で他の出版社の軒先をかりるetc）いくつかの可能性を探った。その後具体的な編集発行体制、経営サポートシステム、出版物概要etcの検討、或いは自分自身がどこまで関われるかという検討をも含めて熱心に意見が交わされた。特に会計、名簿管理は専従の必要性が強く出された。Weの会で十分にまとまれば、稲邑、河村さんが編集に携わる可能性も生まれ、関東では中嶋・芦谷・若竹・磯部さん、関西では吉田・入江さんを中心に運営事務局準備会(仮称)を開き、12月、1月中に準備会を開催、更に具体的内容を稲邑・河村さんを含めて話しあう事になった。

尚当分の間若竹さんから自宅一室を提供するという心強い申し出があった。

「10周年のつどい」「パーティ」について—準備会を開き2月2日にむけて準備する。

ウイ書房がかかえている赤字について、心配する声もあがり、それについてはウイ書房の方から「単行本・Weの既刊誌を買うことで協力してほしい」ということでした。

（内山裕子）

☆「We」十周年のつどいのご案内

喜びも悲しみも幾歳月、とはオーバーですが、「We」十年の歩みをふり返り、さらに新しい出発を祝って、みだしの会を開きます。どうぞ、お仲間をお誘いの上、大勢の方がご参加下さるよう、ご案内いたします。

＊日時……二月二日（日）
昼の部…2時（1時半受付）—5時半
パネルディスカッション
夜の部…6時半—8時半
パーティ

＊場所……神楽坂エミール・鶴亀の間
（地下鉄東西線神楽坂下車3分
JR飯田橋下車15分）赤城神社隣
☎03・3260・3251

＊内容
パネルディスカッション
「学校—絶望？　希望？　シリーズ〝浮遊する若者たち〟」
講師…小沢牧子、斎藤次郎、佐藤通雅、今野隆子
参加費…八百円
パーティ（参加ご希望の方は今すぐウイ書房にお申込み下さい）
参加費…五千円

十字路

〈北海道〉「花魁道中は女性べっ視」（北海道10／25）

二十四日の札幌市議会決算特別委で、札幌の恒例行事・すすきの祭りのイベントが女性議員のやり玉に上がった。この夏に市長を表敬訪問した際、花魁が市役所ロビーでデモンストレーションを繰り広げたことに対し、「女性を商品化し、道具として見てきた差別の歴史を物語るもの」と指摘、「公共の施設を提供したのか」と迫った。市側は「あくまでイベントだが、批判は主催者に伝える」と答弁した。（高橋芳恵）

〈宮城〉『沈んだ村の物語』完結（河北新報11／30）

七ヶ宿ダムの建設に伴って湖底に沈んだ七ヶ宿町原地区の記録をまとめている佐藤石太郎さん(70)の労作『沈んだ村の物語』の第五集『離村に至るの道』が出版された。昭和四十五年七ヶ宿ダムの建設計画が地元に提出されてから、今年十月にダムが完成するまでの二十年余りの歴史を振り返った記録。

移転補償交渉をめぐる建設省と住民の駆け引き、住民の苦悩、移転の日の思い出、集落が水に沈む時の様子などが、百七ページにわたって丹念に記述されている。千七百円で希望者に販売。連絡は佐藤さん方 ☎0224-24-5658へ。（小野七瀬）

〈千葉〉『清澄』復活　主役は老人（朝日11／21）

鯛の町・安房郡天津小湊町が、戦後途絶えていた「清澄木炭」を復活させることになり、新たに完成した炭焼き窯出しが二十日行われた。お年寄りの仕事場確保のため老人クラブに委託、青少年の体験学習の場にも生かすという。森林資源活用の道も開けるので、一石三鳥の試みと期待されている。

女性の〝駆け込み寺〟資金難（朝日11／28）

木更津市の上総丘陵の一角に建つ洋風の二階建て「フレンドシップアジアハウス・こすもす」には、現在、カンボジアやフィリピン、ベトナム、中国などの母子七組が自立をめざし、元気に暮らしているが、公的援助がなく、入寮を希望する女性は増え続けているのに、このままでは資金的にも行き詰まると、支援を訴えている。連絡先は「こすもす」☎0438-53-5105（木田直子）

〈愛知〉戦友の慰霊碑ようやく除幕（朝日12／8）

幡豆町の三ヶ根山頂で八日、一つの戦没者慰霊碑が除幕される。この碑は、大平洋戦争中、フィリピン各地の前戦で兵器や弾薬を調達、補給する「裏方」の役をつとめた「第十四方面軍野戦兵器廠」の戦没者約千五百人の慰霊碑だが、建立にあたり、戦友たちの気持は必ずしもまとまってはいなかった。年金生活を送る人からは「一口一万円すら出せない」という声も出た。結局、「自分の人生もあとわずか。開戦五十年の機会をおいてほかにない」という人たちの熱意が実ったが、戦友会は年老いた人も多く、八月に出席できるのは約十五人だけ。五十年という歳月の長さを感じる除幕式になる。（山本直子）

〈京都〉差別戒名墓石を供養（朝日12／11）

「同和問題に取り組む府宗教者連絡会議（京都同宗連）は人権週間最終日の十日、東山区の浩徳院で、差別戒名を刻んだ江戸時代の墓石の追善供養をし、部落解放同盟府連合会の駒井昭雄委員長や各宗派の代表ら約五十人が出席した。（塚崎美和子）

ア・ン・テ・ナ

★ソ連邦消滅を宣言

ソ連ベラルーシ共和国で会談を続けていたエリツィン・ロシア，クラフチュク・ウクライナ両共和国大統領とベラルーシのシュシュケビッチ最高会議議長は会談最終日の8日，3共和国による新しい国家共同体の形成を決めた「独立国家共同体」協定に調印，1922年に成立したソ連の連邦国家としての消滅を宣言した。協定締結の8日をもって，3共和国内ではソ連の法律が適用されず，ソ連機関は活動を停止することをうたいこんでおり，これにより，これまでのソ連邦は事実上　崩壊，消滅した。ソ連がこれまで調印した条約などによる国際的義務のうち共同体にかわる部分は履行することを宣言しているものの，最近まで超大国とされていたソ連の喪失と，それにとってかわる独立国家共同体が誕生する。ゴルバチョフ大統領は25日，辞任を正式に表明。国際的波紋を広げるのは確実だ。
(12.9・22日付　朝日)

★ＰＫＯ法案―自公が強行採決

国連平和維持活動（ＰＫＯ）協力法案の焦点となっていた自衛隊の国連平和維持軍（ＰＫＦ）参加の際の国会承認をめぐる自民，公明，民社三党の折衝が27日夕，決裂し，自民，公明両党は同日夕の衆院国際平和協力特別委員会で同法案に修正を加えたうえで採決を強行，可決した。修正の内容は，部隊派遣決定から2年経過後に派遣続行の適否について，国会承認を求めるというのが骨子。政府の派遣決定そのものの適否は承認の対象ではないことから，「更新承認」または「継続承認」と呼ぶべき内容。同法案は28日の衆院本会議で可決され，参院に送られる見通しだが，採決強行に他党から強い反発がおきた。(11.28日付　朝日)

自民党は12月9日，今国会の会期延長を野党側と折衝する方針を固めたが，事実上同法案の今国会での成立を断念，ＰＫＯ法案は継続審議にもちこまれる可能性が大きくなった。（12.9日付　朝日）

★家庭教育の重視を強調

学校5日制の導入に向け，学校に代わる“受け皿”について検討中の文部省の「青少年の学校外活動に関する調査研究協力者会議」（主査・坂本昇一千葉大教授）は4日，「子供のしつけや人間形成の基本は家庭にある」――など家庭の教育機能の復権を強調する「中間報告」をまとめた。新たに休みとなる土曜に向けて，社会教育施設の無料開放など行政へも注文をつける一方で，「学校まかせ」に陥りがちな教育の問題点を指摘した内容は，社会全体に波紋を投げかけることになりそう。特に注目されるのは，同じ年齢の学級集団で計画的に学習する場としての学校教育の意義を確認しながら，「家庭や地域の教育力の低下に伴って，学校教育への過度の依存が進んできた」と「家庭の教育力」を強調している。
(12.5日付　読売)

★残業拒否で解雇は妥当

日立製作所武蔵工場（東京小平市）で'67年10月，残業を拒否するなどして懲戒解雇された元従業員が「解雇は懲戒権の乱用で無効」として，従業員の地位確認と解雇期間中の賃金の支払いを求めた訴訟の上告審判決が28日午前，最高裁第一小法廷（四ツ谷巌裁判長）であった。同小法廷は，民間企業で労働基準法36条に基づき，時間外労働を規定した労使協定(三六協定)が結ばれている場合の残業命令の適否について，「三六協定の範囲内で時間外労働を規定した就業規則が合理的なものである限り，労働者は時間外労働の義務を負う」とする初判断を示し，元従業員の請求を退けた2審判決を支持，上告を棄却した。(11.28日付読売)

★元従軍慰安婦ら日本政府を訴え

日本による植民地支配を受け，戦地にかり出された元慰安婦や軍人，軍属，遺族らでつくる韓国の「太平洋戦争犠牲者遺族会」のメンバー35人が，日本政府を相手どり，1人当たり2千万円の支払いを求める訴訟を東京地裁に起こした。（12.6日付　朝日）

●●●●●●●●●●●編集後記●●●●●●●●●●●

♠二期目の「We」の可能性を夏以来、編集部内で話合ってきましたが、残念ですがウイ書房から「We」を出すことは断念せざるをえませんでした。

なんとか継続させようと、拡販に協力して下さった方々、アイディア、助言、声援をおくって下さった方々、ガッカリさせてしまって、ごめんなさい。新たな「We」が別の形で産声をあげてくれることを期待しています。（青木）

◆ウイ書房に入って四年、数限りない方々との素敵な出会いがあって、思いきり燃焼できて幸運でした。ありがとうございました。でも、溢れる〝想い〟はあっても、足許が危うく、〝自立〟の二文字からは遠かったこと、心から恥じています。Weを継続させることができなくてごめんなさい。

Weのネットワークの再生にむけて自分は何ができるのか私の次の課題です。（稲邑）

♣二年と数カ月という短い期間でしたが、ウイ書房という職場は、私にとって最高の職場でした。ここに導いてくれた稲邑さんと、未経験の私を暖かく支えてくれた半田さん、青木さん、渡辺さんに感謝。そして、『十字路』でご協力いただいた方々ありがとうございました。

Weを読んでくださったすべての方々、いつかきっとどこかでSee you again.（河村）

♥「We」にかかわって一年と十カ月。編集部の方たちとのおしゃべりはとても楽しく、勉強になることばかりでした。

編集後記にいつも悩まされて、ウンウンとうなりながら書いた時もありました。自分の文を読むことは、とてもはずかしく、最初すぐに見れませんでしたが、とてもよい思い出になりました。皆さん、ありがとうございました。「We」にありがとう。（渡辺）

★八〇年前『青踏』創刊号でらいてうは、女たちに「他に依って生き、他の光によって輝く月」から「太陽へ」と呼びかけました。Weが志す家庭科なら応援しようという仲間を持ち、男女で学ぶ家庭科新時代という好機に、家庭科教師である方たち。どうぞ「月から太陽へ」、時代の主役として颯爽と生きて下さいますように。私も「家庭科ネットワーキング」の場を確保します。

★私たちは、いつまでも「同志」です。（半田）

Weバックナンバー

（在庫があります。ご注文は、最寄りの書店「地方小扱い」または、料金をおそえの上、振替で直接ウイ書房へ）

- 90／10　地域をよみがえらせる（¥567）
- 90／11　高齢化会社がやってくる（¥567）
- 90／12　マス・メディアは何処へ（¥567）
- 90／冬増刊号　出会いは歴史をつくる（¥721）
- 91／1　性役割の固定化は揺らいだか（¥567）
- 91／2.3　新しい家庭科を創る（¥567）
- 91／4　「教師」という仮面を脱ぐ（¥580）
- 91／5　少年・少女の現在（¥580）
- 91／6　心からからだへ（¥580）
- 91／7　生と死を授業で（¥580）
- 91／8.9　ひとと生殖（¥580）
- 91／10　買売春の構図（¥580）
- 91／11　アジアの中の私たち（¥580）
- 91／12　地球再生へ向けて（¥580）
- 91／冬増刊号　出会いは歴史をつくる（¥700）
- 91／1　揺らぐ家庭（¥580）

新しい家庭科―We
Vol.10 No.12　1992年1月20日発行
定価580円(本体563円＋税17円)送料共
年間購読料・定価7200円
編集兼発行人/半田たつ子

発行所/(有)ウイ書房
〒182 東京都調布市西つつじヶ丘2-25-14
☎・FAX03(3326)1380 郵便振替 東京6-59867
第一勧業銀行　調布仙川支店　普預1075292
印刷所/(有)岩佐印刷所〒112文京区春日1-6-7

新しい家庭科 We

一九九二年一月二十日発行
一九八二年六月十八日第三種郵便物認可

第十巻第十二号

定価五八〇円(本体五六三円)送料共

家庭科男女とも必修！
共学の授業づくりにWeが贈る

家庭科新時代

—Weからの提案—

小・中・高・珠玉の実践31編
男女共修の家庭科の授業で、
生活を大切にするあなたの座右に

半田たつ子編
2060円　〒310円

●男女で学ぶ新しい家庭科
—京都における歩みと実践—
森　幸枝
1339円　〒260円

●消費者教育の創造
宮坂広作
2060円　〒260円

●教室のミニ舞台から　児玉澄子
—こぼれ話20—
1350円　〒260円

●若いいのちの像　児玉澄子
—私のカウンセリング入門—
1339円　〒260円

●子どもって不思議　長谷川孝
—学ぶことは生きること—
1339円　〒260円

●私塾霞国語教室風景（もしかしたらちいさなじゅくはユートピア）
武田秀夫
1751円　〒260円

●人間って不思議　半田たつ子
—一つの視角—
1545円　〒310円

●木犀の匂う朝に　半田たつ子
1800円　〒260円

●子ども発、大人へ
—いま生まれる新しい関係—
「学習の主人公」＆小沢牧子
1339円　〒260円

●らくだが翔んだ　平井雷太
—教育の常識の非常識—
1236円　〒260円

〈羽生槙子詩集〉

●木、鳥、娘たちとわたし
1030円　〒260円

●絵　III
1030円　〒260円

●夢運び屋
1545円　〒260円

●花・野菜詩集
1648円　〒260円

ご注文は最寄りの書店に（地方小扱）。直接お申込みの場合は送料をお添えの上、振替で

ウイ書房
東京都調布市西つつじヶ丘2の25の14
電話 3326—1380　振替 東京 6-59867